

2023年度 教育研究助成 実践事例選

公益財団法人 東京海上日動教育振興基金

(<http://www.tmn-kyoiku-sinko-f.org>)

ご 挨拶

当財団は、次代を担う青少年の育成に携わる教職員の方々が行う各種の実践的教育研究に対する助成を通し、いささかでも教育の振興に資することを目指すとともに、不幸にして交通遺児となり経済的困難に直面している児童生徒に対し教育費の一部を援助することにより育英の一助とすべく、1984年8月に設立されました（2009年10月「公益財団法人」へ移行）。

爾来、多くの関係者よりご支援をいただき、更には東京海上日動火災保険株式会社が経営理念の一つとして掲げている「良き企業市民として、地球環境保護、人権尊重、コンプライアンス、社会貢献等の社会的責任を果たし、広く地域・社会の発展に貢献する」との理念とも相俟って、教育振興事業を積極的に進めてまいりました。創業以来の助成件数は、教育研究助成7,352作品、交通遺児育英助成4,605名となっております。

我が国を巡る状況は、社会経済のグローバル化やデジタル化、急速に進む少子高齢化等により大きく変わってきております。その中にあるのは、次代を担う子どもたち一人一人が、初等中等教育課程においてしっかりとした基本基礎を培い、新しい時代に求められる生きる資質や能力を身につけることが何にもまして重要であります。そして、これを担う教職員各位の役割はきわめて大きく、子どもたちが学習意欲を高め、自ら考え発信し行動する力や心豊かに逞しく生きる力を育む教育の実践に一層のご尽力が期待されるところであります。

当財団では、毎年、学校教育において意欲的に取り組み創意工夫に溢れた指導によって顕著な成果を収めている実践研究に対し助成を行っておりますが、2023年度の助成作品の中から、それぞれの地域・学び手に即して優れた取組が認められる作品5編について当冊子に取り纏め刊行いたしました。この冊子が、いささかなりとも皆様方のお役に立つことが出来れば、誠に幸いに存じます。

最後になりますが、刊行に当たりご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2024年4月

公益財団法人 東京海上日動教育振興基金

理事長 大塚 竜二

目 次

【学校研究の部】

- 深く考え行動する生徒の育成を目指して …………… 1
～「生徒」が主体的・対話的で深い学びに取り組む授業づくりと
プロジェクトNの活動を通して～
神奈川県横須賀市立長沢中学校 校長 小番 奈緒美

- 学校の教育活動全体で行うキャリア教育の推進について …………… 19
～生徒が持つ資質・能力を最大限に伸ばす教育活動の提案～
長崎県南島原市立口之津中学校 校長 大嶋 博之

- 未来の創り手に必要な資質・能力を育成する授業デザイン …………… 39
～「ジリツした学習者」としての生徒の育成を目指して～
鹿児島県鹿児島市立吉田南中学校 校長 塚元 宏雄

【個人研究の部】

- 小学校第5学年の生命区分における生態学の追究 …………… 59
～オイカワを扱った動物物語の編集～
静岡県三島市立山田小学校 教諭（再任用） 野口 厚

- 地域の未来を賭けた「鳥工版 STEAM 教育」の実践 …………… 73
～どうすれば「STEAM 教育」はうまくいくのか～
鳥取県立鳥取工業高等学校 主幹教諭 尾崎 昭彦

研究題目

深く考え行動する生徒の育成を目指して
～「生徒」が主体的・対話的で深い学びに取り組む授業づくりと
プロジェクトNの活動を通して～

目 次

- I はじめに
- II 研究主題について
 - 1 研究主題
 - 2 研究主題の設定理由
 - 3 研究構想図
 - 4 これまでの研究の流れ
- III 研究の実際
 - 1 「生徒」が主体的・対話的で深い学びに取り組む授業づくり
 - 2 ルールメイキングを通じた課題解決する力の育成
「プロジェクトN-未来を創る校則をつくる」
- IV 研究の成果と課題
- V おわりに
- VI 参考ホームページ・参考文献

神奈川県横須賀市立長沢中学校 校長 小番 奈緒美

I はじめに

本校は平成31年度より4年間、横須賀市教育委員会フロンティア研究の委託を受け、西留安雄氏(高知県教育委員会スーパーバイザー)をスーパーバイザーとしてお招きし、「“生徒が”主体的・対話的で深い学びを視点として取り組める授業づくり」～全教職員が行う自発的な学習集団の構築～を目指し、具体的な授業のあり方について、研究を行ってきた。

また、令和4年度は、特別活動において、神奈川県教育委員会より、「小・中学校における政治的教養を育む教育」の実践校の委託を受け、西野偉彦氏(慶應義塾大学SFC研究所上席所員)をスーパーバイザーとしてお招きし、「“校則の見直し”を通して自分の考えを再構築する」というテーマのもと、政治的教養を育む教育の研究を行った。

そして、それぞれの委託から離れた令和5年度も、引続き本校の研究のテーマは「深く考え、行動する生徒の育成を目指す」とし、衰退することなく更に発展することとして共通認識をもち、特色ある学校づくりを進めている。

II 研究主題について

1 研究主題

深く考え行動する生徒の育成を目指して
～「生徒」が主体的・対話的で深い学びに取り組む授業づくりと
プロジェクトNの活動を通して～

2 研究主題の設定理由

「学ぶ」とは何か。自分の知りたいことや考えたことを追究していく中で知識や技能を身につけ、問題を解決していくことである。自ら調べ、考え、獲得した知識や技能は確実に身につく。授業はその学びを実現する場である。つまり、問題解決型の授業こそが、「生徒が」主体的・対話的で深い学ぶ場面を生み出す。従来の問題解決型は、3段階(導入・展開・終末)や4段階(問題把握・自力解決・集団解決・まとめる)が多かった。これでは、子どもが具体的な見通しを立てることができない。そのため、本研究では、学習過程を細分化し、「Ⅰ. 見通し」(問題の提示・問いの共有・学習課題)「Ⅱ. 解決活動」(自力解決・集団解決)「Ⅲ. まとめ」(価値の共有)「Ⅳ. 振り返り」(振り返り・練習問題・補充・発展)の流れを授業に取り入れた。このように、問題解決型の授業は以前から推奨されていたものの、授業の改善には至らなかった。そこで、教科横断的、生徒主体の授業改善を図るために、生徒が教師を頼らず自分たちで授業をアクティブに進める授業を目指した。本時の課題を設定し、一人で考え、仲間と情報交換をして自分なりにまとめて振り返りをする授業を展開する「長沢スタンダード」としての授業スタイルを確立・実践し、今年度5年目を迎えた。

また、令和4年度から生徒が主体となって校則の見直しを行う活動を、年間を通し

て学校全体で行い、この取り組みを「プロジェクトN」と名付け、自ら考えて行動する生徒の主体性を育む取り組みを進めた。

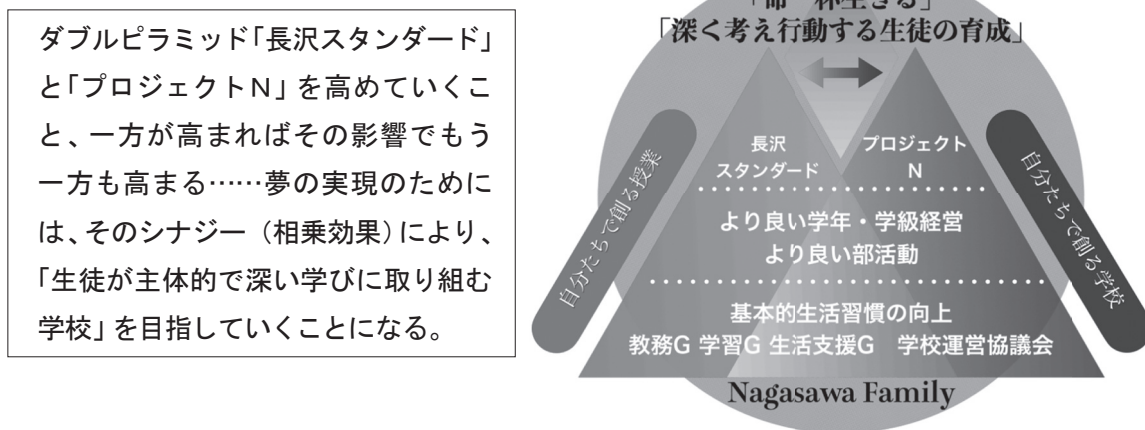
本校の生徒は、今ある髪型、服装、装身具などの校則に対して、ルールを守っていてもどうしてそのルールがあるのか疑問をもたなかったり、疑問があってもルールを変えられるとは思っていなかったりする現状があった。

そこで、生徒が主体となって校則の見直しを行う中で、他者の考えを尊重しながら、自分の考えを再構築するプロセスを繰り返したり、自らの思いを表に出せる機会をつくったりすることで、生徒がルールの意味を考えたり、学校のことを自分のこととして考えることにつながると考えた。

実践にあたっては、生徒会役員が主導する一連の活動を教員が支援しながら進めていった。全校生徒の思いを聞くところからスタートし、個人で考える機会や班で考える機会も大切にしながら、学級での話し合い、生徒総会で全校生徒が一堂に会して話し合う機会も意図的に設定し、意見を再構築させながら議論を深めていった。

前述の「長沢スタンダード」の授業スタイル確立と「プロジェクトN」の取り組みを通して、生徒の主体的な活動を設けて、「深く考え、行動する生徒」の育成を目指していきたいという考えから、研究主題を設定した。

3 研究構想図



4 これまでの研究の流れ

(1) 長沢スタンダード

- 1年目：サブテーマ「新学習指導要領に合わせた授業の構築」
 - ・先行研究(熊本・高知・東京視察)をもとに、長沢ベーシックを構築する。
 - ・黒板グッズの統一
 - ・学習リーダーが原稿を読み、授業を展開する。
- 2年目：サブテーマ「全教員が行う、自発的な学習集団の構築」
 - ・全教員・全学年・全教科で、長沢スタンダード(←長沢ベーシック)に挑戦する。
 - ・年に10回以上の研究授業(各教科・各学年・全校)を行う。
 - ・「まとめ」「ふりかえり」の実践

- ・司会原稿の簡略化(自分の言葉で言えるようにする)
- 3年目：サブテーマ「生徒による授業反省会の構築」
 - ・生徒が授業を振り返る(授業反省会の実施) 研修会への他学年生徒の参加
 - 深い学びに取り組むものだったかをまとめ、その成果・課題・改善点をもとに、次時授業のレベルアップにつなげる。
- 4年目：サブテーマ「教科の特性を生かしたセルフ授業の追究」(委託最終年)
 - ・長沢スタンダードの確立と定着
 - ・教科の特性を活かした工夫
 - ・セルフ授業の追究
- ※セルフ授業とは

「生徒が授業を創る学習＝セルフ授業」(イメージとして、セルフレジ・セルフガソリンスタンドのように、生徒たちが授業者を頼らず自分たちで進めるもの)

生徒が学び合いの中で自分の考えと違うときは相手に質問し、仲間と心を通わせ話し合い、分からない仲間に教える。生徒が主体的な授業を創るためには、生徒自身が学び方を習得する必要がある。それには、授業者側に時間や労力がかかる。しかし、一旦生徒たちが学び方を身につければ、自分たちですいすいと授業を進めることができる。
- 5年目：サブテーマ「教科の特性を活かしたスマートレッスン(←セルフ授業←長沢スタンダード)での評価の在り方」(本年)
 - ・単元計画から「生徒が」課題を考え、司会進行を進めていくスマートレッスン(←セルフ授業←長沢スタンダード)の確立
 - ・生徒と共に歩むマナフリシート(単元・題材計画)の活用
- ※スマートとは

粋・態度が洗練されている様・賢い・高機能(広辞苑より)

→近未来的な・新時代のという意味が込められている。

(2) プロジェクトN

- 1年目：サブテーマ「校則を見直す」
 - ・政治的教養を育む教育の研究「シチズンシップ教育 指導用参考資料」の活用
 - ・柱の設定、現行校則の見直し
- 2年目：サブテーマ「豊かな学校生活を送るには」
 - ・学校生活の主体性プロジェクトNへ方向転換、柱の見直し
 - ・グループや学級での話し合いの仕方の学び、生徒総会から議会の仕方の学び

Ⅲ 研究の実際

1 「生徒」が主体的・対話的で深い学びに取り組む授業づくり

本校の研究で目指す授業は、「生徒が」教師を頼らず自分たちで授業をアクティブに

進める授業を展開するものである。長沢スタンダードの学習過程は①問題の提示、②問いをもつ、③課題の設定、④問いの共有、⑤自力解決、⑥集団解決、⑦まとめ、⑧振り返りの流れになる。この流れを教師が主導するのではなく、子どもたちが自ら進行していく。まず、教科係が学習リーダーとなり、授業を進行する。教師は、学習リーダーが進行する内容について、司会原稿を作成したり、黒板グッズを使用して授業の流れを板書したりする。学習リーダーは、資料から自分なりの方法でその資料の傾向を説明する方法を考える。黒板グッズは全教科で使用され、どの授業でも黒板グッズを使用した流れになっている。

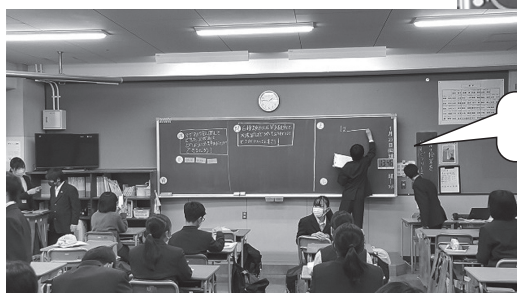
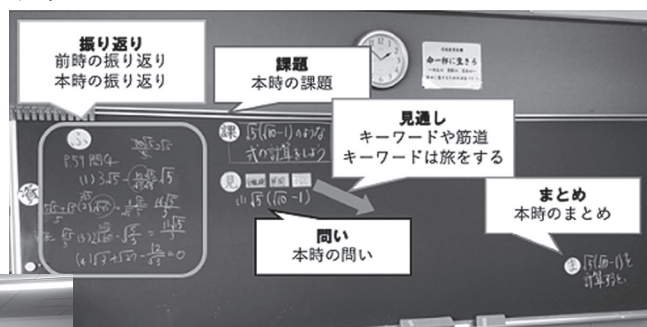
生徒は、本時の問いから課題を設定する。また、問いと課題が提示されたら、本時のまとめの書き出しを考え、見通しをもつ。見通しには本時に使用するキーワードを考え、出されたキーワード(教科用語)を用いながら授業を進めていく。

(1) 長沢スタンダード＝長沢中学学習形態について

① 板書の統一

教師は、教科係(学習リーダー)が進める内容について、司会原稿を作成したり、黒板グッズを使用して授業の流れを板書したりする。

黒板グッズ



生徒が板書をする事も多い



教科係(学習リーダー)が授業を進めていく

② 学習リーダーのあり方

生徒は、本時の「問い」から課題を設定する。また、問いと課題が提示されたら、本時のまとめの書き出しを考え、「見通し」を持つ。見通しには本時に使用するキーワードを考え、出されたキーワード(教科用語)を用いながら授業を進めていく。



③ 前時の振り返り

前回の授業はどのような授業で、自分自身が考えたことを近くの人と共有

する。時間は約1分～約2分ですが、前回の復習になったり、本時の取り組みに向けての意欲が変わってくる。

④ ペア・グループ学習

課題解決に向けて、一人ではなくペアやグループで取り組む。その中で、パソコン(ChromeBook)やホワイトボードを活用して、グループ内で意見交流を行う。分からないことは気軽に聞ける環境が整っていて、誰一人寝てしまうことなく、取り残されることなく、一生懸命取り組んでいる。学習リーダーは全体をみて、タイムキーパーとしてグループ学習をする時間を決める。延長をすることもある。



⑤ 取材・偵察

グループの中で、話しがまとまらなかったり、他のグループの意見が聞きたい時に、学習リーダーが時間を決めて、意見交換に行く。グループ内で出てこなかった考えや、分からなかったことが解決する機会になる。他のホワイトボードに付け加えることもある。「ぶらぶらタイム」と呼んでいる。



⑥ 全体共有

課題解決のための全体共有として、「ゼミナール」方式をとっている。2列ごとの「号車」で「ゼミ」をつくり、グループ内で考えたことやまとめたことを発表したり、付箋(ポストイット)に考えを書いて、それを模造紙やホワイトボードに場合分けをして貼ったりして、思考力を深める。自分自身が全く予期していなかった意見や考えに出会うことができる。

⑦ まとめ・ふりかえり

本時の授業の『まとめ』を、短い文章で書く。その際に、設定されているキーワード(教科用語)を使って記入する。もしわからなければ、「取材・偵察」をして仲間に訊きにいく。このことを行うことで、本時の授業は何が大事なことだったのか、また、家庭で復習をす



るときに非常に役立つ。『ふりかえり』は本時の授業の感想をできるだけ多く書く。感想だけでなく、授業を通しての自分の考えを書くことで、定着にもつながる。



主体的・対話的で深い学びをするための手段と欠かせないものとなっている。

⑧ ChromeBookの活用

一人一台のPC『ChromeBook』を活用し、わからないことを調べたり、ミライシードと呼ばれるソフトを使って意見交換ができた、Google Classroomを使って授業内容を確認したり、課題提出をしている。どの授業でもChromeBookが活用され、「生徒が」主

(2) 研究5年目の研究実践から(本年)

令和4年度で4年間のフロンティア研究が終わり、研究助成金も減額してしまう、研究に携わってきた教員の異動も重なり、ピンチの中で始まった令和5年度だが、「現状維持は衰退と同じである」を合言葉に、更に追及し実践を積み重ねていくことを決意し、令和5年度は単元計画から「生徒が」課題を考え、司会進行を進めていくスマートレッスン(長沢スタンダード)の確立をめざしている。

長沢中学校 マナフリースート
3年 第3章 2次方程式
学習テーマ 方程式を利用して問題を解決しよう

【主な学習内容】

二次方程式とその解(平方根の考え方を使った解き方)	正負性/大小/分離/多角形/多角形/多角形/多角形	二次方程式の必要性和意味およびその解の意味を身に付けている。
二次方程式の応用(図形問題を解く際の考え方)	図形問題/面積/長さ/角度/相似/合同	図数分離や平方根の用、解の公式などを用いた計算をすることができる。
いろいろな二次方程式/二次方程式の利用	図形問題/面積/長さ/角度/相似/合同	図数分離や平方根の用、解の公式などを用いた計算をすることができる。

【単元の学習目標】

- 二次方程式の必要性和意味およびその解の意味を身に付けている。
- 図数分離や平方根の用、解の公式などを用いた計算をすることができる。
- 図数分離や平方根の用、解の公式などを用いた計算をすることができる。
- 二次方程式を具体的な場面で活用することができる。

【単元の学習目標】(学習の状況)

時	学習内容	認識	思考	表現	応用
1	リーグ戦に参加しているチーム数は?	○	知		
2	2次の項を含む方程式について考えてみよう!		知		
3	2次方程式を効率よく解く方法を考えよう!		知		
4	乗法公式を用いて解く方法を考えよう!		知		
5	小テスト		思		
6	$ax^2+bx+c=0$ を解いてみよう!		知		
7	解の公式を使って2次方程式を解いてみよう!		知		
8	因数分解を使って2次方程式を解いてみよう!		知		
9	2次方程式の解き方を振り返ろう!		知		
10	小テスト		思		
11	短に道路をつくらう!		思		
12	2次方程式を利用して数に関する問題を解決しよう!		思		
13	2次方程式を利用して直方体の容積に関する問題を解決しよう!		思		
14	単元テスト		思		

**生徒と共に歩む単元計画
マナフリースート**

学習テーマの範囲に収まりつつも、新たな情報、解決できなかったことなども取りこむこと。また、学習の進捗に応じて、柔軟な対応ができるようにしておく。

2 ルールメイキングを通じた課題解決する力の育成 「プロジェクトN-未来を創る校則をつくる」

(1) 1年目の取り組み

① 目標

- ・ルールメイキングを通して、主体的に課題解決する力を育てる。
- ・他者と関わりながら、自分の意見を再構築する力を育てる。

② 柱の設定

「プロジェクトN」を始める前に生徒会役員と共に校則の見直し(ルールメイキング)を行う際に必ず立ち戻らなければならない「柱」の設定を行った。

主に教師からは「持続可能な校則」であること、3年生は卒業後に校則が変わる可能性があることから「これから先も長沢中に誇りを持てる校則」であること、「全員が納得する校則」であることの3点を伝え、生徒会役員の中で次頁の「柱」が完成した。

③ 現行の校則の見直し

学校は生徒たちにとって最も身近な「社会」であり、校則は最も身近な「ルール」の一つであるといえる。生徒自身が「なぜこのルールがあるのか」「どうすれば自分たちの学校生活をよりよくできるのか」といったことを見つめ直し、「自分たちで決めた(変えた)」という経験は、生徒たちにとって、将来「社会を創る(変える)ことができる」といった、主権者として社会に関わろうとする意識の涵養にもつながる。

実際に「生活のきまり」から校則への疑問を挙げさせたところ、たくさんの意見が出てきたが、「自分中心の意見」だったり「今の生活に不自由だから」「変えたいから」という趣旨とは反する答えも多々見受けられた。

また、生徒の記述と同じように教員間でも現行の校則の意味を理解していなかったり、必要性を感じていなかったりするため、まずは現行の校則の意義を再確認するところから始めた。

実践にあたっては、生徒会役員が主導する一連の活動を教員が支援しながら進めていった。全校生徒の思いを聞くところからスタートし、個人で考える機会や班で考える機会も大切にしながら、学級での話し合い、生徒総会で全校生徒が一堂に会して話し合う機会も意図的に設定し、意見を再構築させながら議論を深めていった。

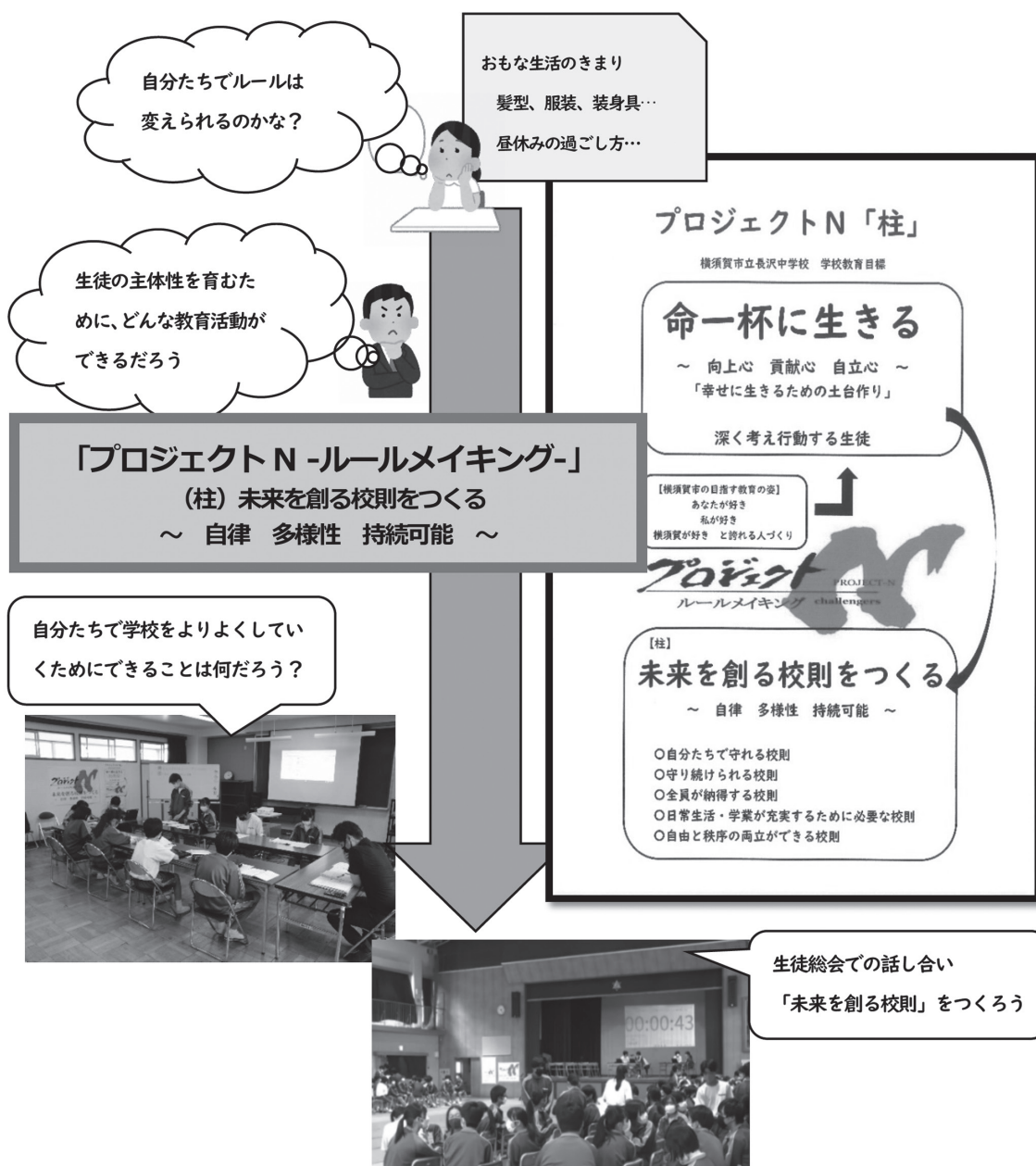


↑どの校則を検討するか話し合い



↑クラスでの話し合いの様子





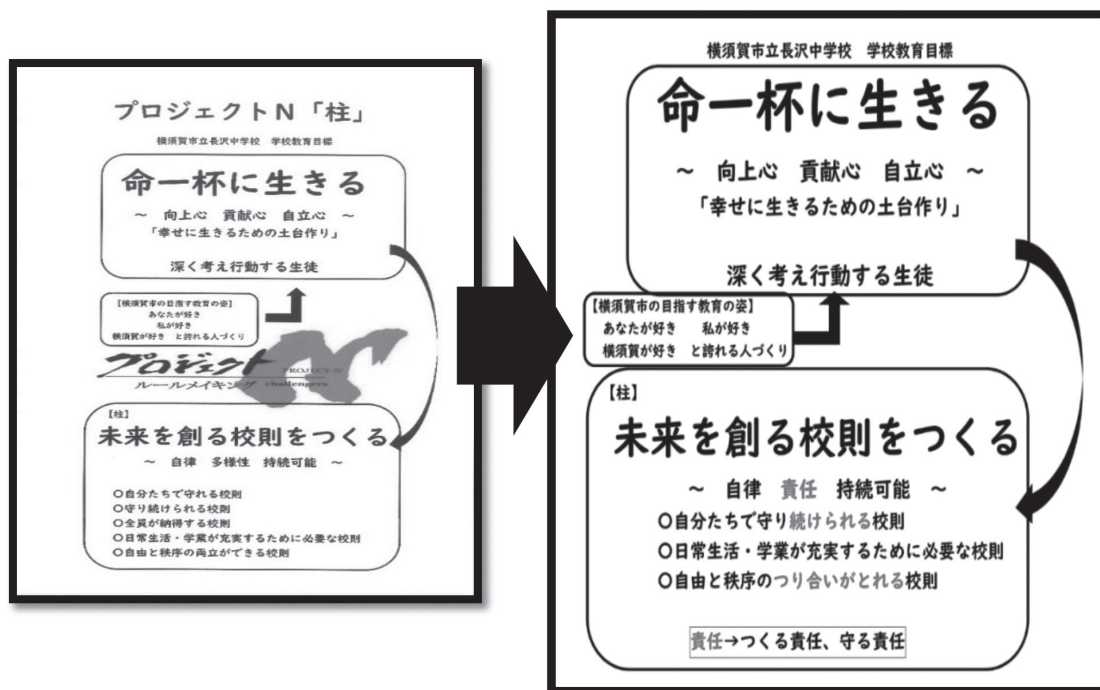
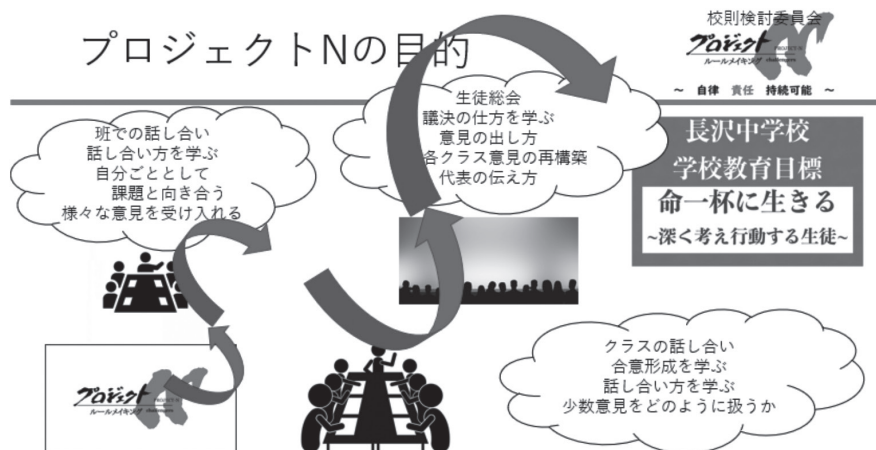
(2) 2年目(本年)の取り組み

① 目標

- ・話し合い・合意形成・自分事として考える・意見を再構築する。
- ・長沢中学校について主体的に考える力を身につけさせる。
- ・話し合いの仕方を学び、主権者としての「動き」ではなく「中身」を考える。

② 目標・柱の見直し

1年目の検討を終え、生徒が「校則を変えた」という事実に満足して新たな取り組みを考えない現状があった。そこで、再度「校則の見直し」を行う意味を考えると、昨年度のプロジェクトNを振り返ることでこれからの長沢中学校について自分事として考えてもらうきっかけになると考えた。



③ 議論の焦点化

実践にあたっては、生徒会役員を主導に学級議長団や全体の議長団の司会進行の仕方や学級での話し合いの仕方に着目し、意図的に見通しを持つ話し合いを作り、意見を再構築しながら議論を進めていった。

その中で、「校則の見直し」という枠から外れて「豊かな学校生活」という意味での『プロジェクトN』が良いのではないかという意見から、2年目の今年度は

1. 昨年度決まった「廊下の開放」の見直しで議決の仕方を学ぶ。
2. 「豊かな学校生活を送るため」Chromebookの持ち帰りから話し合い方を学ぶの2本の議題で生徒総会を行うことにした。

④ 生徒の活動の流れ

日程	内容	生徒会	議運
5月12日	柱の確認 ①廊下の分析 ②Chromeの分析	廊下の現状分析 Chromebookについてどのように思っているか集約	意見集約の方法をまとめる Formの場合は作成しておく
5月19日	①原案の提示 ②クラスの話し合い	分析の結果、話し合うことができる原案の提示	クラスの意見を集約する
6月2日	クラスの意見出し	分析結果やクラスの方向性を話し合う。	クラスの意見を集約し、全体に伝える。
6月5日	①クラス態度の決定	原案の再度提示 クラス態度の決定を促す	集約したクラスの意見をまとめておき、クラス態度の決定をする材料を用意する
6月8日	①議論の見通しを持つ	各クラスの状況から学級委員が総会の見通しを持ちながらクラス態度を見直す。	各クラスの意見を集約
6月9日	生徒総会本番	原案の再度提示	

⑤ 話し合い指導案

ア 学級での話し合い

6.8(木)6Hの内容

当日に向けて意見の見直しを持つ。

日時：6月8日(木)6校時目 HR

場所：各教室

準備するもの：筆記用具・chromebook

生徒会・議長の話の際に「各クラスの生徒総会クラスルーム」に資料を載せておくので見ながら話を聞くようにしてください。→見解などが載っています。

流れ(議事運営委員会クラスルーム meet に各クラスの議事運営委員 or 教員のクロームをつなげておく)



時間	流れ	留意事項
14:40	号令	担任より少し話
14:43	①本日の流れ説明(峰村)	生徒会・議長団より(meetで話します)
14:50	②I 今出ている原案(生徒会) II 修正案について再度説明(議長団) III 修正案についての生徒会の見解(生徒会) ③明日の見直し(流れ)について説明(議長団)	司会：峰村 議長団 生徒会 議事運営委員会
14:50	討議1(廊下について)	当日の流れは 1. 原案V S ルールなし 2. 原案V S ルールを作る になるので、1・2のどちらでも意見を 言えるように準備する。 ・クラスで当日発表する内容・発表者を 決める。 ※各担任より次の生徒総会は体育館で全 校生徒の前で発表することも伝える。
15:10	①原案・修正案①・修正案②のどれに賛成か6人班で簡単に話し合い、クラスで採決をする(3分) ②I 自分たちの意見を持つ。 II 自分たちの意見がくるか考える III 反対意見への意見を考える ※A3の下の資料と同じ紙を用意するので、上3つは各班ごとに考えていく。(10分) ③原案とその他の修正案に対してクラスの意見(見解)を考える。 ④横道紙を完成させる。	議決①廊下について 年 組

15:10	討議2(chromebookの持ち帰り)	
15:28	①各クラスで持ち帰りに賛成 or 反対に分かれる。 ②WBに必要だと思う意見を書く。3~5つ程度? ③WBを見せ合う、発表する。 ④自分たちとは逆の意見に対して意見を考える。(WBを交換し、下に赤ペンで見解を書く。 ⑤議運は chromebook で写真を撮っておく。	①②クラスを2分割し、人数によってホワイトボードの数を変えて書かせる。 ④WBを交換し、反対意見に対する意見を書く。 ・クラスで当日発表する内容・発表者を決める。
残り時間		各クラスの生徒会 or 担任からまとめの話

- ※討議①別紙フローチャートの空いている部分の意見をすべて考えて担任の先生へ渡す。(紙)→担任の先生がチェックし、OKならば議事運営委員がフォームを記入する。
- ※討議②各クラスで出た賛成・反対の意見(3~5つずつくらい?)をすべてフォームで送る。→WBに書いてあるので、担任の先生はそのときにチェックしてあげてください。
- ※討議③出た意見の返答を考える。
→(別紙に記入し、担任がチェックする)良ければ議事運営委員がフォームで送る。

大切にしたいこと

- ①審議は遠い方の意見から採決を行います。全ての修正案に意見を言えるような準備(見直し)を持つようよろしくお願いします。
→意見を言って終わりにならないようにしてください。その意見に反対意見は何があるか、その返しはどうするか、見直しをもつところが主権者教育です!!
- ②討議は意見出しになる可能性がありますが、クラスで賛成・反対に分かれて話し合いをしてください。
→出た意見にもう一度建設的な意見を持つことを大切にしてください。
- ③廊下のルールをどうするか・クロームの持ち帰りは現実的なのか?よりも生徒が自分事として考えられているかどうか、他者の意見を聞いて自分の意見を再構築できているかどうかを大切にしていきたい!!
- ④各クラスの議長団と事前に打ち合わせをして流れの確認と経験を積ませてあげてください!!
そして、「深く考え行動する生徒」の育成を目指していきましょう!!

イ 生徒総会指導案

時間	流れ	確認事項
10:40～	1年1組～3組 → 2年1組～3組 体育館移動を開始	体育館の隊形①（教室の隊形）椅子は準備済み
10:45～	3年1組～3組 体育館に移動を開始	
10:50～	生徒総会開始 議事運営委員 開会	
10:55～	審議①「廊下の開放について」 原案 vs 修正案② 原案の発表（生徒会） 修正案②について発表（1-3, 3-2） 審議開始（数回の意見交換を繰り返す） プラカードをあげて、意見を出す 採決 修正案②に賛成の生徒は起立 修正案②が可決の場合は審議①終了 修正案②が否決の場合は審議を継続 原案 vs 修正案① 修正案①について発表（2-1, 2-2）	
審議①の 進み具合 によって 異なる。	隊形移動 討議②「Chromebookの持ち帰りについて」 持ち帰る派 持ち帰らない派 持ち帰りたいと考えている理由説明 持ち帰らないと考えている理由説明 各クラスのリーダーがプラカードをあげて 意見を言う。 討議開始（数回の意見交換を繰り返す）	



IV 研究の成果と課題

成果

1 「生徒」が主体的・対話的で深い学びに取り組む授業づくり

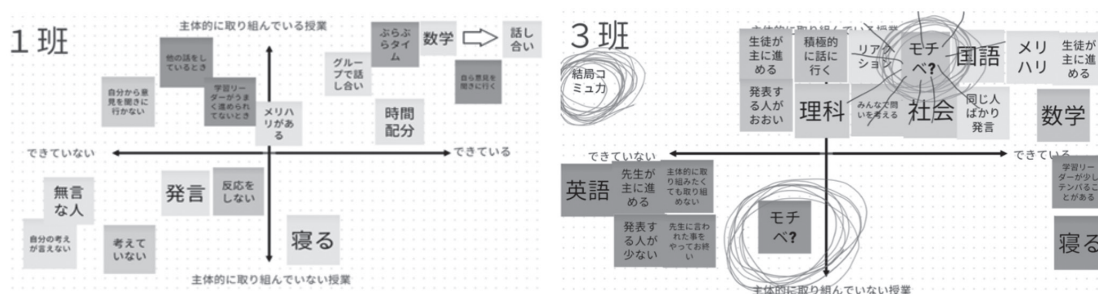
① 生徒の学習が変わった

生徒が自ら主体的に取り組む授業は「生徒が主に進める授業」であると表現している。その中でも、学習リーダーの必要性やぶらぶらタイムの活用などが主体的な学習に欠かせないことを記述している。主体的ではない授業は、教師主導型であることを生徒も同様に認識していることが明確になった。

教師として、生徒と関わる中で、すぐに教師に質問に来る生徒は皆無となった。仲間と相談しながら解決する姿勢が見られ、本来の学習する姿へと変わってきている。その姿こそ、学びに向かう力や粘り強さである。与えられた課題にどのように向かい、「まとめ」や「振り返り」までたどり着くか。到着地点は授業中に生徒全員で考えたからこそ、そこに辿り着きたいという意欲が見られるようになった。一人の力だけでなく、仲間の考えを聞いたり、意見交換をしたりする中で、到着地点に向かっていく。それは本来の学びそのものである。この授業形態は、授業だけのものではなく、教師がいるか否かに関係なく、生徒が主体的に取り組む形式になっている。

また、授業の最後に行う、振り返りが授業の感想程度にとどまっていたものが、ChromeBookを用い、Jamboardによる振り返りを重ねることで、相互評価が行われることから、調整力、粘り強さ、探求心等が読み取れる内容の振り返りに変化した。

自分たちの授業についての振り返り



② 教師の協議が変わった

校内研究授業を行うと、「私たち〇〇科は…」というような発言が多く、内容が深まらない協議になってしまふことが多い。しかし、同じ黒板グッズを用いることや「問いの提示」から「まとめ」「振り返り」の流れを全教師が行うことで、協議する視点を焦点化することができた。「〇〇の場面で生徒を動かしてみるのはどうだろうか。」「この場面で、生徒はアクティブに活動していたよね。」「生徒からキーワードを出すと興味を持たせることができたのではないか。」など、教科横断的な協議が行われている。この研究により、現行の学習指導要領が求めている教科横断的活動を生徒も教師も行うことができると実感できた。

③ メディア掲載の効果

長沢スタンダードの取り組みは、news zero (日本テレビ) やBenesseからも「先進的な事例」として大きく取り上げられ、生徒の自己肯定感を高める要因になった。

2 プロジェクトNの活動

① 主体的に新たなことにもチャレンジしようという姿勢が増えた

生徒が「自分たちの力で校則を変えられる」ということを実感することができたことにより、何事にも批判的な思考(クリティカルシンキング)で考えられるようになったと感じる。また、生徒ももちろんだが、教員間でも校則の見直しについて考える機会となった。※校則検討や授業以外でも活躍する生徒が増えた。

② 生徒総会への関心が変わった

今までの生徒総会では既定路線で終始していたが、議題に対して自分ごととしてとらえたため、生徒たちがそれぞれ前向きに考えながら議論することができた。社会に参画しようとする意識の涵養につながる取組となった。

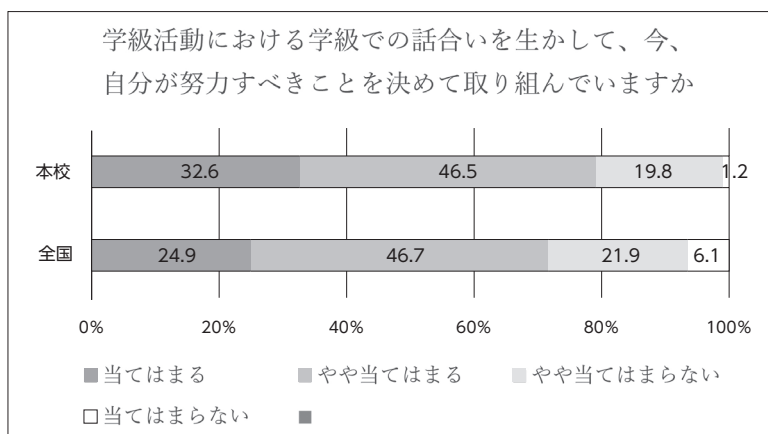
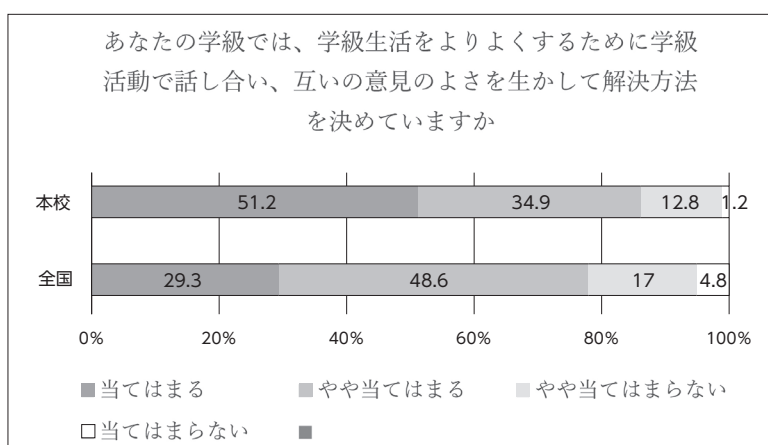
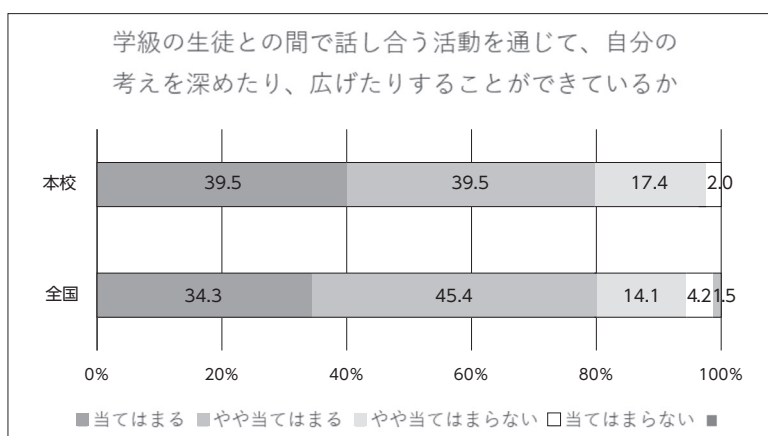
③ 解決の方策を考えるようになった

議長団が事前に各学級の意見を把握していたため、意見の重複を避けたり、また

は対立する意見を両方取り扱うように調整しながら議事を進行しており、合意形成のプロセスを意識した取組となった。また、自分のクラスの意見を強固なものにするためにはデータや資料が必要なことに気づき、行動に移すことができた。

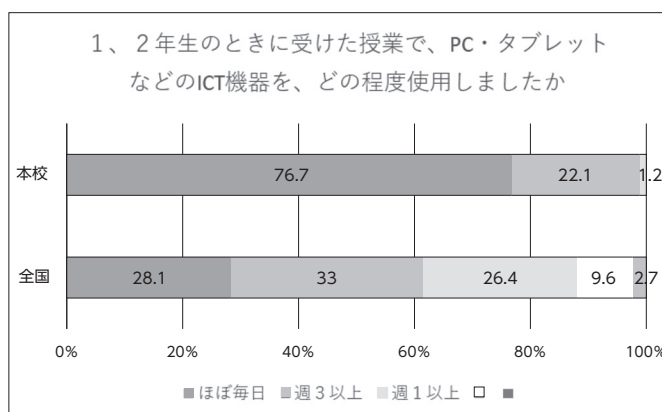
3 全国学習状況調査の結果から

令和5年度の全国学習状況調査生徒質問紙の回答で、本実践と深く関わりのある以下の3項目は、全国平均と比べ上回っていた。



4 ICTの活用

本研究は、コロナ禍での取り組みだったが、生徒の学びを止めない点を1番に考え、一人一台端末の利用を積極的に行った。令和5年度の全国学習状況調査生徒質問紙の回答でも明らかだが、全国平均と比べ大きく上回っている。他者の考えを取り入れたり、自身の考えを意味づけたり、子ども同士の活発な意見交換が可視化され、より考えを深めることになり、ICTの活用によって主体的な学びの促進につながったことは確かである。



学習指導要領で明確になった育成を目指す資質・能力の大きな柱の一つが「学びに向かう力」である。この結果から長期的な研究を通して、生徒が自ら考え主体的に行動し、教師と共に学びに取り組む授業づくりと、プロジェクトNの取り組みにより、話し合い・合意形成・自分事として考える・意見を再構築するといったプロセスを実践してきたことから、本研究実践は、深く考え行動する生徒の育成に大きな影響を与えていると考える。

課題

1 「生徒が」主体的・対話的で深い学びに取り組む授業づくり

① 学習課題の設定の重要性

生徒に授業を進行させるためには、学びを継続できる課題を設定しなければならない。そのためには、教師の教材研究が欠かせない。私も様々な授業を展開してきたが、「課題」や「問い」が生徒の興味関心を高めるものでなければ、授業が深まらず進行も単調になってしまう。例えば、今回実践をした2次方程式の導入ではリーグ戦の題材を用いた。チーム数を求めさせるだけの課題である場合は、生徒の進行はどのようになるだろう。決して内容が深まらず、チーム数を求めて終わりになってしまう。しかし、日常の話題から問いを設定することで、授業の深まりが変わる。そのため、生徒にただ授業の進行をお願いするだけでなく、教師側が「生徒がこのように粘り強く考えてほしい」という願いを込めた課題設定が重要になる。課題設定は、これからも研修を積み重ねていきたい。

② 教科リーダーに任せる・教師は学習のファシリテーター

教科リーダーに進行を任せるには、とても勇気のいることである。なぜなら、我々

大人が教育を受けてきた学習観は知識伝達であるからである。しかし、教師主導型から生徒主体型への転換を図ると、生徒による司会進行の授業スタイルに行きつく。私たちが生徒に司会を任せることについては、不安な点もたくさんあるが、任せていくことで生徒は主体的に動くようになっていく。そのため、教師は学習のファシリテーターとして、授業を展開していく必要があり、時には流れを修正することもある。授業づくりの段階で、教科リーダーとの打ち合わせが必要になり、授業の展開を教科リーダーと教師が事前に共有をすることが重要になる。司会原稿や授業の流れを学習リーダーに伝え、教師の思いと生徒の動きを確認することで、全員で授業をつくっていく姿勢はとても大切になる。これを学校のカリキュラムにも組み込むと、生徒が自ら授業を進行する授業になっていくと考える。

2 プロジェクトNの活動

① 少数派意見の尊重の難しさ

生徒総会の様な全校生徒が集まる場で、少数派の生徒が意見を表出することは難しかったと考えられる。個の意見が表明できる場の設定が必要である。また、採決の方法についても少数意見の尊重を意識した上で決めていくなど、合意形成のプロセスを丁寧に構築する必要がある。

② 教師の立ち位置

生徒がさらに主体性をもって生徒総会に参加できるような手立てをどのように講じていくか、教員の関わり方や生徒に任せる場面について、より検討を深める必要がある。校則を生徒に委ねることに不安点もたくさんあるが、自分事として考えやすいことから更に主体性が増すと考える。時には方向性が勘違いした“自由”にいつてしまうこともあるので、教師が抑止力になる場面も必要である。また、結果を求めすぎることによって本来の目的を見失いがちになってしまった。「校則の見直し」にこだわらず、付きたい力が何か常に再確認する必要がある。

③ 見通しを持つ重要性

生徒総会・当日までのHR・中央委員会含め個人の意見出しはよく行えたが、意見を出すことだけで終わってしまった。議長団や生徒会役員が見通しを持つことはもちろんだが、個々での意見への見通しを持つことができなかった。自分の意見のみを言って満足してしまうため、他者の意見を想像し、その返答まで考えることができなかった。

V おわりに

生徒が自分自身で考え、自分たちで授業を作り上げていくことで深い学びとなる、本校の4年間の取り組みで培われた「長沢スタンダード」は、旧来の教え込み型の授業の枠を大きく超えて、「生徒が」主体的に取り組む授業のあり方として、これからの授業の基本的なスタイルとなるだろう。さらに実践研究を続けながら、生徒一人ひとりの学力向

上へとつなげていきたい。

「校則の見直し」とは「校則を見直す」ために行うのではなく、「校則」を使って学びを深めるためにある。自分事として考えやすい題材を使うことで、興味関心が高まり、主体的に考える力が養われる。教師の役割はその目的を見失わずに、本質を問い続けることである。話し合いを通して他者の意見を聞き、再構築する。少数派の意見を尊重し合意形成を図る。すべての土台となっているものは話し合うことである。その話し合いをどのように行うかを伝えずに、校則の見直しや合意形成が行えるだろうか。「話し合い」とはこの1年半を通して「見直し」を持つことであると考えた。他者の意見の反対の反対の反対まで考えることが深く考えることであり、自分の意見を再構築することである。また、それこそが主権者としての自覚をもたせることである。

この「見直し」を持たせることは授業でも必要なことであり、行事の縮小が言われている昨今では体育祭や合唱コンクールで縦のつながりを意識するだけでなく、生徒総会(学校を豊かにすることを全員で考える場を設けること)でも新たな縦のつながりを意識し、最上級生がリーダーシップを発揮するのではないだろうか？

教師から問題提起をするのではなく、自分事として考え、生徒自らが実行することが大切である。この取り組みを継続していくことで「深く考え行動する生徒」の育成を進めていきたい。また、何よりも自分たちで学校を変えたという実感から今までの生徒との表情がまるで違う。教師が変えるのではなく、生徒が変える。教師は生徒のファシリテーターであることを忘れずに、これからも精進していきたい。

VI 参考ホームページ・参考文献

文部科学省(2017)「中学校学習指導要領解説総則編」

西留安雄(2023)「子どもが自ら学びだす「教えない授業」を創る」

神奈川県教育委員会(2023)「小・中学校における政治的教を育む教育 指導事例集」

横須賀市教育委員会(2023)「横須賀市立長沢中学校フロンティア研究紀要」

研究題目

学校の教育活動全体で行うキャリア教育の推進について
～生徒が持つ資質・能力を最大限に伸ばす教育活動の提案～

目 次

- 1 はじめに
- 2 学校の概要
- 3 主題設定の理由
- 4 研究の概要
- 5 具体的な取組
- 6 考察
- 7 研究・実践の成果
- 8 今後の課題とこれからの展開
- 9 おわりに

長崎県南島原市立口之津中学校 校長 大嶋 博之

1 はじめに

生徒たちが生きる今後の社会では、「仕事全体の47パーセントが、今後10年か20年後には自動化されるだろう。」¹⁾ (マイケル・A・オズボーン) の言葉に代表されるように、社会の仕組みや仕事の業態等が、今後大きく変化すると予想されている。このことは、令和4年11月に公開された生成AI (ChatGPT) の登場によって急激に加速したように思われる。瞬く間に世界中に (小学生にも) 広がった生成AI に対しては、国連安全保障理事会で「我々の想像や国境を超越している」²⁾ として未知の危機を危惧し、新しいルールづくりが急務であるとする発言もあった。このように、もはや未来がどのように変化するかは、誰も予測できないことを改めて認識させられる状況にある。また、ウクライナで起きていることや新型コロナウイルスの蔓延には、グローバル化した社会構造の中では、世界中のどのような地域 (本市) も起きた変化の影響を大きく受けることを実感させられた。

このような中であって学校教育には、急激な変化の中で多くの既存の仕事がなくなる一方、新しい仕事や仕事の仕方、生活の仕方等が生まれる (生み出すことが期待されている) ことに着目して、自らの資質・能力を常に磨き、高めようとする「学びに向かう力」や「学び続ける力」を生徒たちに育成することが求められている。また、少子高齢化や人口減少、人口流出等が他地域に先んじて進む本市においては、ふるさとを思い、その未来に貢献しようとする志や目標を達成するための資質・能力を高め、互いに手を取り合い、人手が不足していく中でも地域や組織の機能を維持させる方法を生み出しながら、自身と地域の個性や強みを生かして、心豊かでたくましく生き抜く力の育成が求められている。

2 学校の概要

口之津中学校が位置する南島原市は、他の地方都市と同様、人口の減少や経済の縮小など、さまざまな課題があるものの、世界文化遺産や世界ジオパークに認定された歴史や文化、海や山の景観、豊かな農海産物があり、北村西望^{注1)} (芸術家) や古野電気株式会社の創設者であり、魚群探知機を発明した古野清孝、古野清賢^{注2)} 等の偉人を輩出するなど、多様な資産と可能性を有する地でもある。

このような恵まれた環境の中で本校は、学校経営方針の中軸の一つにキャリア教育を据え、学校教育目標「人として、社会の形成者として、日々新たに求めて学び、心豊かにたくましく生きる生徒の育成」のもと、地域の未来を担い、次代を創る生徒をはぐくむための教育活動を推進している。

〈口之津中学校の概要 (以下、令和5年5月1日現在)〉

- ・生徒数90 (最多生徒数…819 / 昭和37年)
- ・学級数4 (通常学級3、特別支援学級1)
- ・職員数19 (校長1、教頭1、教諭9、養護教諭1、事務職員1、用務員1、ALT1、特別支援教育助手2、学校支援員1、心の教室相談員1)



口之津中学校と
港の風景

3 主題設定の理由

(1) 研究の方向性

令和3年度に全面実施された中学校学習指導要領(解説 総則編)では、学習指導要領改訂の基本的なねらいを「社会に開かれた教育課程の重視」、「確かな学力の育成」、「豊かな心や健やかな体の育成」とし³⁾、以下のとおりキャリア教育の重要性が示された⁴⁾。私たちはこのことを基盤に置いて、学校経営方針を定めた。

生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。

なお、今回の改訂でねらいの一番目に示された「社会に開かれた教育課程」の“社会”をどのように捉えるかは重要である。例えば「生徒たちが“将来”住まう地域(例えば「都会」)」と捉えるか、それとも“今”住まう地域(ふるさと)」と捉えるかでは、指導や学習の内容が少なからず変わる。特にキャリア形成の具体的な形として「進学」、「就職」、「くらし」を考えると、 “どこで” という要素は避けては通れない。「南島原市立」の学校として、今まであまり触れてこなかったこのことに対し、どのように向き合うか、本研究を通じて考えたい。

一方、私たちは、労働政策研究・研修機構が年齢20代の職業人を対象にした調査をまとめた「学校時代のキャリア教育と若者の職業生活」⁵⁾による示唆に注目した。その研究結果は、学校でのキャリア教育を肯定的に受け止めていることと職業に就いたときの1ヶ月の平均月収や職業生活を送る上での自尊心の高さが有意に関連していることを明確に示していた。このことから全ての生徒のキャリア形成を適切にサポートすることが重要である。学校での取組が生徒たちの未来に大きく影響を与えることを、教育に携わる者として改めて心に留めおきたい。

(2) 取組の作用点

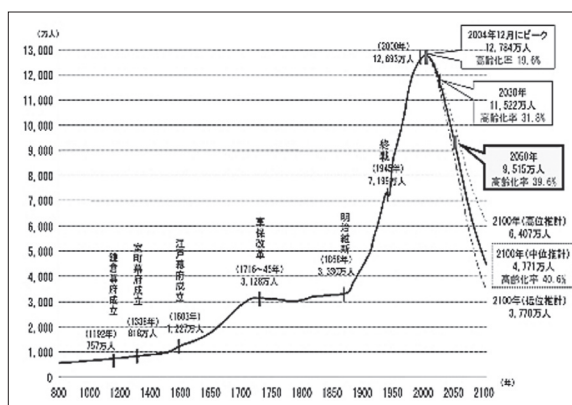
本校におけるキャリア教育の主軸は、「個々の生徒のキャリア形成の方向性」である。通常、キャリア教育の実践では、職場体験学習等の内容を工夫するものも多く見られるが、私たちは、はぐくむべきとされる「基礎的・汎用的能力」⁶⁾の多くは、既存の教科授業や特別活動等ですでに取り扱っていると考えた。これらの学習を有機的につなぎ合わせ(教科横断的な学び、キャリア教育との関連構築など)、総合的な学習の時間の中で補完・統合するとともに、それらの学びを生かした生徒自身による主体的な取組を行うことによって、個々の生徒が自分の人生の歩みとしてのキャリア形成の方向性を構築していくのではないかと考えた。

また、今回の研究として行う実践は、生徒に対して直接的に作用するものであるが、学級担任や教科担任をはじめとする教職員全員が行う実践と有機的に関わり合い、キャリア教育を軸として学校全体がさらに活性化し、生徒も教師も自由闊達に未来を語り合う学校へと変容していく駆動装置になると考えた。

(3) 課題

① キャリア教育に課せられた職責の理解（社会変化への対応）

我が国は、今後数十年にわたり、急激に人口が減少と言われて⁷⁾【図1】。人口が半減した後も進むこの予想は、人口流出が他地域に先んじて進む地方都市(本市)にとって、まちの存続自体を危惧する状況が生じる可能性があることを意味している。このことを踏まえたとき、目の前にいる生徒の資質・能力を高めることがこの国の未来を支えるという期待と、彼らの



【図1：人口減少の推移／国土交通省】

キャリア形成の方向性(選択)が本市の存亡を左右するという不安を同時に抱く。本校はこれまで公教育として全国共通の学習指導要領と教科書のもと(教員の工夫により若干の独自性を持ちながら)一律の教育を行ってきた。しかし、「南島原市立」の学校として、前述の現実にもどのように向き合うかが問われている。キャリア教育の実践には、このような「問い」が課せられていることを自覚し、社会の変化に対応して改革を進めていくことが求められている。

また、現実社会の職場では「求めたい人材像」がある。筆者は50名以上の事業者「どんな人材が欲しいですか」とのインタビューを重ねてきた。以下、その回答(抜粋、役職は当時)であるが、学習指導要領の中にその文言がないものも多い。

「自ら考える人、相手を自分のことのように尊重できる人」／住宅事業主任

「変化に対応できる人、前向きにチャレンジする人」／通販会社人事本部GM

「明るく気配りができる人」／京都旅館女将

「情熱、やる気」／サッカークラブ代表取締役社長

このような仕事の現場の意見を受け止めるとともに、社会の変化に対応したキャリア教育の改善・改革が求められている。

② キャリア形成が個々のものであることを踏まえた実践の構築

キャリア形成は、一人一人の人生の歩みであり、本来、生徒個別のものである。このことを踏まえたとき、一斉一律に行う授業では、一般的な知識や技能等を授けることはできても、一人一人が違う人生を歩むキャリア形成の方向性を構想・獲得させることは難しい。これらは生徒自身の個別の体験等を含めた学びの中で醸成され構築さ

れるものとする。「個別最適化された教育」とは、習熟度を考慮した学習だけでなく、個々のキャリア形成の方向性を踏まえた手立てであるとする。これらのことを前提としたキャリア教育の実践のあり方が求められる。

③ 生徒のキャリア形成を支援する機会の創出

本校ではこれまで、進学関連の情報提供が3年生のみを対象としたものであることが多かった。また、高校生の姿は、生活時間帯の差等から校区内で見かけることは少なく、大学や専門学校はない。このことから学校が積極的に情報を集め、または機会を創出して進路情報を生徒たちに提供する必要があった。

(4) 目標

本研究は、「キャリア教育に関する手立てや環境をよりいっそう生徒自身の主体性をもってはぐくむ方向で整備し、実践を重ねることにより、生徒がより良く生きるための資質・能力を高めることができるのではないか」という仮説を立て、今後の急激な社会変化の中を生きる生徒たちに必要とされる資質・能力をはぐくみ、よりよい社会を築こうとする志を醸成するために、目標を以下のとおり設定した。

個々の生徒のキャリア形成を支援する機会の設定と環境づくりを積極的に進め、「学校の教育活動全体で行うキャリア教育」の在り方の一例を示すことにより、教育改革の推進に寄与する。

4 研究の概要

右は、本校における学校経営方針の全体構想図【図2】である。地域や小学校、高校等との関係のほか、全ての教育活動の中心に「個々の生徒自身によるキャリア形成への意欲と実践」を据え、彼らが「生きてはたらく力」を獲得することを目指す本校教育の全体像を表している。これらの施策の方向性を包含して「人として、社会の形成者として、日々新たに求め学び、心豊かにたくましく生きる生徒の育成」を学校教育目標に掲げている。

本研究では、本校の教育目標に基づき、学校の教育活動全体として行うキャリア教育の一提案として、以下の項目に取り組んだ。



【図2：学校経営構想図】

- (1) 「キャリア形成に関する意識調査」による生徒の意識等に関する実態の把握
- (2) 生徒のキャリア・マネジメント力の向上と教員の生徒理解の推進
- (3) キャリア形成および進路選択を支援する機会の設定
- (4) 生徒や教職員が主体性をもってさまざまな情報を得る場の設置
- (5) 教科授業等の中でのキャリア教育の強化
- (6) 教科の学びをつなげ、地域の課題と向き合う学びの場の設定

5 具体的な取組

(1) 「キャリア形成に関する意識調査」による生徒の意識等に関する実態の把握

キャリア形成に関連する生徒の意識調査に際し、比較対象としたのは、日本財団が2019年に行った「18歳意識調査」⁸⁾であり、日・米・英・中・韓・印の17歳から19歳を対象としたものである。本校生徒とは4～6年の年齢差があるが、指導の方向性を見定める上で有効と考えて調査および比較検証を行った。

研究を始めた昨年度(令和4年5月)の調査結果は以下のとおりであった。【図3】

(記号：○…5ポイント以上上回っている、●…5ポイント以上下回っている)

工藤⁹⁾は、この「18歳意識調査」の結果に対して日本の若者の自己肯定感の無さ等を指摘している。

本校の生徒においても「夢を持つ」や「将来が楽しみ」などの項目において若干良い傾向にあるものの、日本の若者と同様の(またはより悪い)傾向にあることが明らかになった。

私たちの研究は、この現状を踏まえて目標を設定し、取組を進めなければならないことを確認した。

キャリア形成に関する意識調査 18歳意識調査/日本財団(2022.3.24/日・米・英・中・韓・印) 本校調査(2022.5.10、2023.7.18/全学年)		諸外国	日本	日本と諸外国との差	本校R4全校	本校生徒と日本との差
1	自分には、人に誇れる個性がある。	74.7	47.9	●	37.3	●
2	自分は他人から必要とされている。	68.6	52.7	●	21.7	●
3	日々の生活が楽しい。	73.3	67.7	●	72.3	
4	日々の生活で不安やゆううつ(心の落ち込み)を感じる。	49.0	62.3	●	36.1	○
5	勉強や仕事、趣味など、何か夢中になれることがある。	83.9	80.4		81.9	
6	自分のしていることには、目的や意味がある。	76.1	63.5	●	50.6	●
7	自分の人生には、目標や方向性がある。	78.6	60.6	●	59.0	
8	目標を立て、何かを達成した経験がある。	78.4	75.2		66.3	●
1	将来の夢を持っている。	84.0	59.6	●	68.7	○
2	自分の将来が楽しみである。	82.0	57.8	●	77.1	○
3	社会が今後どのように変化するか楽しみである。	78.6	54.0	●	48.2	●
4	多少のリスク(困難)が伴っても、新しいことにたくさん挑戦したい。	77.6	49.0	●	54.2	○
5	多少のリスク(困難)が伴っても、高い目標を達成したい。	78.8	44.9	●	47.0	
6	リスクのある挑戦よりも、経済的安定を重視する。	75.7	70.4	●	31.3	●
7	リスクのある挑戦よりも、心理的安定を重視する。	75.4	68.3	●	31.3	●

【図3：意識調査結果】

(2) 生徒のキャリア・マネジメント力の向上と教員の生徒理解の推進

① 「キャリア・マネジメントシート」【図4】

これは、将来を見通し、進学や就職等に関する夢や希望のほか、それらを実現するための努力(キャリア形成の取組)等について記入するものである。1枚のシートを3年間を通して継続的に使用し、修正を重ねながら、自身のキャリア形成をより主体的・継続的に考えさせるものである。

記入の時間は、年度の前半に全校生徒を対象にしたガイダンス【図5・6】を行って記

「私のキャリア・マネジメントシート」の書き方

このシートは、自分の未来を“自分でつくる”ための設計図です。未来の夢や希望を実現させるために「何が必要か」を考えるものです。これらを具体的に書き込んで、毎日の生活を充実させていきましょう。

＜1＞まずは「目的」と「目標」の違いを知ろう。

「目的」は、「目標」を達成したときに起きる「うれいこと」のことです。自分がうれいことあれば、家族や周りの人がうれいことでもあります。

例えば…その1
「医者になる」というのは目標で「病気を治して人を笑顔にする」は目的です。

例えば…その2
「サッカーで世界一になる」という目標を立てた『なでしこジャパン』の優勝の目的は「東日本大震災で沈み込んだ人々の心を元気づける」でした。

例えば…その3
「高校受験で合格」という目標を立てたとしても「スマホを買ってもらえる」という目的の人と「親を安心させる」や「将来の夢へ一歩近づく」という目的の人では、その後の人生は変わっていくと思えます。

私のキャリアマネジメント 1年 組 番
2年 組 番
3年 組 番 氏名

成りたい人間像
描く生活のイメージ

その後(成りたいことなど)
その目的

高校生の間に成りたいこと
その目的

中学生の間に成りたいこと
その目的

＜2＞書く順番は、上(将来)からでも下(現在)からでもOK

「成りたい人間像」や「成りたい職業」から書いて、「そのためには～」と降りてくるのもいいし、とりあえず「今、やりたいこと」を書くのもいいです。ポイントは、「えんぴつ(シャーペン)」で書くこと。夢や目標は変わりますし、やるべきことも、世の中を知っていくにつれて変わっていきます。何か新しいことを思いいたら、どんどん書き直しましょう。

【図4：キャリア・マネジメントシート(説明資料)】



【図5：ガイダンスの様子1】



【図6：ガイダンスの様子2】

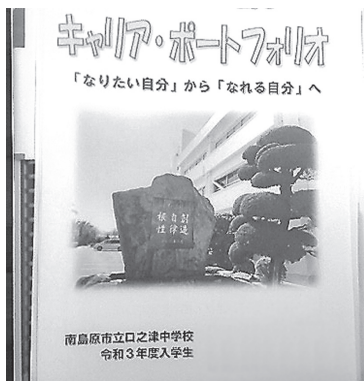
入させた後、学級活動の時間や進路指導の時間等に併せて書き込ませるほか、生徒自身が自分の時間の中で随時修正してよいとした。

なお、このシートは、学級担任等が定期的に確認するほか、通知表(ファイル形式)に挟み込んで、学期に1度は保護者に確認してもらうようにした。

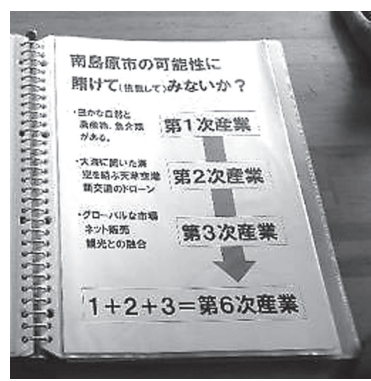
②「キャリア・ポートフォリオ」【図7・8】

これは中学校3年間を通じて使用するもので、クリアシート等を綴じたファイルを使い、それぞれの生徒が「進路決定に役立つもの」や「感動したもの」など、自身のキャリア形成(人生)の参考となりそうなものを自由に、必要なことを記入して残すなどしながら、さまざまな体験や見聞等を保管・整理するようにした。これらのことを通じて、キャリア形成の方向性を生徒自身が形成的に構築するよう指導している。

また、このポートフォリオの運用では、キ



【図7：キャリア・ポートフォリオ 表紙】



【図8：キャリア・ポートフォリオ 中身】

キャリア・マネジメントシートとともに定期的に学級担任等が確認し、保護者にも目を通してもらいながら、生徒のキャリア形成を支援する環境を整えた。

なお、文科省が提唱している「キャリア・パスポート」には、このキャリア・ポートフォリオに収録した資料の中から、卒業前に、進学先の高校等で必要なものを抽出して入れるようにした。

③ 校長との面談【図9】

キャリア・マネジメントシートやキャリア・ポートフォリオに書き込んだ構想等は、誰かに伝えることにより内容が整理され、キャリア形成の方向性を明確化することができる。そのねらいに基づき「将来の夢や目標、今頑張っていることなど」の発表(3分間スピーチ)を含む校長による面談を、全生徒を対象に行った。この取組は、一人一人に配付されたパソコンを使うプレゼンテーション【図9】の形にすることにより、GIGAスクール構想のねらいに基づく取組になるほか、近年の高校入試における面接試験やプレゼンテーション試験への対策にもなると考えた。また、この面談で得た情報は、プライバシーに配慮しつつ一覧表にまとめ、全ての授業者に提供している。



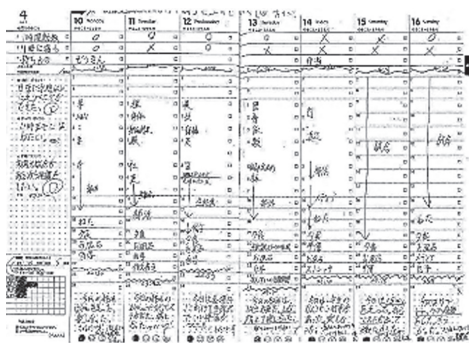
【図9：面談の様子】

なお、面接官がなぜ校長かという点については、以下の点が挙げられる。

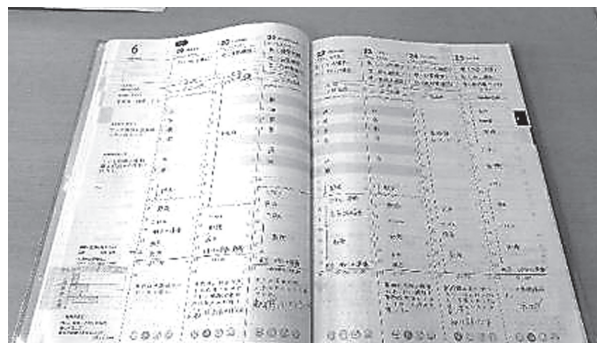
- ・校長が一人一人の生徒を知る機会となり、学校経営の方向性をより確かなものにする事ができる。
- ・普段とは違う環境(校長、校長室)で行うことにより、発表への意識が高まることや入試の雰囲気を経験できるなどの効果が期待できる。
- ・働き方改革の中、時間を調整しやすい校長が行うことが適当である。

④ スケジュール手帳(フォーサイト)の活用【図10・11】

時間割や行事予定を管理するほか、1日の生活(起床・就寝、家庭学習時間、部活動等の練習時間など)を書き込むために「フォーサイト/FCEエデュケーション社」注3)と



【図10：スケジュール手帳(実例1)】



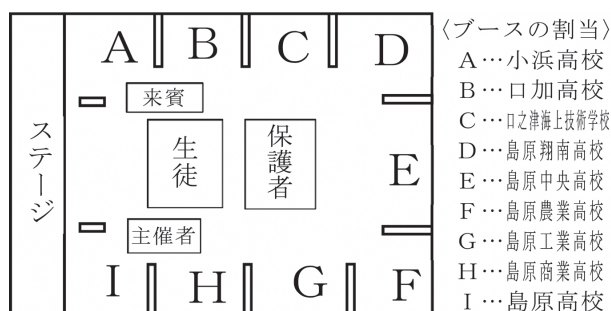
【図11：スケジュール手帳(実例2)】

いうスケジュール手帳を導入した。また、生徒自身が目標としている「テストや入試の期日」、「各種検定の試験日」、「部活動の試合日」、「卒業式の日」などを記入して、それまでの努力や準備のステップを計画的に踏ませるようにした。これらは、キャリア形成の実行力を高めるためのものであり、「基礎的・汎用的能力」⁶⁾のうち、「自己管理能力」や「キャリアプランニング能力」の育成に直結するものとして取り組んでいる。

(3) キャリア形成および進路選択を支援する機会の設定

① 合同高校等説明会

「高校や入試などの情報を得て、自分の進学や将来の就職などのことを考える」ことを目的に、本校体育館にて全校生徒およびその保護者等を対象にした合同高校説明会を開催した【図12】。本市と隣接市にある9つの高校等に依頼して開催したこの説明会では、全体会として入試等に関する説明を行った後、生徒自身が自分で説明を受けたい高校等を選んでブースを回る方式を取り、説明と質疑応答を3回くり返した【図13】。



【図12：説明会会場図】



【図13：説明会の様子】

この合同説明会へ向けには、全校合同で事前説明会を開催した。1・2・3年生で混合の班（縦割り班）を編成し、経験値が比較的高い上級生が下級生にアドバイスするよう指導するとともに、上級生にとってもアウトプットすることにより、これまでの経験を振り返ったり整理したりするなどして学びを再確認させるようにした【図14】。



【図14：事前説明会の様子】

この説明会では、高校等の情報を効率的に取得できる機会を設けることができたほか、「自分で選ぶ」や「自主的に質問する」という機会を設定したことにより、キャリア形成への主体性をはぐくむことができたと考える。

なお、この説明会は、他の中学校の生徒も参加できるようにするために、リモート形式での開催へと発展させ、同年度2月、改めて開催した。このときは前述の高校等のほか、市内6校（全8校）の中学校が参加した【図15】。



【図15：リモート説明会の様子】

今後、このような「高校等説明会」の機会だけでなく、高校生たちが取り組んでいる「探究活動」や「個別の研究活動」、「資格取得の手立て」等を一覧にした「学びのメニュー表」（仮称）を提供していただくよう協議を進めている。

以下、合同高校説明会に参加した生徒の感想から。（抜粋）

「貴重な体験ができてよかったです。あまり視野に入れてなかった高校も聞けたりしたので、選択肢も広がりました。」

「今回、高校説明会という貴重な経験を通して、自分の将来就きたい職業や今後の進路について明確になったような気がしました。」

② 情報提供

キャリア教育や進路指導に関しては、「学校での出来事などを家族で話し合った」、「将来について話し合った」という経験が、卒業後の進路選択に良い影響を与えていることが報告されている¹⁰⁾。このことから、進路通信をはじめ、学校ホームページ【図16】（高校入試関連サイトや高校等のホームページのリンクあり）や学校だより等を通じて、進路情報を積極的に保護者や生徒等に発信している。

また、従来行ってきた家庭訪問を保護者面談（3年生は三者面談）に替え、「キャリア・マネジメントシート」や「キャリア・ポートフォリオ」等をもとに情報交換を行うほか、新入生を対象とした学校説明会でも、進路（進学等）に関する情報提供を行うなど、よりキャリア形成の要素を増やした機会を多く設定している。



【図16：本校HP QRコード】

(4) 生徒や教職員が主体性をもってさまざまな情報を得る場の設置

① キャリア形成に資する進路情報の提供

本校は、地理的条件から身近にある高校が少なく、大学にあつては一番近い所でも車で1時間以上かかる距離にある。このようなことから、生徒たちは進学先である高校・大学・専門学校等の情報に触れる機会が少ない。この状況を改善するために、校内に進路情報に関する掲示板を2つ設置した（生徒玄関【図17】、



【図17：掲示板（生徒玄関）】

職員室前【図18】。

ここには、高校や大学等のパンフレットや入試情報、高校等における就学支援の情報などを掲示し、生徒たちがいつでも手にして見ることができるようにした。このことにより、生徒たちは高校等の概要を知り、オープンスクールや学校説明会等へ参加する上で、事前にイメージを抱くことができた。



【図18： 掲示板(職員室前)】

このほか、生徒たちのキャリア形成に資する活動として、職場体験学習のほか、以下の「福祉体験活動【図19】」、「高校生から話を聞く会【図20】」、「議会傍聴【図21】」などを実施し、生徒たちがキャリア形成を、より幅広い知見をもってできるようにしている。



【図19： 福祉体験】



【図20： 高校生から話を聞く会】



【図21： 議会傍聴】

②教職員用書棚

「はじめに」で述べたように、社会は急激に変化しており、教育の内容は絶えず不易と流行を見定めて設定しなければならない。そのため、学校(教員)は、世の中の動きをつかみ、識者・賢者の意見や提言等を踏まえるとともに、生徒の発達段階を考慮しつつ、彼らが生きる未来を想像して教育を展開しなければならない。そこで、校内研修等で使用した書籍や各人が読んで提供してもよいという本を並べられるよう職員室に書棚【図22】を設けた。このことにより教職員一人一人の学びを共有し、校内での研修や情報交換の質を高めるとともに、変化し続ける社会に対応できるチームづくりにつなげたいと考えている。



【図22： 教職員用書棚】

③教員の余裕の創出(働き方改革)

「教職員の主体性を持った取組」を述べるにあたり、その取組を行うための時間(余裕)を捻出する本校の働き方改革について述べておく。本校で行っている働き方改革の主なものは、以下のとおりである。(概略)

<業務データの集約と活用>

- ・学校教育目標をはじめ、行事計画や校務分掌に関する資料、市教委から提示される学校管理規則など、学校で取り扱う全データのフォーマットを統一して整理し、新しく作らなくていいよう「口之津中学校の教育」という校内ネットワーク上のフォルダにまとめて効率よく活用できるようにした。

<教科授業等の時数調整>

- ・各教科等の授業時数を、時間割を調整して学習指導要領に定められた標準時数を超えないようにしている。このことにより生まれた“余裕”の時間を活用して、金曜日を5校時までで切り上げ、部活動を行ないつつも、定時退庁日と設定した【図23】。これらの工夫により校務分掌や通知表作成をはじめとする学期末の業務等を行う時間を確保している。

<やらないことを決める>

- ・「会議資料は『口之津中学校の計画』の中のデータを使い、新しく作らない」、「家庭訪問は保護者面談へ」、「通知表の所見は面談に代替」、「出張報告は出張中に資料に記入(帰校後に作業をしない)」、「定時退勤日は定時(16時35分)に退勤する(ダラダラ残らない)」、「年度初めや終わりの挨拶回りは文書に代替」など、やめられるものを徹底的にやめている。

(勤務時間…8時05分～16時35分)

【日課】		月 (A日課)	火 (A日課)	水 (B日課)	木 (A日課)	金 (C日課)	
諸活動	8:10～8:20	諸活動	8:10～8:20	諸活動	8:10～8:20	諸活動	8:10～8:20
短学活	8:20～8:30	短学活	8:20～8:30	短学活	8:20～8:30	短学活	8:20～8:30
1校時	8:35～9:25	1校時	8:35～9:25	1校時	8:35～9:25	1校時	8:35～9:25
～ 中 略 ～							
5校時	14:00～14:50	5校時	14:00～14:50	5校時	13:45～14:35	5校時	14:00～14:50
6校時	15:00～15:50	6校時	15:00～15:50	6校時	14:45～15:35	6校時	15:00～15:50
短学活	15:55～16:10	短学活	15:55～16:10	短学活	15:40～15:55	短学活	15:55～16:10
部活動	16:10～17:50 (最大100分)	部活動	16:10～17:50 (最大100分)	部活動 日を決めて 会議・研修 または 各種個別指導 部活動休業日	15:55～16:35 (40分)	部活動	16:10～17:50 (最大100分)
18:00までに退庁		18:00までに退庁		18:00までに退庁		18:00までに退庁	
				↑		定時(16:35までに)退庁	
						↑	
						定時退庁日	

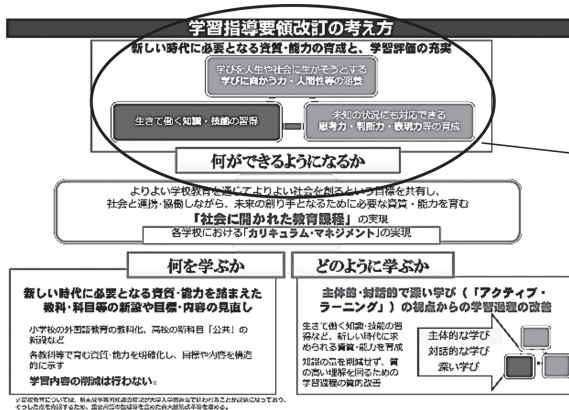
定時退庁ができる日

【図23：日課表】

以上のように週に2日定時に退庁できる体制を整え、他の日も午後6時までに退庁することを推奨するなどして、教職員が主体的に授業づくり等の研修に向かえる時間(余裕)を捻出している。

(5) 教科授業等の中でのキャリア教育の強化

松本¹¹⁾は、よりよいキャリア形成には教科授業におけるキャリア教育の推進が必要と示唆している。このことは、現行学習指導要領【図24】の中で示された評価の3観点「学びに向かう力、人間性等」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」の前後につけられた文言にも表されている【図25、下線は筆者】。



【図24：学習指導要領改訂の考え方】

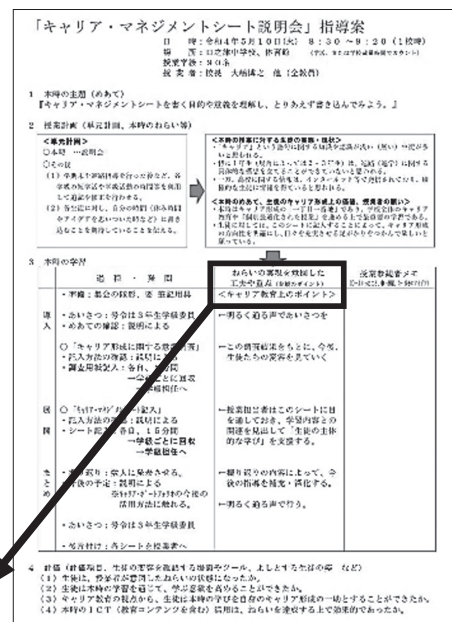
・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養
 ・生きて働く「知識・技能」の習得
 ・未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成

【図25：評価の3観点(抜粋)】

これらのことを踏まえるとともに、本校はキャリア教育の軸を「個々の生徒のキャリア形成の方向性」に置いていることから、キャリア・マネジメントシート等書かれた個々の将来の夢や希望等と教科の学習内容との関連性をもっと強化すべきと考えた。このことによって教科横断的かつ個別最適化された学習が進むとともに「社会に開かれた教育課程」の具現化につながると思った。

そこで、授業研究における指導案【図26】には、授業の内容や手立て等と「キャリア教育との関連」を明示するようにした。

ねらいの実現を意図した工夫や重点(参観のポイント)
 〈キャリア教育上のポイント〉



【図26：授業指導案】

(6) 教科の学びをつなげ、地域の課題と向き合う学びの場の設定

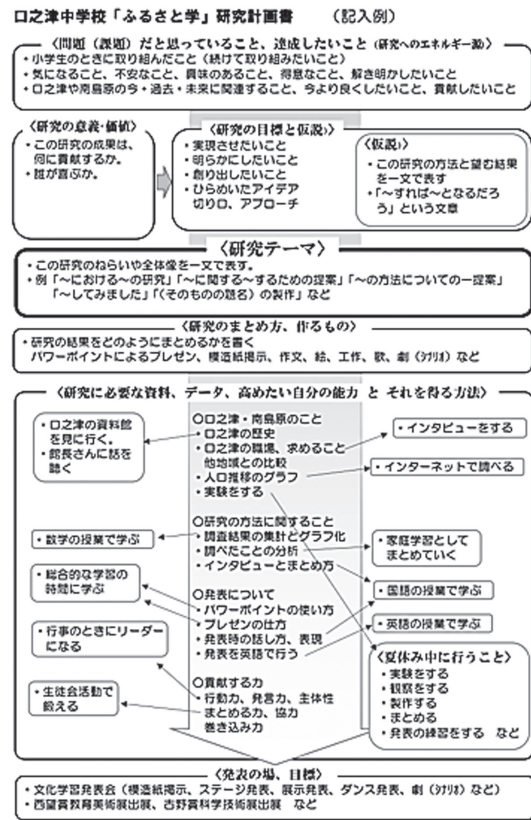
学習指導要領改訂のポイントの第一は、「社会に開かれた教育課程」¹²⁾である。これについては、学校で行う年間1015時間の教科等の授業が、もっと生徒の人生や地域を豊かにし、役に立つものにしてほしいという願いであり、授業改革の本命であると受け止めている。私たちはこれらの求めに応えるために、これまで夏季休業中の課題

として提示していた夏休みの自由研究に着目した。

本市は、多くの強みがありながら、さまざまな課題を抱えていることを踏まえ、本年度は、夏休みの自由研究のテーマを「ふるさと」の可能性や課題に関連したものにすることを推奨した。そして、自由研究に取り組むうえで、教科授業で得た学びを活用するよう指導した。【図27】は、生徒の自由研究に資する教科授業の関連項目を教科ごとにまとめたものである。これにより、自由研究という学習課題を通じて、教科の学びとふるさとの課題や可能性に向き合う取組、さらに、生徒のキャリア形成に関する自主的・主体的な取組を有機的につなぎ合わせ、より大きな枠組みをもって主体的・対話的で深い学びを推進することができるのではないかと考えた。【図28】は、その「研究計画書(記入例)」である。生徒たちは、この計画書に基づいた個別の研究に取り組み、秋の文化学習発表会等にて発表することになっている。

口之津中学校「ふるさと学」研究 参考メニュー表 教科：国語	
生徒が行う「ふるさと学」研究に関連する教科等の学習項目	
<p>〈全体的に〉</p> <p>3 発表力や表現力を高める 項目の基礎を学ぶのが国語。</p> <p>・気になって、研究したいと思ったテーマの情報収集・整理をし、表現方法を決め、効果的に発信するスキルを養う。</p>	<p>〈関連する項目 例〉</p> <p>1 口之津や南島原に関することを調べる (知識を定めておく)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歴史、成り立ち ・職場、生活 ・課題、問題点 ・強み、魅力 ・人口推移 ・他地域との比較
<p>〈1年生〉</p> <p>(話すこと・聞くこと)</p> <p>・紹介「話の構成を工夫しよう(お気に入りのもの)・・・声の出し方</p> <p>・対話・質疑「聞き上手になろう」・・・質問の仕方</p> <p>・話し合い「話題や展開を捉えて話し合おう」・・・意見・根拠</p> <p>・発表「一年間の学びを振り返ろう」・・・声の出し方、聞き手を意識(書くこと)</p> <p>・読解「情報を整理して三こう」・・・比較・分類・関係づけ</p> <p>・引用「情報を引用しよう」・・・引用・出典・情報整理</p> <p>・説理「根拠を示して説明しよう」・・・構成の工夫、根拠を明確に</p> <p>・説話「作風の書評を書く」・・・言語文化・読書・構成・展開の工夫</p> <p>・読解「一年間の学びを振り返ろう」・・・読解決定・情報収集・整理</p>	<p>2 研究力(思考力・判断力、技能)を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実験の方法や注意点 ・調査結果の集計とグラフ化、表示方法 ・調べたことこの分析 ・インタビューの方法や集計方法 ・製作の手順やコツ
<p>〈2年生〉</p> <p>(話すこと・聞くこと)</p> <p>・読解「論理的な整理をしよう」・・・プレゼンテーション</p> <p>・対話・質疑「聞き上手になろう」・・・質問の働き、質問の工夫</p> <p>・読解「職場を尊重して話し合おう」・・・意見・根拠・互いの立場の尊重</p> <p>・読解「国語の学びを振り返ろう」・・・テーマを決めて話し合う(書くこと)</p> <p>・制作「自分だけの様子」を三こう・・・言語文化・情報収集</p> <p>・紹介「多様な方法で情報を集めよう(編集カド)」・・・情報収集・整理</p> <p>・読解「力を効果的に伝えよう」・・・意見・読書・表現の効果</p> <p>・報告「国語の学びを振り返ろう/壁新聞」・・・構成・展開・発表の工夫</p>	<p>3 発表力や表現力等を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイントの使い方、作り方 ・プレゼンの仕方 ・発表時の話し方、表現、ジェスチャー ・英語での発表の仕方 ・絵の描き直し方 ・刃物(剣)の書き方
<p>〈3年生〉</p> <p>(話すこと・聞くこと)</p> <p>・主張・根拠「相対力のある構成を考えよう」・・・情報の信頼性・話題設定・情報収集</p> <p>・対話・質疑「聞き上手になろう」・・・意見の違い、展開を予測して聞く</p> <p>・論議「合意形成に向けて話し合おう」・・・具体・抽象・合意形成</p> <p>・発表「三年間の歩みを振り返ろう」・・・言葉遣い・話し方の工夫(書くこと)</p> <p>・引用「古典の言葉を引用し、自分の語にしよう」・・・古典、文章の活用</p> <p>・批評「多角的に分析して書こう」・・・論理の展開、表現の工夫、資料の引用</p> <p>・編集「三年間の歩みを振り返ろう」・・・語彙・語法・構成の工夫</p>	<p>4 表現する力や貢献する力(人権力)を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主体性、自主性 ・行動力、発言力 ・人をまもめる力 ・協力を得る資力 ・判断力、道徳性、倫理観
<p>5 学びに向かう力を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気候や関心等を高める ・観察力を高める ・問題意識を高める 	<p>5 学びに向かう力を高める</p> <ul style="list-style-type: none"> ・気候や関心等を高める ・観察力を高める ・問題意識を高める

【図27：教科別関連表】



【図28：研究計画書】



【図29：自由研究ガイダンスの様子】

今後、この取組は発展させ、研究テーマは「1年間を通じたもの」にし、“夏休みの宿題”ではなく、生徒別のキャリア形成と関連する年間テーマとして設定し、さまざまな取組において、そのテーマの視点から学びの意義や価値に着眼したり、活動を選択したりすることを想定している。例えば、職場体験学習の体験先や修学旅行での自主研修のコースなどを、この視点から選んだり研究したりすることによって学びはより深く個別最適化されたものになると考えている。また、教科授業に臨む上でも自分なりの研究テーマを持つことにより、学びはより自主的・主体的になり、生徒同士の意見交換により多様化していくと考える。そして、このような経験を通じた先に進学や就職があれば、教科授業が生徒個々のキャリア形成や進路選択に対し、より有意義なものになっていくと考えている。

6 考察

本研究で取り組んだ実践を、キャリア教育に関してはぐくむべき能力として例示された「基礎的・汎用的能力」の項目により分類すると、以下のとおりであった。

<人間関係形成・社会形成能力>

- (2) ③校長との面談、(5) 教科授業等の中でのキャリア教育の強化、
- (6) 教科の学びをつなげ、地域の課題と向き合う学びの場の設定

<自己理解・自己管理能力>

- (2) ①キャリア・マネジメントシート、(2) ④スケジュール手帳、

<課題対応能力>

- (3) ①合同高校等説明会、(3) ②情報提供、
- (5) 教科授業等の中でのキャリア教育の強化、
- (6) 教科の学びをつなげ、地域の課題と向き合う学びの場の設定(自由研究)

<キャリアプランニング能力>

- (2) ①キャリア・マネジメントシート、(2) ②キャリア・ポートフォリオ、
- (2) ④スケジュール手帳、(3) ①合同高校等説明会、(4) ①進路情報の提供

以上のように、各項目を網羅し、それぞれの取組を有意義に関連付けて実施していることから、今回の研究による実践は、「基礎的・汎用的能力」を総合的に高めることができると考えられる。

一方、本校の学校評価のうち、キャリア教育に関連する項目において、右の結果【図30】を得た。特に生徒の「キャリア教育」や「進路保障」の取組に対する満足度が9割を超えていることは素直に成果として受け止めたい。

(数値は満足度、満点は100)

項目	保護者	生徒	教職員
学びに向かう力	73	80	71
目標を実現させる力	74	78	56
キャリア教育の推進	82	85	88
進路保障	85	90	87
総合的な評価	88	92	92

【図30：学校評価(抜粋)】

また、学校評価には、以下の記述が寄せられた。

- ・高校説明会が良かった。自分の行きたい高校などが見付き、その上、高校の説明も聞けたから良かった。集会の時にみんな真剣に先生の話の話を聞いている姿に感動した。(生徒)
- ・高校説明会やキャリアの学習で将来について詳しく考えることができたので良かった。(生徒)
- ・全校生徒向けの高校説明会がすごく良かった。本人なりに自覚が出てきた。(保護者)

以上のことから、本研究にかかわって、本校のキャリア教育を充実させるためにやっている実践は、概ね良い評価を得ていると考えられる。

7 研究・実践の成果

以下に、今回の研究で比較対象とした日本財団の「18歳意識調査」⁸⁾に基づく本校生徒の意識の変容(令和4年度→令和5年度)を表した【図31】。まず、全校生徒の変化を見ると、令和4年5月の調査結果に比べ、令和5年7月の調査結果は、「自分は他人から必要とされている」や「自分のしていることには、目的や意味がある」、「自分の人生には、目標や方向性がある」、「多少のリスクが伴っても、新しいことにたくさん挑戦したい」という項目が5ポイント以上の上昇を示した。

また、現2・3年生の経年変化を見ると、現2年生では、「目標を立て、何かを達成した経験がある」の項目は上昇したものの、全体的に下降傾向にあった。これは、この学年の特性とともに、私たち教職員の指導が的確とは言えなかったと思われることから、今後、具体的な進路選択等へ向けてしっかり改善していきたいと考えている。一方、現3年生では、「自分の将来が楽しみである」という項目が10ポイント以上下降したが、上昇した項目が多く、全体的に良好な方向に変容していた。

キャリア形成に関する意識調査 18歳意識調査/日本財団(2022.3.24/日・米・英・中・韓・印) 本校調査(2022.5.10、2023.7.18/全学年)		韓国	日本	日本と 韓国との差	本校 R4 全校	本校生徒 と日本 との差	本校 R5 全校	本校生徒 と日本 との差	全校生徒 の変化 R4-R5	本校 R4 1年生	本校 R5 2年生	現2年生 の変化 R4-R5	本校 R4 2年生	本校 R5 3年生	現3年生 の変化 R4-R5
1	自分には、人に誇れる個性がある。	74.7	47.9	●	37.3	●	34.9	●		27.3	18.2	▼	51.6	50.0	
2	自分は他人から必要とされている。	68.6	52.7	●	21.7	●	27.9	●	△	9.1	9.1		29.0	46.9	△
3	日々の生活が楽しい。	73.3	67.7	●	72.3		75.6	○		77.3	59.1	▼	74.2	81.3	△
4	日々の生活で不安やゆううつ(心の落ち込み)を感じる。	49.0	62.3	●	36.1	○	40.7	○		22.7	31.8	△	38.7	53.1	△
5	勉強や仕事、趣味など、何か夢中になれることがある。	83.9	80.4	●	81.9		86.0	○		81.8	81.8		80.6	87.5	△
6	自分のしていることには、目的や意味がある。	76.1	63.5	●	50.6	●	55.8	●	△	50.0	54.5		58.1	53.1	▼
7	自分の人生には、目標や方向性がある。	78.6	60.6	●	59.0		64.0		△	77.3	54.5	▼	58.1	65.6	△
8	目標を立て、何かを達成した経験がある。	78.4	75.2		66.3	●	70.9			68.2	81.8	△	71.0	65.6	▼
1	将来の夢を持っている。	84.0	59.6	●	68.7	○	69.8	○		90.9	59.1	▼	77.4	75.0	
2	自分の将来が楽しみである。	82.0	57.8	●	77.1	○	62.8	○		81.8	72.7	▼	80.6	68.8	▼
3	社会が今後どのように変化するか楽しみである。	78.6	54.0	●	48.2	●	43.0	●		63.6	40.9	▼	41.9	37.5	
4	多少のリスク(困難)が伴っても、新しいことにたくさん挑戦したい。	77.6	49.0	●	54.2	○	61.6	○	△	68.2	36.4	▼	54.8	71.9	△
5	多少のリスク(困難)が伴っても、高い目標を達成したい。	78.8	44.9	●	47.0		46.5			50.0	31.8	▼	41.9	43.8	
6	リスクのある挑戦よりも、経済的安定を重視する。	75.7	70.4	●	31.3	●	41.9	●	▼	45.5	36.4	▼	35.5	53.1	△
7	リスクのある挑戦よりも、心理的安定を重視する。	75.4	68.3	●	31.3	●	45.3	●	▼	31.8	40.9	△	38.7	40.6	

【図31：意識調査結果】

以上の結果及び生徒たちのキャリア形成の実践の様子から、今回の研究や実践の成果を、以下のとおりにまとめた。

- 学校として、生徒のキャリア形成を支援・指導するためのさまざまな具体的な手立てを設定し、既存の教科授業や特別活動をはじめ、生徒の自主的な活動を関連付けた教育活動全体で行うキャリア教育の一例を構築することができた。
- 生徒は、進路選択を支援する機会や情報を得るための場を設けたことにより、主体性をもって自身のキャリア形成の方向性を考え、その実現のための自らの資質・能力を高めていこうとする意識と実践力を高めることができた。
- 教師は、意識調査の結果やキャリア・マネジメントシートの記載内容等から、生徒の「キャリア形成の方向性(抱く夢や目標等)」や現状を把握し、直接的なキャリア教育はもとより既存の受け持ち教科を通じて、個々の生徒のキャリア形成に資する視点と実践力をより確かなものにする改革の緒に就くことができた。

今後、今回の取組を持続可能な形に改善するとともに、さらに充実させ、生徒たちがより主体的にキャリア形成を重ねるための資質・能力をはぐくんでいきたい。

8 今後の課題とこれからの展開

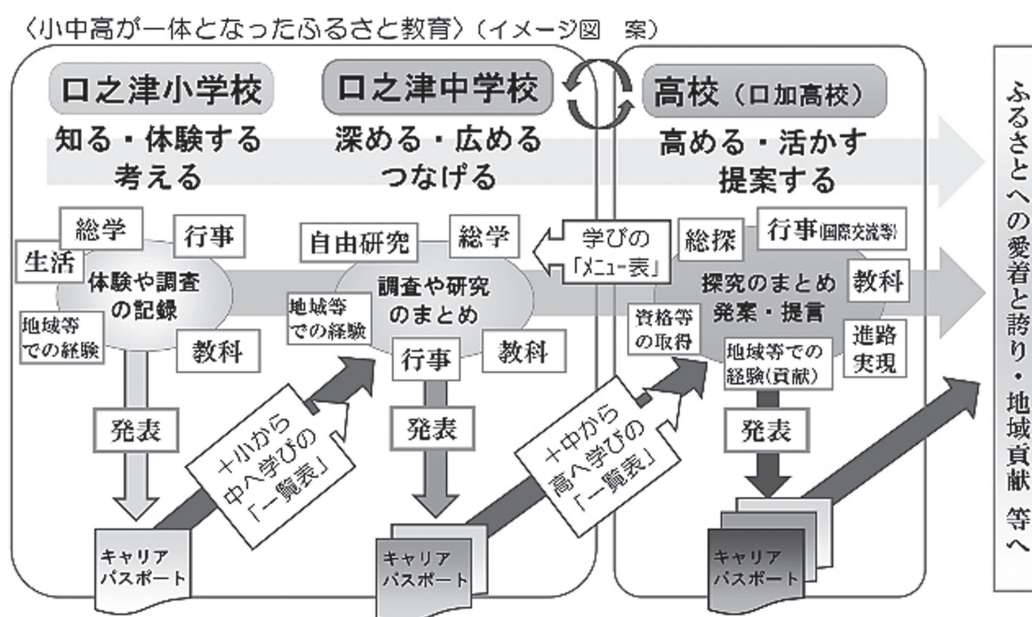
本研究の今後の展開を考えるにあたり、私たちは以下の課題を抱いている。

- ふるさと(南島原市、口之津町)をキャリア教育の中でどのように扱うか。
- キャリア教育における小学校や高校等との連携・協働をどのように進めるか。

学習指導要領は、全国で一定水準の教育を受けられるようにするための基準であるとする一方、地域の実態等を考慮して特色ある教育を進めることを求めている。また、改訂ポイントの一番目に掲げられた「社会に開かれた教育課程」は、前回の学習指導要領の「開かれた学校」から、教育課程と社会(地域)の関係にさらに踏み込んでいる。そして、地域(私たちのふるさと)に目を向けると、多くの魅力や強みがあるにも関わらず、さまざまな課題を抱えている。未来の地域を担うのは今の生徒たちである。その生徒たちが未来を歩み創るための資質・能力をはぐくむキャリア教育のあり方として、これまでのような地域の課題とは一線を画す(いわゆるニュートラルな)授業から「あなたたちに、この口之津の未来を託したい」とストレートに教育課程に盛り込む授業までの、どの辺りを取るかというのが課題の具体である。とりあえず私たちは「あなたがキャリア形成を考える上で、このまち(あなたのふるさと)の可能性を生かさない手はないんじゃないか」ということと、「このまちの課題を改善・解決する方法を、将来住まう地域の課題に立ち向かうための“汎用的能力”として身につけながら考えよう」という2つの方向性を描いている。今後も「南島原市立」の学校として、この課題に向き合っていきたいと思う。

もう一つの課題である「小学校や高校等との連携・協働」については、本年度、同じ地区内にある口之津小学校とともに長崎県教育委員会の指定を受けて「小中高一体と

なったふるさと教育の推進」と題した研究に取り組み、近隣にある長崎県立口加高等学校とともに連携・協働のあり方を探ることになった。ふるさと教育の推進を共通課題にして小学校での学びを生かし、高校での探究活動等につなぎながら、「もっと研究したい」が進学へ、「この方向で働きたい」が就職へ、そして、「豊かに生きたい」が生活(くらし)の充実へつながるキャリア教育を構築したいと考えている。下はそのイメージ図(素案)である【図32】。この研究を通して、より地域とともにある系統的なキャリア教育のあり方を探りたいと考えている。



【図32：小中高が一体となったふるさと教育の推進(素案)】

9 おわりに

教育に携わる私たちには「生きる力」をはぐくむという使命が課せられている。しかし、本研究を通して、日本の若者が自己肯定感や未来へ向かおうとする自分に対する自信が持てないことを知った。その傾向は本校の生徒たちにもあった。もしかすると、生徒の前に立つ私たち教員の中にもその傾向があるのかもしれない。

急激な変化の中にあっても、心豊かにたくましく生きる生徒の育成を実現するために、学校教育の改革が求められている。本研究に取り組みながら、そのことを改めて認識したとき、まずもって私たち自身が行ってきた取組を見つめなおさなければならないと実感した。「主体的かつ対話的に、そして深く学ぶ」という生徒に求めていることを自らも体現し、『師弟同行』の精神をもってキャリア教育のあり方を希求していきたいと思う。

生徒たちの中に「生きる力」をはぐくみ、人格の完成を目指そうとする「教育」という営みを職業として選んだ私たちにとって、真の教育改革は自己改革である。

引用

- 1) Carl Benedikt Frey and Michael A. Osborne、「The Future of Employment」、p.44、2013.9.17.
- 2) 武井俊輔、「国連安全保障理事会での発言」から、共同通信、2023.7.19.
- 3) 文部科学省、「中学校学習指導要領解説 総則編」pp..2-3、2017
- 4) 文部科学省、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実、5 児童生徒の発達の支援(2) キャリア教育の充実」、文科省ホームページから
- 5) 労働政策研究・研修機構、「学校時代のキャリア教育と若者の職業生活」、労働政策研究報告書 No.125、pp..8-12、2010
- 6) 文部科学省、「中学校キャリア教育の手引き」、pp..21-24、2011
- 7) 国土交通省国土計画局、「国土の長期展望 中間とりまとめ」、国土審議会政策部会長期展望委員会資料、2011
- 8) 日本財団、「18歳意識調査」、日本財団ホームページ、p.8、p.10、2022
- 9) 工藤勇一、「自律と尊重を育む学校」時事通信社、pp.. ii -vii、2022
- 10) 労働政策研究・研修機構、「学校時代のキャリア教育と若者の職業生活」、労働政策研究報告書 No.125、p.17、2010
- 11) 松本浩司、「高等学校におけるキャリア教育のさらなる展開に向けて」、名古屋学院大学論集社会科学編第49巻 第1号 pp..125-143、2012
- 12) 文部科学省、「新学習指導要領のポイント」、文科省ホームページから、2019

参考文献

- ・文部科学省、「中学校学習指導要領解説、総則編」、2017
- ・中央教育審議会、「令和の日本型学校教育の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～(答申)」、2021
- ・文部科学省、国立教育政策研究所、生徒指導・進路指導研究センター、「変わる！キャリア教育」、ミネルヴァ書房、2016
- ・国立教育政策研究所、「キャリア教育のススメ」、東京書籍、2010
- ・国立教育政策研究所、「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」、2021
- ・奈須正裕、「個別最適な学びと協働的な学び」、東洋館出版社、2021

その他

注1) 北村西望…芸術家、南島原市出身、長崎平和記念公園の「平和記念像」は西望作、1884-1987

注2) 古野清孝…「古野電機株式会社」創業者、南島原市出身、魚群探知機を発明、1920-2013

古野清賢…「古野電機株式会社」創業者、南島原市出身、魚群探知機を発明、1920-

注3) フォーサイト…スケジュール手帳、販売元：株式会社FCEエデュケーション

研究題目

未来の創り手に必要な資質・能力を育成する授業デザイン ～「ジリツした学習者」としての生徒の育成を目指して～

目 次

- 1 研究主題設定の理由
 - (1) 社会の動向から
 - (2) 昨年度までの研究と生徒の実態から

- 2 研究の主旨・内容・方法(副主題の設定理由と基礎研究)
 - (1) 国際社会全体で求められている教育の在り方(基礎研究①)
 - (2) コンテンツベースからコンピテンシーベースへ(基礎研究②)
 - (3) 昨年度までの研究まとめと今年度の方針(基礎研究③)

- 3 研究の実際(実践研究)
 - (1) 「個別最適な学び」 ～生徒も教師も多様な学びを選択～
 - (2) 「協働的な学び」 ～個の学びの拡充・深化～

- 4 研究の成果と課題
 - (1) 各教科の実践
 - (2) まとめと今後の課題

鹿児島県鹿児島市立吉田南中学校 校長 塚元 宏雄

1 研究主題設定の理由

(1) 社会の動向から

先の新型コロナウイルス感染症の感染拡大と国際情勢の不安定化という予測困難な時代の象徴ともいべき事態が生じ、新たに学校教育の課題が浮き彫りになるとともに、教育の担う「福祉の側面」が再認識されるに至った。また、データ駆動型社会の到来により、学校に対する社会の要請に変化が起き、公教育の在り方にも新たな問いが投げかけられるに至っている。教育現場では、指導観や生徒観など様々な「観」の見直しと共に、自校のカリキュラムや授業デザインの再構築に取り組んでいく必要性に迫られている。

令和5年6月16日に第4次教育振興基本計画が閣議決定された。この中で、中央教育審議会（以下中教審と表記）は「社会の現状や変化を踏まえて2040年以降の社会を展望したとき、教育こそが、社会を牽引する駆動力の中核を担う営みである」と述べている。その基本方針として「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根ざしたウェルビーイング向上」とを掲げた。

研究主題の「未来の創り手に必要な資質・能力」とは、予測困難で変化の激しい未来の中で、持続可能な社会を切り拓くことのできる力の基盤となる資質・能力のことであり、この資質・能力とは、学習指導要領に述べられている「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に他ならない。

このような社会の動向を踏まえ、「未来の創り手に必要な資質・能力」を育成するための授業デザインについて、研究を深めていくこととした。

(2) 昨年度までの研究と生徒の実態から

本校は鹿児島県総合教育センター（以下教育センターと表記）と提携し、研究を進めている。教育センターは令和2年度、「未来の創り手に必要な資質・能力を育成する学習指導」という研究主題のもと、「学びに向かう力」を涵養するための視点について研究した。それを受けて本校では、生徒が自らの学びに対して責任ある意思をもち、能動的な姿勢で「学び方」を会得していくための力を「学びに向かう力」として捉え、その育成に必要な授業を創出したいという思いから、令和3年度の研究副主題を「生徒が自らの学習のエージェントとなる授業デザイン」とし、実践した。

令和4年度は令和3年に中教審が取りまとめた「令和の日本型学校教育（答申）」（以下令和の答申と表記）に着目し、各教科の特質と生徒実態を踏まえつつ「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」を実現していく授業デザインの研究・実践を行った。

1年目の昨年度は、令和の答申に示される「個別最適な学び」と「協働的な学び」を、生徒の学びの場面における心情と関連付け、この二つの学びを具体的にどのように理解し、捉えればよいのかを職員で話し合い整理した。（資料1）

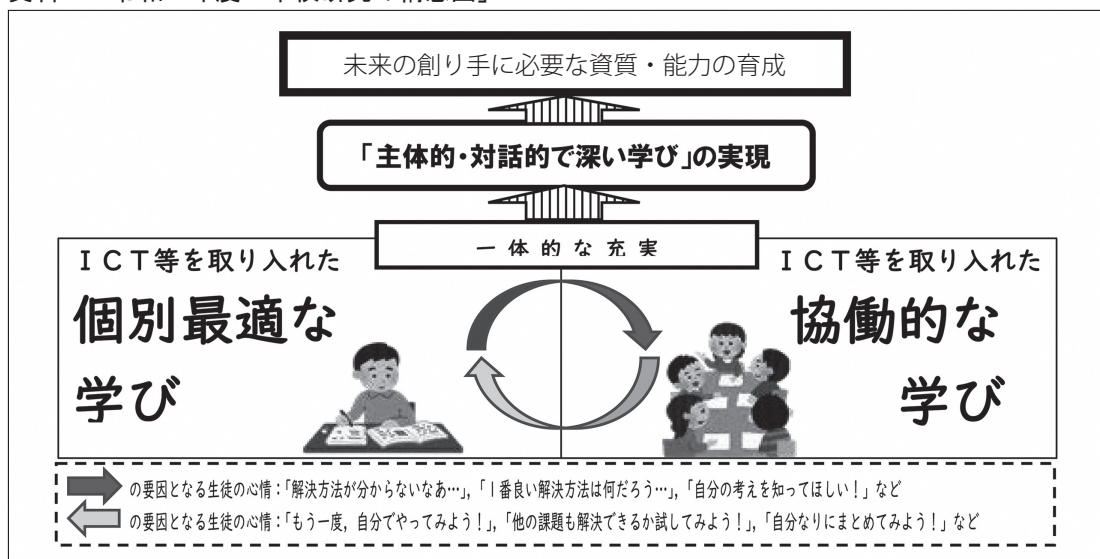
資料1 吉田南中が捉えた「個別最適な学び」と「協働的な学び」における生徒と教師の視点

	個別最適な学び		協働的な学び
	指導の個別化	学習の個性化	
学 び の 状 態	【生徒の心情】	【生徒の心情】	【生徒の心情】
	学習課題や目標に対して…	「〇〇に興味がある」	「誰かに教えてもらいたい」
	「自分の力で解決したい」	「〇〇について調べたい」	「別の考えを知ってほしい」
	「理解できるようになりたい」	「自分の将来に生かしたい」	「自分の考えを知ってほしい」
	「自信をつけたい」	「学習課題を自分で立てたい」	「困っている人を助けたい」
指 導 ・ 支 援	【生徒に必要な手立て】	【生徒に必要な手立て】	【生徒に必要な手立て】
	学習目標に対して、生徒の特性や学習進度、学習到達度に応じて、学習を行えるようにする。	生徒一人一人の興味・関心に応じて、異なる目標に向けて、学習を深め広げられるよう、自ら自分の力で学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する。	複数での活動の中で他者との意見交換を通し、自分の考えを吟味したり、新しい考え方を発見したりしながら、指導事項の定着を図るとともに、生徒の学びを深め広げるための機会の提供を行う。

ここから、生徒が自らの学びを調整し、主体的に学んでいくためには、教師がこれまで以上に生徒一人一人の成長やつまづき、個々の興味・関心等を踏まえ、きめ細かく指導・支援していくことの重要性が見えてきた。

また、「協働的な学び」は、個の学びをより深めるためのものであり、生徒の必要感や教師の身に付けさせたい力との両方の視点から、二つの学びを行き来するものであることも分かった。資料2は、昨年度研究の構想図である。これらの学びを実現するためには、生徒の動機付けや、課題に対し自己調整しながら最後まで粘り強く取り組もうとする姿の涵養が必要であることから、学習指導要領が示す「資質・能力」の一つである、「学びに向かう力、人間性等」の涵養をより重視した授業デザインの在り方を研究した。

資料2 「令和4年度 本校研究の構想図」



2 研究の主旨・内容・方法(副主題の設定理由と基礎研究)

(1) 国際社会全体で求められている教育の在り方(基礎研究①)

「OECD Education2030プロジェクト」において、OECDは今からの時代を生き抜く子どもたちのキーコンピテンシーとして、「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマを克服する力」「責任ある行動を取る力」の三点を挙げている。また、これらのコンピテンシーを身に付けるための概念・学習プロセスのデザインとして

- ・生徒のエージェンシー(生徒の意欲が喚起される授業デザイン)
- ・教師のエージェンシー(教師の「専門性」)
- ・学習の相互関連性と実生活との関連認識

・生徒が十分な情報を与えられた上で、選択肢があり、自らが考える機会があること等を挙げている。これらを総括的に考えると、各概念や考え方に新たな問いが立つため、上記プロジェクトは時間をかけ、多岐にわたって議論していく必要があることが分かる。例としては教師の「専門性」が、コロナ以前の時期とは明らかに異なる概念になってきているため、「教師の専門性とは何か」という新たな問いが生まれることになる。

(2) コンテンツベースからコンピテンシーベースへ(基礎研究②)

それでは、文部科学省や各地方自治体は学校教育の在り方をどのように捉えているのか。2017年版学習指導要領において、学力論が内容中心(コンテンツベース)から、資質・能力中心(コンピテンシーベース)へと、その質がシフトされ、授業の在り方など、現場の教育方法にも変化が求められた。生徒に求められる資質・能力を育むために「主体的・対話的で深い学び」の実現が必要とされるようになったことが一つである。この学びは教師による教授行為によって実現するものではなく、生徒側に生じる学びの質によって実現するものである。すなわち、生徒のよりよい学びの質を保障するために、教師は授業改善をする必要がある。

これは、従来の教師の「指導観」や生徒に対する「子供観」等に大きな一石を投じている。教師が準備した授業のプランを大幅に超えて、生徒が学び方を選択する場面が出てくるなど、「学びを生徒たちに委ねる」という教育活動に慣れていない教師が多いと推察されるからである。

鹿児島県教育委員会は令和4年度の全国学力・学習状況調査の分析資料において、鹿児島県の生徒の学力を以下のように分析し、全教師に訴えかけている。

(本県の児童生徒は)自己肯定感や挑戦心といった「学びに向かう力、人間性等」に係る調査結果については、全国平均を相当程度下回る結果となりました。(このことを足がかりに)「学ぶ意味」や「学力の本質」といったものを今一度問い直し、教師一人一人が持つ「観」を見つめ直すことを一緒にしていきたい。その結果として、県教育委員会から提案したい学びの在り方が「学習者主体の学び」です。

(3) 昨年度までの研究まとめと今年度の方針(基礎研究③)

令和2年度、本校の研究結果を次のようにまとめている。

- ・教師の意識により、発問の仕方や学習課題の提示の仕方、学習目標の立て方、見通しのもたせ方等が、生徒の主体的な学びにつながるようなものに変化している。教師がファシリテーター的役割に徹し、生徒が意欲的に、自律的に学びながら、達成感を得られるような学習につなげたい。

ここから、生徒が目前の問題に対して、自らの意志と責任で能動的な問題解決者となっていくことと、教師のファシリテーション力が求められるといえる。

生徒の自律性育成に着目して研究した令和3年度のまとめは以下のとおりである。

- ・生徒は「自律性」を自分事として捉え、近づく努力をしていた。その姿がまさに、「学びに向かう力」が備わった主体的な姿であり、同時に対話的で深い学びにつながったと思われる。
- ・計画的に進める力、多面的・多角的な考え方から新しいアイデアや工夫を創造する力などを育むための授業デザインを、様々な手法を用いて再構築していくことが、今後の課題である。

生徒の自律的な学びに一定の効果が見られたものの、見通しをもった学習計画を立てる力や考える力の育成が課題であることが分かった。また、教師の授業デザインについて研究を続けていく意義を確認できた。

個別最適な学びと協働的な学びを中心とした令和4年度のまとめは以下のとおりである。

- ・各教科の特性に応じ、新たな学習支援を行ったり、ICTを活用したりすることで、生徒は自分に合った学習方法を徐々に選択・実践できるようになるなど、自らの学びを調整する力の涵養につながった。
- ・各教科の実践には、あまり効果的でなかった取組があったり、予期せぬ悩み・つまずきに対する学習支援が不十分だったり、改善点が出てきた。

一年目の研究でもあり、生徒に学びを委ねる上で、その支援方法について、教師にも迷いがあったり、手探りで実施していたりする実態が見えてきた。換言すれば、この数年間、一貫して教師の授業デザイン力とファシリテート力が問われ続けているということになる。

以上3年間にわたる研究を踏まえて、本論文の副主題を

「ジリツした学習者」としての生徒の育成を目指して

とし、その進捗状況を整理するとともに、本校研究の課題を明らかにしようと考えた。なお、ギリツを漢字表記していない理由は「自立」、「自律」のどちらも生徒のエージェンシー形成に必要な要素であると捉えたからである。

3 研究の実際（実践研究）

教育センターでは、本年度から研究主題を「学習者主体の学びのデザイン～学び方×ICTで多様な学びを選択する～」と設定し、研究を行っている。「学習者主体の学び」とは、生徒が本来有能な学び手であることを前提に、生徒自身が「知識及び技能」を獲得し「思考力、判断力、表現力等」を働かせ、自らの目標に向かって学びを駆動させていく、生徒が主体となって展開する学びである。教師は、生徒の伴走者となり、生徒が主体的に学べる機会を提供したり、働きかけを行ったりする。それを繰り返して経験していく中で、生徒は主体的な学び手に成長していく。

これを受け、本校は「個別最適な学び」と「協働的な学び」の更なる充実を研究・実践していく上で、既存の授業の在り方を見直し、生徒が進んで「主体的・対話的で深い学び」を実現しようとする授業デザインを追究していくことにした。生徒が、自身の得意不得意や興味・関心に応じて、適した学び方や追究したい問いを選択したり考案したりするなど、選択機会を設けることで、主体的な学び手となれるように研究を進める。

資料3は、今年度、各教科が取り組んでいる授業デザインである。ここから二つの学びの更なる充実に向けて、教科毎に実践したものを示す。

資料3 本年度の各教科における研究の取組

研究の内容			国	社	数	理	音	美	保体	外国語
項	見出し									
個別最適な学び	ア①	教師の選択			○	○			○	
		【例1】予習型学習								
	ア①	教師の選択	○					○		
		【例2】単元内自由進度学習								
	ア①	教師の選択		○			○			○
	【その他】単元配列の組み替え等									
協働的な学び	ア	自らの考えを形成するための手立て	○	○	○	○	○	○	○	○
		生徒の選択	○	○	○	○	○	○	○	○
協働的な学び	イ	教科の「見方・考え方」を基にした観点の明示	○	○	○	○		○	○	○
		教科の「見方・考え方」を基にした「対話の型」の例示	○	○			○			

(1) 「個別最適な学び」 ～生徒も教師も多様な学びを選択～

ア 教師の選択

① 生徒の学びをより充実させるための新たな授業デザイン提案

各教科の学びの過程で、教科の「見方・考え方」を獲得させることは重要である。そこで、各教科における「見方・考え方」を働かせながら、三つの資質・能力を磨く

ことのできる「授業デザイン」を検討し、各教科において実践することとした。以下に示すのはその例である。

【例1】予習型授業

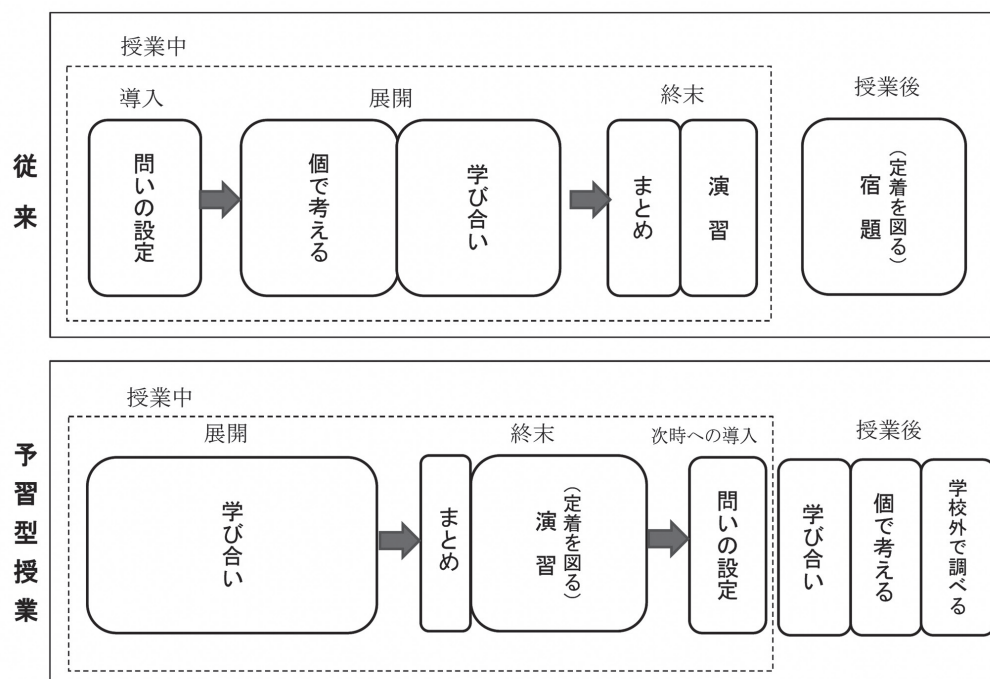
本校における予習型授業の「予習」とは、教師が、これから学習することに関連する内容やキーワード、既習事項等を用いた課題を作成し、生徒が自分なりに考えてくることを示す。例えば、数学(別添資料A)では「因数分解とは何か、教科書等で調べてくること」、理科では「イチゴは、有性生殖と無性生殖のどちらで増やすべきか、その理由まで考えよ」といった、生徒が自分なりに考えをもつ学習活動である。

予習した生徒たちは、これから学習する内容について、ある程度の「見通し」と「疑問」をもった状態になるため、能動的な授業参加ができる。また、疑問を解決するために、授業開始と同時に他者との協働的な学びを始めることができる。

教師にとっても、「学び合いの時間を十分に確保することができる」ことや「個々の演習の時間を授業内で確保できる」こと、「授業の終末に次時の予習をする時間を確保することで、次の授業まで学びを駆動させ続けることができたり、「予習」の取組み方が分からない生徒へ「学び方」についての学び合いをさせることもできたりする」などの利点がある。

このように予習型授業は、生徒が個別最適かつ協働的な学びを実現することを可能とする有効な手立ての一つであるといえる。本校では今年度、数学科、理科が独自の工夫を取り入れて実践している。また、一単位時間ごとではなく、新たな単元に入る前に「予習」を取り入れることで、生徒の次時への意欲や既習事項との関連性・連動性に気付かせる工夫をした教科(保健体育科)もある(資料4)。

資料4 従来の授業と予習型授業のイメージ図

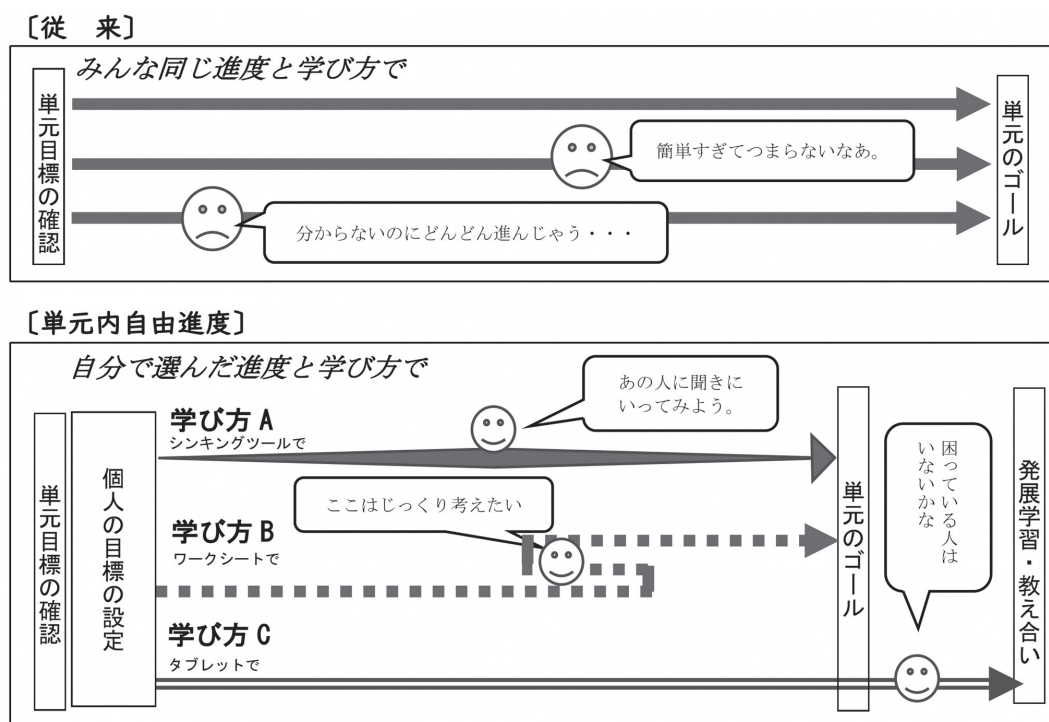


【例2】単元内自由進度学習

自由進度学習とは、1980年代に愛知県東浦町立緒川小学校が「一人ひとりの個性に合わせた深い学びを実現する教科の一人学び」を目指して積み重ねた実践で、授業の「進度」と「学び方」を、個々の学習者に委ね、各自が最適と考える学習計画を立て、自らの判断と責任で「自由」に学習していくという学習手法の一つである。

自由進度学習には、「単元内」、「教科内」など様々な種類がある。生徒は、単元の目標とゴール、単元で設定された時間を把握した上で、目標達成のために、自分に適していると判断した学習方法や材料を、複数の中から選択したり、知識や経験をもとに新たなものを考案したりし、各自の進度と学び方で学習を進める。教師は、生徒の進捗状況や理解度を把握し、個の支援や、必要に応じて学び合いを生み出す工夫など、ファシリテーションを行う。自由進度学習の学びを重ねるごとに、自ら学ぶ力や自ら考える力、学習を調整する力や工夫する力、また、学びを振り返る力等が伸び、ジリツした学習者へと成長していく効果があると言われている。今年度は、国語科、美術科、音楽科において独自の工夫をしながら、単元内自由進度学習の研究・実践を行っている(資料5)。

資料5 従来の授業と単元内自由進度学習のイメージ図



【例1・2】はあくまで手立ての一つとして捉えており、これらの手法に取り組むことそのものが目的となってしまうといけないと考える。また、どの教科・単元においても効果的な方法であるとは限らないため、実施目的を明確にもち、取り入れていく必要がある。

② 自らの考えを形成するための手立て

生徒アンケートの結果(別添資料B)より、「自らの考えや意見をうまくまとめられない時があるか」という質問に対し、約半数の生徒が「たまにある」と回答した。これは「考えの形成」に関わる部分である。

自らの考えを形成するためには、まず、問いに対する自分なりの立場や意見をもつ必要がある。その上で、その立場や意見に対する根拠を明確にし、言語化できると、自分の考えに自信をもつことができる。根拠は、自身の中だけで完結するのではなく、他者との聴き合いや学び合いの中で確かなものになる。これまでも指導の際は日常的に「根拠は何か」と問うているが、生徒が「自らの考えや意見をうまく形成し、まとめることができている」と実感できるよう、授業を工夫していく必要がある。以下に国語科の事例を提示する(資料6)。

資料6 国語科の事例

意見文を書こう：「観点」をもとに「根拠と意見のつながり」を確かめながら文章化する。


教師による問い直し

《意見文の型の例示》

【意見文の内容】
 共感できたのは、～だ。
 なぜなら～(体験談など)～
 調べてみると、当時も～

共感できなかったのは、～だ。
 確かに、調べてみると当時は～
 しかし、
 自分は～(現代や自分の見方考え方と比較)～

清少納言は、～



そう思ったのはなぜ？
 意見を支える根拠に
 なっている？

冬の段で共感できたのは、「雪の降りたるは言ふべきにもあらず」です。なぜかという、自分が実際に、雪が降っている様子を見たときに、「綺麗だなあ」と感じたからです。

共感できなかったのは、「屋になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。」です。なぜかという、現代では、あまり火桶は使われておらず、代わりにストーブやコタツが使われていて、火桶の火が白い灰がちになる様子がどのようなものか分からないから、それがどのように「わろし」なのか感じられないからです。ただ、火桶の火を調べてみて、清少納言は、火桶の火と白い雪のコントラストが良いと思っていて、白い灰がちになるとそのコントラストが無くなって良くないと言っているのではないかと思いました。

清少納言は、「うつくし」「四季」の段で子供の様子や雪の様子に「をかし」「うつくし」と感じているように、「自然」や「子供」など純粋なものに美しさや興味深さ、かわいらしさを感じていたのだと思いました。

教師による問い直しを繰り返すことで「根拠と意見がつながっている(いない)状態を捉えさせ、徐々に生徒同士で問い直しができる力を身に付けていけるようにする。

イ 生徒の選択

① 「個別最適な学び」を支える「学習の自己決定」

生徒の主體的な学びを保障するためには、一単元ないしは一単位時間の中で、自己決定をさせる機会があることが重要であると考えられる。

生徒が進んで学習に取り組む中で深い学びにたどり着くために、追究したい課題や学習方法を選択できる機会を設けることが重要であり、それが自己決定力を高めていくことに繋がっていく。そこで、本校では、一単元ないしは一単位時間において、生徒が自ら選択する機会を設定するようにした。以下、各教科の取組の一部を整理したものである(資料7)。

資料7 選択する学びの例

「追究したい課題」の選択	
① 「興味・関心」に応じた選択	音楽科：合奏に取り組む際、キーボードかリコーダーか、興味・関心に応じて選択する。
② 「得意不得意」に応じた選択	保健体育科：競技の技能を高めるために、必要だと感じる練習内容を選択する。
③ 「難易度」に応じた選択	国語科：「分かる」のレベル提示から、自己理解度を捉えてどの段階から取り組むかを選択する。
「学習方法」の選択	
① 「まとめ方」の選択	理科：考えの集約・整理の際、自分がまとめやすいシンキングツールを選択する。 美術科：タブレットに書き込むか、一から絵を描くか、まとめやすい方を選択する。
② 「調べ方」の選択	外国語科：ふさわしい表現を探す際、インターネットや教科書、辞書等から選択する。
③ 「演習方法」の選択	数学科：演習の際、AIドリルかワークか、理解に繋がりがやすい方を選択する。
④ 「追究方法」の選択	国語科：読解学習の際、ツールに整理するかワークシートに書き込んでいくか、解決方法を選択したり考案したりする。
⑤ 「資料」の選択	社会科：設定した課題を追究する際、活用したい資料を「資料箱」から選択する。

(2) 「協働的な学び」 ～個の学びの拡充・深化～

「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業をデザインし、異なる見方や考え方を組み合わせ、生徒一人一人の良い点や可能性を生かすことで、よりよい「学び合い」の中で個の学びを拡充・深化させていきたい。そこで、以下のような手立てを生徒の実態に応じて講じた。

ア 教科の「見方・考え方」を基にした学び合いのための観点の明示


学び合いで、論点を見失ったり、意見の伝え合いに終始したりし、個の学びが深まらないことがある。それを防ぐため、教師は、生徒の対話の際、どのような発言ができていけばよいのかを具体的にイメージし、必要な手立てを講じる必要がある。その一つの方法として、教科の「見方・考え方」をもとにした観点の明示の例を取り上げる(資料8)。

資料8 第三学年 数学 事例

($x+y+4$) ($x-2+y$) の展開の仕方について、「そのまま展開する」と、「共通部分を文字で置き乗法公式を使う」場合の、それぞれのメリットとデメリットを出し合う。

	そのまま展開	共通部分を文字で置き展開する
解き方の長所	・分かりやすい。 (前やこのと似ているから) ・どんな式でも使える。	・はやくできる。 ・見落としが少ない。 ・いつも通りにできる。 (2項×2項)
解き方の短所	・長くなるから、見落としが少なくなる。 ・時間がかかる → 疲れる。	・置き換えができない式がある。 ・置き換えたところが見つけにくい。

文字に置き換えることでどんなメリットがあるのかな？

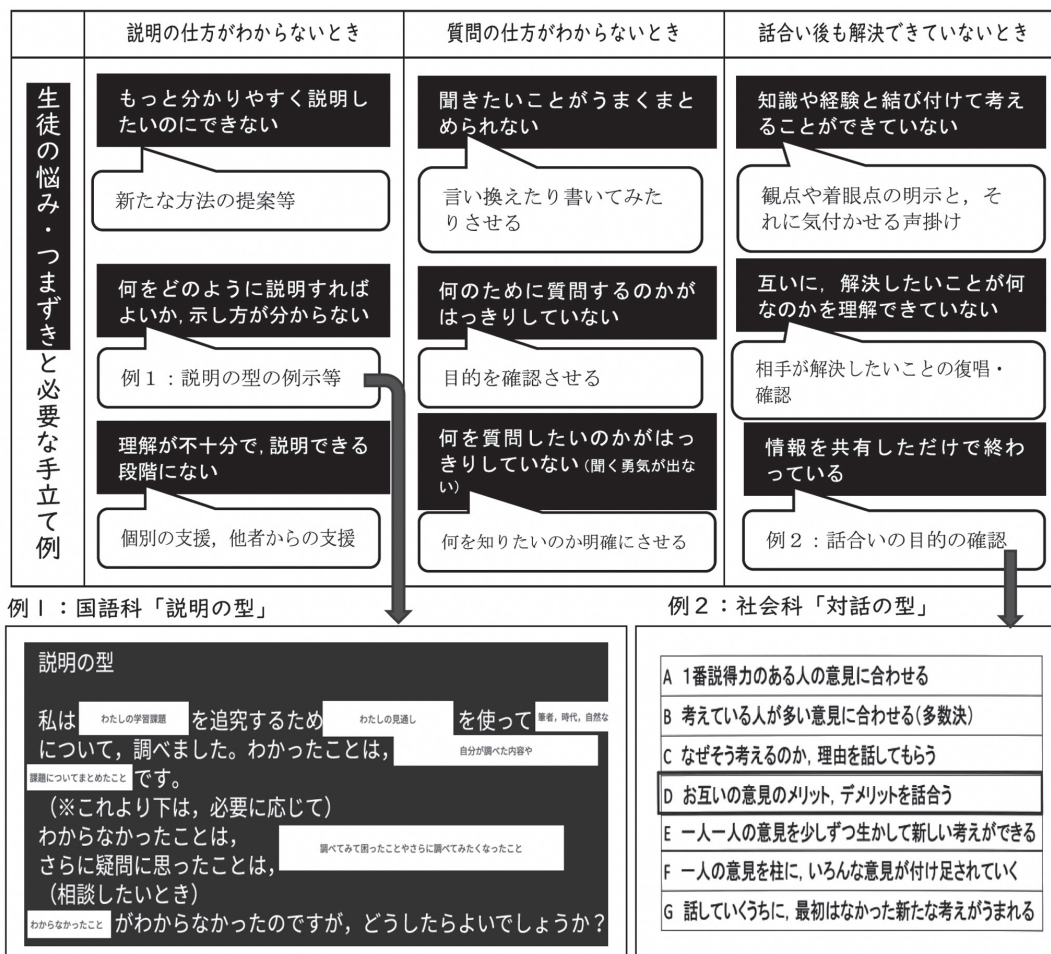


見慣れた式に戻せて、乗法公式が使えることじゃない。

イ 教科の「見方・考え方」を基にした「対話の型」等の例示

アンケートの中で、「説明の仕方」や「質問の仕方」が分からない、といった悩み・つまずきを感じている生徒が多くいた。そこで、その時の悩み・つまずきはどのようなものなのか、生徒の悩み・つまずきと必要な手立ての一例を整理した(資料9)。そこから、その内容・要因は多岐に渡ることが分かった。

資料9 生徒の悩み・つまずきとそれに対する手立て イメージ図



資料9にあるように、教師は、生徒がどのような悩み・つまずきを感じているのかを把握し、個への支援・指導を行う必要がある。例えば、「説明や対話をする際の型(例1)」や「話し合いの目的を示したもの(例2)」などを作成し、生徒が困った時や、よりよい解決策や答えを話し合う時のツールとして活用させる。

ウ 「協働的な学び」を支える「対話スキル」の獲得

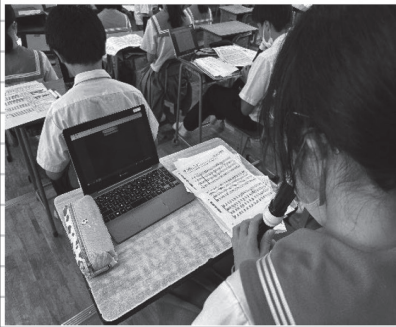

本校では、生徒会活動において話し合い活動を充実させられるよう、昨年度から、質問や意見を述べる時の手助けとしての「発言プロカード」と、話し合いの質を高めるための「対話ジリツチェ」(ジリツのチェックの略称で本校の造語)(別添資料C)を活用している。これらは、生徒の実態に合わせて項目を検討し、授業等での汎用

性を意識して作成したものである。生徒は、質疑で困った時には「発言プロカード」を、話し合い活動で困った時には「対話ジリッチェ」を参考に、他者と対話している。毎月の生徒会活動で繰り返し活用していくことで、授業における協働的な学びの場面にも効果が見られると考えている。そのために、会ごとに教師が価値付けをし、その効果を生徒たちが振り返る機会が必要である。

4 研究の成果と課題

(1) 各教科の実践

各教科の研究実践例の一部を簡潔にまとめた。

〈個別最適な学びの更なる充実を目指した実践〉	
国語科	外国語科
自由進度学習に適した「リフレクションシート」	個人の目標設定と自己評価ができる「チェックシート」
→教師の見取りやすさと生徒の自己調整のしやすさ	→活動前後の変容の見取りと指導方法の改善
別添資料Dを参照	別添資料Eを参照
「ポイント」 二色でチェックを入れることにより、変容を見取りやすく。	「ポイント」 身に付けたい力の明記、「学習方法」と「学習内容」を分けて振り返ることが出来る枠を作成。
音楽科	美術科
演奏の手助け道具としての一人一台端末の活用	一人一台端末の撮影機能で表現の幅を拡大
→音を聴いたり奏でたりする時間の十分な確保	→絵が苦手な生徒も主題を伝えやすくなる
	
「ポイント」 教師による模範動画の作成。	「ポイント」 ペンツールで画像にアイデアをイラストや文字で記入したり、加工前の画像と比較したり、主題がより伝わる工夫を可能に。

〈協働的な学びの更なる充実を目指した実践〉					
数学科	理 科				
<p>予習型学習の導入 →事前に自分の考えをもつことによる、協働的な学びの時間の十分な確保。</p>  <p>〔ポイント〕 予習した課題をロイノートに提出させ、他者の考えを共有することも可能に。</p>	<p>予習型学習の導入 →これまでの学習のレディネスをある程度揃え、協働的な学びの時間を十分に確保する。</p> <p>理科：予習課題 『イチゴは、有性生殖、無性生殖のどちらでふやすべき？』 イチゴ好きな佐々木さんが、園芸店でイチゴの苗を買ってきた。佐々木さんは、その苗を買って、収穫したイチゴを食べてみることもおいしかった。 そこで、苗をたくさんふやして、より多くのおいしいイチゴを収穫したいと考えた。</p> <p>問題 佐々木さんはイチゴの苗を、有性生殖によってふやすべき？それとも、無性生殖でふやすべき？</p> <table border="1" data-bbox="842 609 1209 788"> <tr> <td>自分の考え</td> <td></td> </tr> <tr> <td>理 由</td> <td></td> </tr> </table> <p>〔ポイント〕 これから授業で学ぶ内容が生活の中でどのように役立っているかが分かるような予習内容。</p>	自分の考え		理 由	
自分の考え					
理 由					
保健体育科	社会科				
<p>単元前レポートの活用 →競技知識に関するレディネスを揃え、競技に取り組む時間を確保。</p>  <p>〔ポイント〕 前学年で学習した技能のポイント等の振り返りや、新しく学習する内容の知識をまとめるもの。</p>	<p>「話合う内容の視点」と「話合いの目指す姿」の提示 →よりよい解決に向けた効果的な話合いを目指す。</p> <p>活動の流れ</p> <p>① 自然→産業→人口→伝統→交通の順に、担当者が発表をする。 例 鹿児島県自然分野には〇〇のようなよさがありますが、〇〇といった課題もあります。</p> <p>② 分野ごとに評価をする A今のままでよい B解決し（発展させ）たほうがよい Cすぐに解決し（発展させ）たほうがよい</p> <p>なぜそう考えるのか、理由を説明する</p> <p>③ 解決or発展させることによる他の分野への影響は？ ④ 1つの分野につき2分</p> <p>〔ポイント〕 着目すべき点の明示と、それをどのように用いて話し合いを進めればよいかが分かるように提示。</p>				

(2) まとめと今後の課題

今年度は、引き続き、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実について研究・実践を進めてきた。昨年度の研究課題と今年度の生徒の実態を踏まえ、二つの学びの手立てをブラッシュアップすることにより、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実をねらった結果、各教科において次のような取組と成果があった。

生徒が主体的・協働的に学習に取り組むことで、自他の学びを拡充・深化させていけるような授業デザインの一つとして、本年度は、数学科・理科・保健体育科が「予習型学習（予習型的学習）」を、国語科・美術科が「自由進度学習」を取り入れ、研究・実践を行った。

予習型学習により、生徒は、次時の見通しをもって授業に臨むことができ、主体的な学びの原動力となる「知りたい・確かめたい」といった学習意欲や、課題追究のきっかけとなる「問い」をもって能動的に授業に取り組む姿が見られた。加えて、個々のレディネス

がある程度揃えられたことで、学び合いの時間の十分な確保と共に、質の高まりが見られ、よりよい解決策や答えにたどり着く生徒が増えた。

自由進度学習では、生徒はこれまで以上に「学び方」にこだわり、自身の課題解決に適した解決方法を考え、既習の方法や新たなアイデアをもとに試行錯誤し、時には他者の学びの内容からヒントを得ながら、よりよい解決策を導き出そうとする姿が見られた。教師は、生徒が自分で学びを組み立てていけるよう、生徒の学びを予想し、個々の学びの状況を確認した上で、効果的と考える手立てを行った。また、生徒が協働的な学びから新たな気づきや深まりにたどり着けるよう、生徒同士をつなぐファシリテーターとしての役割を担った。これにより、自らの学習課題や自身の特性に適した「学び方」を習得でき、生徒が自分の理解度や追究したいことに応じて学習進度を調整したことで、一人一人の学びが深まっていく姿を見取れた。

さらに、社会科では「カリキュラムの配列の見直し」に着目し、単元をまたいで問い続けることで学びを拡充・深化させていく単元配列の組み換えを考案した。各単元の学びを関連付けながら課題解決を行うことで、生徒はよりよい解決策や答えについて根拠をもって説明し合う姿を見取ることができた。

ただし、全ての教科や単元において、授業の流れの変更が効果的とは考えていない。教科の特性や生徒の実態を踏まえた上で、生徒が主体的に学び、資質・能力を高めるために効果的な方法は何なのかを教師が判断し選択できること、それらの選択肢をもっておくことが重要である。

「個別最適な学び」の手立てについて、英語科では、語彙リストの帯活動の中で「学び方を学ぶ」学習を取り入れた。特に1年生において「知識・技能」に関する様々な学び方を体験させることで、どの学び方が自分に適しているかを理解し、選択する能力を高められた。また音楽科では、「改善方策シート」や「模範演奏動画」を作成し個のつまずきを支援する手立てを講じ、それぞれが選択した方法で演奏技能を高めていた。

「協働的な学び」の手立てについて、課題解決のヒントや考え方の道標となる「観点」を与えたり、対話で困った際に「説明の型」や「対話の型」を提示したりといった、生徒の悩み・つまずきに寄り添った手立てを講じた。他者と関わりながら、誰と、何に着目し、何を語り、最終的にどうしたいのかを意識しながら話し合いを行う姿が見られ、よりよい解決策や答えを導き出そうとしていた。

このように、これまでの研究の課題や各教科の特性に応じ「個別最適な学び」と「協働的な学び」の更なる充実を目指して研究実践を行ったことで、生徒の「自ら学習を進め、他者との対話を通して、よりよい解決策や答えを導き出そうとする姿」を見取ることができ、一定の成果があったと考えられる。

一方で、「協働的な学び」について、例えば「他者からヒントではなく答えを得ようとしてしまう」、「出し合ってまとまった考えについて問い直そうとしない」などの実態が見られ、共に学び合いながら考えを広げることはできても深めていくことに課題が残った。

「個別最適な学び」だけでなく、生徒たちがこれから羽ばたいていく社会で必要とされ

る資質・能力の一つでもある「協働する力」を高めるための手立てについて、今後も研究を進め、「ジリツした学習者」の育成に努めていきたい。

引用・参考文献

- ・ 今後の教育課程，学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会第5回 これからの社会を見据えて学校教育に期待されること（令和5年）：文部科学省
- ・ 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）（令和3年）：中央審議会答申
- ・ 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（令和3年）：文部科学省
- ・ 「令和の日本型学校教育」における学びのイメージ（令和2年）：中央教育審議会
- ・ 中学校学習指導要領解説総則編（平成29年）：文部科学省
- ・ 令和4年度 全国学力・学習状況調査鹿児島県結果分析（令和5年）：鹿児島県教育委員会
- ・ 調査研究発表会資料（令和3年）：鹿児島県総合教育センター
- ・ 超具体！自由進度学習はじめの一步（令和5年）：難波駿
- ・ 個別最適な学びの足場を組む。（令和4年）：奈須正裕
- ・ 開かれた協働と学びが加速する教室（令和4年）：川村茂雄
- ・ 次代の学びを創る知恵とワザ（令和3年）：奈須正裕
- ・ 令和2・3年度 鹿児島市教育委員会研究協力校「教育の情報化（算数科）」完全オンライン研究公開及び令和3年度 鹿児島市小学校複式学級指導法研修会資料（令和3年）：桜峰小学校
- ・ 教育のプロがすすめる選択する学び—教師の指導も、生徒の意欲も向上！—（令和元年）：マイク・エンダーソン 吉田新一郎訳

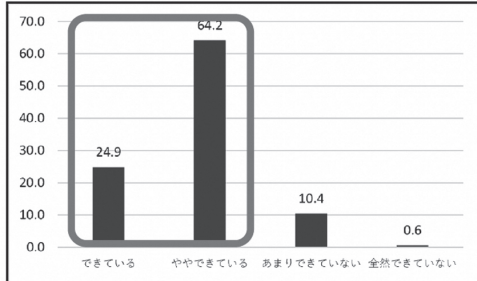
別添資料A 数学科指導案(本時の実際から一部抜粋)

過程	時間	形態	学習活動	教師の手立て【研究の視点】，評価(◎)								
展開	1分	一斉	1 学習問題を確認する。 $(x+y+4)(x-2+y)$ を展開しなさい。	1 電子黒板で学習問題を確認する。								
	1分	一斉	2 学習課題を理解する。 (3項式)×(3項式)の式を展開するにはどうすればよいか。									
	2分	個別	3 学習問題の解決方法について確認する。 生徒の反応例① $(x+y+4)(x-2+y)$ $= x^2 - 2x + xy + xy - 2y + y^2 + 4x - 8 + 4y$ $= x^2 + 2xy + y^2 + 2x + 2y - 8$ 生徒の反応例② $(x+y+4)(x-2+y)$ $= (x+y+4)(x+y-2)$ $x+y=M$ とおく $= (M+4)(M-2)$ $= M^2 + 2M - 8$ $= (x+y)^2 + 2(x+y) - 8$ $= x^2 + 2xy + y^2 + 2x + 2y - 8$	3.1 予習してきた解決の方法をロイロノートの共有機能を使い確認する。【イ-a】 3.2 意見交換させ，他者の意見に触れさせる。苦手な生徒には，参考になる生徒の考えを確認させ，取り組ませる。【イ-a】【イ-b】 < Coaching > 「どうしてこの式が出てきたの？」 「どうしてこう表したの？」 「この問題はどうか考えたらいいの？」								
	5分	ペア		◎ 既に学習した計算方法と関連付けて，式を展開する方法を考察し表現することができる。 [思考力，判断力，表現力等]								
3分	一斉		3.3 学習問題を全体で確認する。									
まとめ	5分	個別	4 それぞれの解き方の長所や短所を考える。	4.1 反応例①，②それぞれの解き方の長所や短所を考えさせる。								
	5分	ペア	生徒の反応例 <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>そのまま展開</th> <th>共通部分を文字で置き乗法公式を使う</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>解き方の長所</td> <td>○ 変形する手間なく変形できる。 ○ どんな式でも展開できる。 ○ 公式を覚えてなくてよい。</td> <td>○ 乗法公式を使って解くことができる。 ○ 計算間違いが少ない。</td> </tr> <tr> <td>解き方の短所</td> <td>○ 計算量が多い。 ○ 同類項を探さないといけない。</td> <td>○ 文字で置くところを見つけるのが難しい。 ○ 公式を覚えていないと解けない。</td> </tr> </tbody> </table>		そのまま展開	共通部分を文字で置き乗法公式を使う	解き方の長所	○ 変形する手間なく変形できる。 ○ どんな式でも展開できる。 ○ 公式を覚えてなくてよい。	○ 乗法公式を使って解くことができる。 ○ 計算間違いが少ない。	解き方の短所	○ 計算量が多い。 ○ 同類項を探さないといけない。	○ 文字で置くところを見つけるのが難しい。 ○ 公式を覚えていないと解けない。
	そのまま展開	共通部分を文字で置き乗法公式を使う										
解き方の長所	○ 変形する手間なく変形できる。 ○ どんな式でも展開できる。 ○ 公式を覚えてなくてよい。	○ 乗法公式を使って解くことができる。 ○ 計算間違いが少ない。										
解き方の短所	○ 計算量が多い。 ○ 同類項を探さないといけない。	○ 文字で置くところを見つけるのが難しい。 ○ 公式を覚えていないと解けない。										
習得・活用・探究	11分	個で選択	5 類似問題に取り組む。	5.1 ワークまたは，navima に取り組ませる。【ア-b】								
	5分	個別		5.2 類似問題に取り組ませ，ロイロノートに提出させ，生徒の定着度を確認する。								
導入	4分	個別	6 本時の振り返りを行う。	6 本時の授業を振り返らせ，ロイロノートに提出させる。								
	5分	個で選択	7 次時の予習を行う。	7 次時の予習に取り組む。								

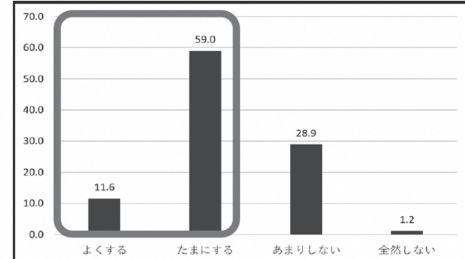
別添資料B アンケート調査の結果(調査対象：1～3年生生徒 182名回答)

「個別最適な学び」に関わるもの

- 1 授業の中で、何を学ぶかについて見通しをもち、学習課題を解決したり達成したりするために、自分から進んで学習に取り組んでいますか。
- 2 授業中、課題追究の過程で、うまくいっていないことに気付いた時や、新たな疑問や課題に会った時には、どこを修正すればよいか見直したり、他の方法を試すなどの工夫を行ったりしていますか。

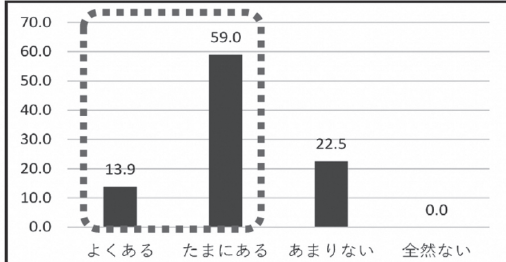


自ら学習に取り組むことができている (89.1%)



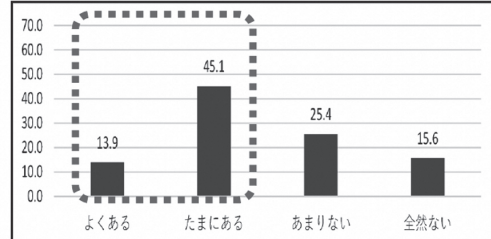
課題を設定し試行錯誤しながら追究することができる (70.5%)

- 3 授業の中で、自分の考えや意見がうまくまとめられない時がありますか。



考えの形成があまりできていない (72.9%)

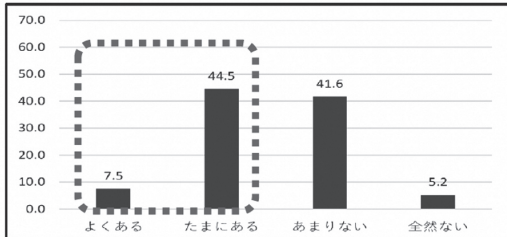
- 4 授業の中で、自分で学習に取り組む時に、「学び方がわからない」もしくは「どのように取り組めばいいかわからない」と感じる時がありますか。



自分の課題を追究するに適した学び方がわからない (59.0%)

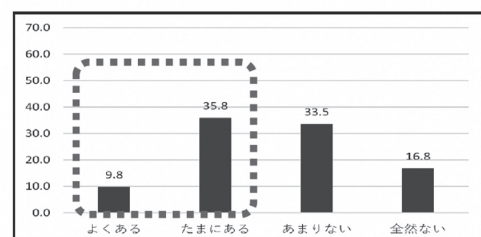
「協働的な学び」に関わるもの

- 5 授業の中で、他の人に自分の考えを上手く説明できず、理解してもらえない時がありますか。



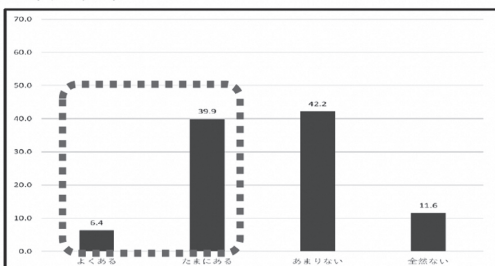
説明が上手くできない (52%)

- 6 授業の中で、わからないことについて質問したくても、何をどう聞けばいいかわからない時がありますか。



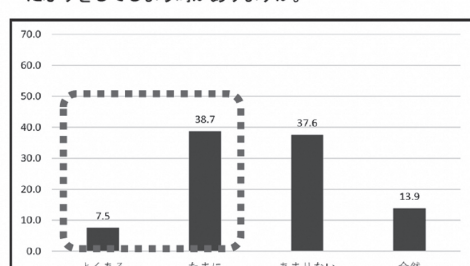
質問や問い直しが上手くできない (45.6%)

- 7 授業の中で、話し合いや意見交換をしても、課題が解決しないままの時がありますか。



話し合い後も解決していない (46.2%)

- 8 授業の中で、他の人の説明を聞いてよく分からなくても分かったふりをしてしまう時がありますか。



説明を聞いて分かったふり (46.2%)

別添資料C

発言プロカード

学級専門部会 発言プロカード (年 組 部)

<input type="checkbox"/> 意見 「～だから、～しだばいいんじゃない。」	<input type="checkbox"/> 質問 「具体的には?」「いつから」「誰がする?」	<input type="checkbox"/> 確認 「これって、どういうこと?」「これって、OOするっていうこと?」
<input type="checkbox"/> 反論 「～は、あまり効果がない気がする。」 「だって、～理由～」	<input type="checkbox"/> 目的 「～は、なんのため?」「どうさせたいの?」	<input type="checkbox"/> 評価 「～するのが、～という効果がありそうで、とていいと思う。」
<input type="checkbox"/> 応用 「OO部の先月のOOが効果的だったから、 <u>互</u> <u>組</u> して(応用して)みては?」	<input type="checkbox"/> 提案 「例えば、～してみるのはどう?」「～より、～のほうが効果がありそう」	<input type="checkbox"/> 連携 「～部が～をするみたいだから、 <u>一緒に～し</u> <u>ら</u> どう?」

発言プロカード活用場面



学級専門部会にて、他の専門部との、具体策に対する質疑応答で活用している。☆の数は、難易度を示し、どのように発言すればよいかの例が、小さく示されている。

対話ジリッチェ

これだけは！と思うものを一つ選び、○を付けましょう

対話ジリッチェ

受け取る	受け取って返す	引き出す・生み出す	展開させる(司会)
手遊びをせず、今するべきことに集中する姿。	話し合うべき内容に対して、自分の考えを発言する姿。	相手がうまく話せずにいるときに、「こう言いたい?」と言い換えられる姿	発言する順番を工夫して、全員から意見を引き出す姿
相手が言いたいことは何なのかを考えながらしっかりと聞き、理解する姿	相手の意見をいったん受け入れ、その上で意見や質問をする姿	話したような様子をくみ取り、「OOさんはどう思う?」と話を振る姿	無駄話や話合いの視点がズレた時、話し合いの流れを軌道修正する姿
相手の意見をメモすることで、話の内容をしっかりと理解する姿	複数の意見をまとめて、分かりやすく伝える姿(つまり～)	集中していない人が集中できるように、声掛けができる姿	話し合いの目標(ゴール)に近付くよう、工夫して話し合いを進める姿
	意見の共通点や相違点を発見して、伝える姿	みんなが意見を出しやすいようになるよう、前向きな発言で雰囲気を作る姿	みんなが確認できるよう、全員から出された意見を整理して伝える姿
	論点のズレに気づき、それに気づかせる声掛けができる姿	みんなの意見をもとに、新たなアイデアを提案する姿	少数派でも良い意見があれば拾い、それについて話題を広げる姿

「ジリッチェ」とは、「ジリツのチェック」の略称で本校の造語。ロイロノートで作成。話し合いを行う際の「態度や発言に関する目指す姿」を表にまとめたもの。生徒の実態と、目標にしてほしい話し合いの姿とを掛け合わせ、生徒会係の教師が作成した。生徒会専門委員会の開始前に、目標とする姿を一つ選び、○をつけて提出箱に提出する。終了後にアンケートで振り返りを行っている。

次からは分からないところは積極的に質問したい。

次はもっとみんなの考えをまとめていい意見を出したい

代議委員として前向きに物事を考えていきたいです
後期でもこの仕事をしたいと思っているので

別添資料D

国語リフレクションシート

「自由進度学習」～ミッション編～		学習計画	
<p>ミッション1</p> <p>必ず取り組むミッション →計4時間を使って</p> <p>ミッション2</p> <p>口書きの言いたいことを整理 せよ。</p> <p>ミッション3</p> <p>口書きの言いたい「言葉」に 対する考えを「身近な具体 例」にして紹介しよう。</p> <p>＝ 一部読解活動 ＝</p>	<p>私は</p> <p>考える</p>	<p>私は</p> <p>ジリリチェ</p>	<p>身に付けたい力</p> <p>① 「事実に意見」を区別する力 ② 抽象的な考えを、具体的にどうい うことか具体例を使って説明する力</p> <p>わたしの学習課題</p> <p>筆者は、桜から、美しい 言葉についての何を学ん だのかを理解したい。</p>
<p>私は</p> <p>「学び」の振り返り</p> <p>学習方法 ↑ が役に立った</p>	<p>筆者の体験と、 体験から生まれ た言葉に対する 考えを結びつけ てまとめる方法 が役に立った。</p>	<p>私は</p> <p>「学び」の振り返り</p> <p>学習内容 ↑ が役に立った</p>	<p>わたしの見通し</p> <p>筆者の体験談に着目し、体験と、美しい言葉につ いての筆者の考えを結びつけて考える。</p> <p>学びのゆかり</p> <p>筆者が書いていたのは、おしゃべり 桜の花びらのように、一つ一つの言葉の背後には人間 を背負っているため、美しい言葉を使うには、まず、人間 そのものが美しくならなくてはならないということ。</p>

単元の学びの振り返り

この単元を通して、自分の学びの振り返りシートに記入し、振り返りシートに記入した内容を話し合おう。

単元の目標


筆者の「体験から生まれた『言葉』に対する考え」を読み、身近な具体例を交流しよう。

言語活動

「関連付けて整理すること」で、筆者の考えを理解し、身近な具体例を紹介し合う学習
をします。

別添資料E

英語科 発表チェックシート



英語科 発表チェックシート

No. () Name ()

(1) 「つかむ」・・・鉛筆(黒)で自分の学習
目標とする評価点を○で囲みます。

(2) 「振り返る」・・・ペン(赤)で自分の学習
状況の自己評価点を○で囲みます。

観 点	項 目	評 価
準 備	役割分担をして、責任感のある活動ができています。	④ ・ ③ ・ 2 ・ 1
	話し合いて、積極的に自分の意見を出しています。	
	分かりやすい英語表現になっているかどうか確かめています。	
発 表	アイコンタクトで、聞きとりやすい速さで話しています。	④ ・ ③ ・ 2 ・ 1
	相手の意見を尊重しつつ、自分(たち)の考えを話しています。	
	相手が理解しているかどうか確かめながら話しています。	
<p>＜振り返り＞</p> <p>自分の際には、AIは便利だと思っただけ。他の視点から見れば意見、採り得る面 もある。AIに反対する考えが深まった。</p>		

研究題目

小学校第5学年の生命区分における生態学の追究
～オイカワを扱った動物物語の編集～

目 次

- 1 研究の主旨
- 2 研究の内容と方法
- 3 具体的な活動
- 4 研究の成果
- 5 今後の課題

静岡県三島市立山田小学校 教諭(再任用) 野口 厚

1 研究の主旨

令和5年3月、定年後、念願が叶って現在、再任用フルタイムで小学校理科専科の加配教員として三島市立山田小学校に勤務している。定年までの38年間の中で小学校には3年間の勤務経験があるものの、管理職としての勤務だったので、理科授業のほとんどは中学校で行ってきたということになる。よって、現在携わっている小学校での理科授業は、義務教育9年間の理科教育を見通した指導計画をしっかりと立てることができ、メリハリのある授業内容となっている。

さて、理科教育の4区分のうち、生命区分は動植物を扱うため、かねてから飼育や栽培のタイミングと、それに合わせた観察と実験を行うための指導計画の調整が課題であった。

また、教科書は全国の小中学校で汎用できる実験試料を扱っているため、時として、その地域に合致していない場合がある。その一例が、小学校第5学年で扱っているメダカである。静岡県の場合、東京書籍、大日本図書、啓林館が採択教科書であるが、そのどれもがヒメダカを扱っている。しかしながら、静岡県東部、特に三島市においては、田んぼや河川のコンクリートによる整備と、昨今の地球温暖化によって、クロメダカやヒメダカを見かけることはなくなってしまった。

そこで、三島市の河川でよく見かけることができるオイカワを実験試料として扱い(資料1)、シートン動物記に習って児童一人一人が動物物語を編集すれば、文系思考が強い児童も含め、全児童が魚類の生態を洞察的に観察する力が身に付くであろうという仮説を立て、研究することにした。

資料1 オイカワの採用

普通種：オイカワ



教科書：ヒメダカ



2 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

内容1：三島市の清流に生息するオイカワの生態を調査し、飼育が難しいとされる雨季と夏季の飼育方法を見いだす。

内容2：動物文学中のいろいろな動物物語を検証し、児童が編集するのに相応しい著書を選択する。

内容3：児童がオイカワを主人公にして動物物語を編集し、オイカワの雄雌の違い、ひれの位置、走性などの生態を洞察的に観察する。

(2) 研究の方法

- R04 8月 三島市内の淡水魚調査
三島市内を流れる源兵衛川に生息する淡水魚について、その同定と生息域を調査する。
- 10月 淡水魚の飼育方法調査
山梨県立富士湧水の里水族館を訪問し、淡水魚の飼育方法について、理論と実際を調査する。
- R05 3月 普通種の調査
神奈川県立生命の星・地球博物館を訪問し、普通種について、過去と現在の種の変更について調査する。
- 4月 飼育用水槽の立ち上げ
飼育用の水槽を3つ用意し、オイカワを入れる前に、バクテリアの繁殖を促し、循環型のアクアリウムを作る。
- 5月 オイカワを投入
3つの飼育用水槽にそれぞれ計画的にオイカワを投入する。①雄1匹と雌1匹、②小型6匹、③大型4匹と小型4匹である。
- 6月 動物文学の調査
シートン動物記をはじめ、フェアブル昆虫記、小鹿物語などの動物物語を調査し、生態学の色合いの濃い著書を選択する。
- 7月 動物物語の編集
児童一人一人がオイカワを主人公にした動物物語を、独自の感性で編集する。その際、生態を洞察するヒントについて助言する。
- 8月 評価
児童の作品を読み解いて評価する。その際、生態学の観点(体のつくり、走性など)の含み度合いに注目する。

3 具体的な活動

(1) 研究内容 1

三島市の清流に生息するオイカワの生態を調査し、飼育が難しいとされる雨季と夏季の飼育方法を見いだす。

ア 三島市内の淡水魚調査

メダカは大きな目が頭部の上から飛び出しているのも、そのように呼ばれている普通種であるが、田んぼの減反とあぜ道のコンクリート化で見つけるのが難しくなった。三島郵便局の北側にある小川に数匹を発見した(資料2)。三島市の現在の普通種はオイカワとアブラハヤであろう。市内を流れる源平衛川などでよく見かけることができる。コイは大場川などで見ることができるがほとんどが外来種なので扱わないことにした。

資料2 三島市で発見したメダカ(クロメダカ)

三島郵便局の北西方向



希少種：クロメダカ



イ 山梨県立富士湧水の里水族館を訪問

当水族館は山梨県の忍野村にあり、日本最大の淡水魚であるイトウの飼育で有名である。イトウやニジマスなどの大型と、ヤマメやオイカワなどの小型が二重の水槽で区切られて水流に逆らって泳いでいるので、まるでガラスに張り付いたように見え、感激した。ここでは清流に生息するオイカワなどの飼育方法を調査した。メダカやキンギョに比べて6月と7月の高温に弱く、またそれに乗じて酸素濃度が低くなることが課題である(資料3)。

資料3 山梨県立富士湧水の里水族館を訪問

小型淡水魚の回遊



大型淡水魚イトウの回遊



ウ 神奈川県立生命の星・地球博物館を訪問

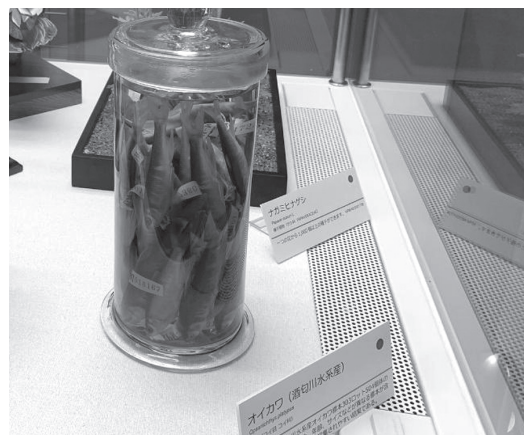
当博物館で普通種について特別展示をしていたので訪問した。普通種という言葉は聞きなれないが希少種の反対語である。この展示で普通種のオイカワに注目し、三島市でもオイカワが普通種であることを確信した(資料4)。普通種は希少種ではないのであまり注目されないが、普通にその辺にいるので、生態を観察するにはうってつけである。三島市では、もはやメダカは希少種であるので、実験試料としては不適切であると考えます。

資料4 神奈川県立生命の星・地球博物館を訪問

普通種の企画展



普通種のオイカワの標本



エ 飼育用水槽の立ち上げ

水槽にオイカワを投入する前に1か月をかけて飼育用水槽を立ち上げた。山梨県立富士湧水の里水族館で学んだスキルを活かして、ろ過装置は対流型にし、高温対策で風通しのよい廊下に3台を設置、窓には暗幕を付けた。また同時に、ろ過器のろ紙と、水槽の底の砂利にバクテリアを繁殖させ、1か月後、水質が無色透明になるまで安定したので、オイカワ20匹を投入することができた(資料5)。

資料5 3台の水槽にオイカワを投入

3台の水槽を設置



バクテリアの繁殖



オ 日頃のメンテナンス

週休日を含め毎日のメンテナンスが必要である。餌は毎日、午前7時に薬さじ1杯を1回与え、同時にバクテリアを水20 lあたり20 m l投入した。水の入替えは週に1回、全体の3分の2を交換、この時、大気圧を利用したポンプで排水するが、水槽の底に溜まっているフンや餌の残物を吸いだした。高温対策で毎日、朝と夕方、廊下の窓を開けて空気を入れ替えた。

(2) 研究内容 2

動物文学中のいろいろな動物物語を検証し、児童が編集するのに相応しい著書を選択する。

ア 動物文学の調査

児童が生態学に取り組むにあたり、理科好きな児童はもちろん、理科が少し嫌いで、しかも事実が端的に連なる論文や説明文が苦手でも、動物文学のように、動物が主人公になって人間のようにしゃべったり感情を持ったりしていれば、生態学を弊害なく始められると考えた。

動物文学には童話や小説などもあるが、生態学として扱うので、科学的な視点、客観的な観察を重視し、いわゆるメルヘンチックな文学は扱わないことにした。

そうすると、「イソップ寓話」や「吾輩は猫である」は小説性が濃いということになり、対して、「博物誌」や「ビーグル号航海記」「ファーブル昆虫記」は、本来は生物の生態の記録であったものに人間性を入れて、読者がなじめるようになっている。

これらの中でも、「シートン動物記」は動物たちの行動をしっかりと観察して、生態学そのものを書き上げているので、最適と考える。

イ シートン動物記の調査

この著書を調べると、当初は児童向けではなかったようで、しかしながら、その後、動物の一生や、動物の自然界での役割が動物愛護の精神を説くのに必要であることが取り上げられると、児童向けの動物物語として、人の言葉を話す動物が登場し、再び出版されたという経緯があるようだ。

シートン動物記は当時としては新分野で、なるほど、内容は生態学そのもので、読んでいるうちに例えば、オオカミ「ロボ」についても、とてもドラマチックで、オオカミの生活や一生が順序よくわかるようになっている。

ウ シートン動物記の導入

論文や説明文が苦手な児童でも、シートン動物記を提示すれば、関心をもって生態学に飛びつくと考え、まずは大学教授が書き上げた論文を提示し、次にシートン動物記を提示した(資料6)。

資料6 シートン動物記の採用

通常の論文	シートン動物記
<p>第6章 生命科学と社会(6)</p> <p>ルツノガエル、ネコママガエル、ヤドクガエルなど、大きさも形態もさまざまです。【写真1】はアマガエルの一種ですが、ウツボカズラのような食虫植物のツルツルのふちに、粘液のついた脚で落ちないように密着しており、ハエなどが食虫植物のツボに落ちる前に横取りしてしまいます。ただし、ときどき脚をすべらせてツボに落ち、食べられてしまうこともあるようです。まさに、人生はリスクとリターンのかねあいの象徴とも言えます。</p> <p>一般的にカエルは水中と陸上の双方で生息しているので、かなりバリエーションに富んだ行動ができます。しかしこのことが原因で、熱帯が世界を覆っていた第三紀までは繁殖しましたが、寒冷化が進むとともに、またツボカビなどの原因によって、両生類の中でも全世界的に減少、絶滅傾向にあります。これから紹介する珍しいカエルの多くは絶滅しています。</p> <p>たとえば、コノハツメガエルやミツツノコノハガエルのように、周囲の枯れ葉などにカムフラージュするカエル、マダラヤドクガエル、モウドクフキガエルなどのように狂言をもっていると警戒色であら</p>	<p>銀王ロボ</p> <p>—— カランボイの王様</p> <p>カランボイは、北極ニューメキシコにある広い放牧地である。昔かな放牧と、おびただしい羊や牛のむれなす地であり、うねりつづく高原と、すえはカランボイ河にそいで一つになる、いくつものたいせつな流れにたぬかれた土地である。その河にちなんで、この地域は「カランボイ」と呼ばれる。この河で、この河のあたりにわたってわがもの顔に力をふるう王様というの。頭の年老いた灰色狼であった。</p> <p>メキシコ人たちが、「ロボ大將」とか「王様」とかよんでいる。この狼は、いくつもの年をいだが、カランボイ谷をあらしまわっている。灰色狼の名だたる一隊をひきつづけたすばらしく大きな指揮者であった。羊飼いのほか、牧場にはたらくものはだれでも、この狼をよく知っていた。彼がその眼をひきいてあらわれると、牛たちはすつかりおびえたりしてしまし、持主たちはだんだんふんできしがるのだった。ロボ大將は狼仲間の人で、その大きさにふさわしくずるがしこくもあり、たくましくもあり、夜、かれが吠え、声はよく知られていて、仲間どの声ともたやすく区別がついた。ふつうの狼なら、牛飼いが野宿しているところまわりで、中すぎまでほえまわっているように、だれひとり気にもとめないのだから、ひとたび、老王のおもしろい咆哮が、あなたの喉からどろきわたると、見張人たちはすわとばかり身をこして、あく朝、牛をおそったまますくもむざんを襲撃のあとを眼にする。かくごをさめるのであった。</p> <p>ロボ大將がひきいる一隊は、小さなものにすぎなかった。私にはこれなぞだがさっぱりわからなかった。かれほどの地位と勢力に</p>

両者を比較すると、後者は文章そのものは長くなるものの、児童らにとっては人間味のあるオオカミ「ロボ」が自分や仲間のことを考えて行動するところに関心が沸き、挿絵がなくても脳裏にその光景が思い浮かび、ついでには、この後、オイカワを主人公に物語を編集する制作意欲が沸いてくるというものである。

(3) 研究内容 3

児童がオイカワを主人公に見立てて動物物語を編集し、オイカワの雄雌の違い、ひれの位置、走性などの生態を洞察的に観察する。

ア 児童による水槽①、②、③の選定

設置した3つの水槽には、それぞれ、①雄1匹と雌1匹、②小型6匹、③大型4匹と小型4匹を入れた。これはオイカワの走性を引き出すために計画的に入れたものである(資料7)。

資料7 3種類の水槽



①の水槽は雄が雌を追い回す行動を想定したもので、計画通り6月の繁殖期になると雄は体表に赤褐色と紺色の縞模様が鮮明に出て、ひれも大きくなって赤褐色が入り混じるようになった。そして雌を執拗に追い、児童の関心と呼ぶところである。

②の水槽は同じ大きさのオイカワが集団行動をすることを想定したもので、計画通り5月中には6匹が揃って対流に向かって泳ぎ、静止したように見えるようになった。人影が近づけば6匹が水槽の隅に隠れるようになり、これも児童の関心と呼ぶものである。

③の水槽は体の大きさが異なるオイカワを混在させた。これは山梨県立富士湧水の里水族館で学んだスキルとしては不適切な手法であるが、大きなものが小さなものを追い出す縄張り行動を想定したもので、計画通り5月中には大きなものと小さなものが水槽の中で分かれた集団になった。餌を与えた際も大きなものの集団が食べた後から、小さなものの集団が追って食べるなど、興味深い行動が見え始めた。これも児童の関心と呼ぶものである。

児童一人一人は、これら3つの水槽から1つを選定し、主人公のオイカワを決めて物語を脳裏で組み立てるが、物語に発展性がなければ、別の水槽に変える児童もいた。ここで重要なのは、オイカワの行動を詳細に観察することが、生態学の基本であることを繰り返し確認した。

イ 1時限当たり3回の個別による観察

オイカワの観察はクラスを3集団に分け、1集団が1時限の授業の中で1回あたり5分間の観察を3回繰り返すようにした。児童らは他の集団が観察している間は、個々に物語を編集した。編集している間にオイカワの行動に課題を見つけては、次の観察の機会にそれを確認していた。

児童一人一人の観察力は回を重ねるごとに洞察的になり、オイカワの体の形がいわゆる流線形で美しく、速く泳ぐ魚類であること、また、ひれは胸びれ、腹びれ、尻びれ、尾びれ、第一背びれから成り、典型的な魚類の体のつくりをしていることに魅了されたようだ。

①の水槽を観察していた集団は、雄の体表の柄が雌のそれとは大きく異なっていることを容易に見いだしていた。また、どのひれも雄の方が雌よりも断然に大きいことから雌雄の区別も容易であった。雄は雌を水槽の壁に衝突する寸前まで追い回し、争いをしているかのように見えたようだ。これらの行動は物語を編集する際、内容に広がりが見られることが期待できる(資料8)。

資料8 水槽①(雄1匹・雌1匹)

全体の観察



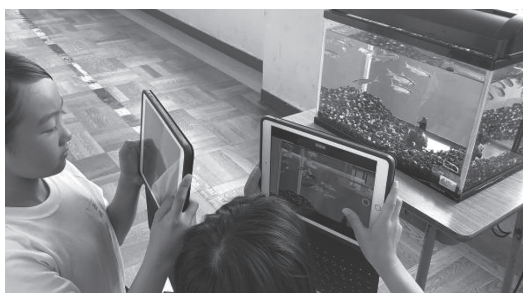
雄の体表の観察



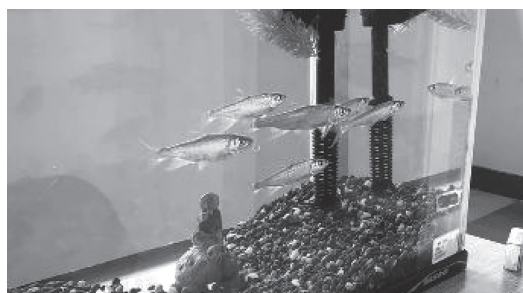
②の水槽を観察していた集団は、対流型ろ過装置によって水槽の中で一方向に水流が生じ、6匹すべてのオイカワがその流れに向かって泳いでいることから、推進力と水流力がちょうどつり合い、結果、6匹が水中で静止しているように見えていることに不思議さを感じていた。このオイカワの行動こそが水流に対する負の走性で、期待していた観察眼であった。また、先頭にいるリーダーが動く方向に残りの5匹がついていく様を集団行動と捉え、物語を編集する好材料になった(資料9)。

資料9 水槽②(小型6匹)

全体の観察



集団行動の観察



③の水槽を観察していた集団は、大型のオイカワの集団と、小型のオイカワの集団のそれぞれの行動の違いに着目していた。同じ種なのに、大きさという単純な差で集団が分かれることに課題を見いだしたようだ。この状況は山梨県立富士湧水の里水族館でも同様に、水槽を二重にして大型と小型を分けていたことを思い出す。これは体がある程度の大きさになると性差が生じ、行動にも差が生じることが洞察できる。これらの観察で得た材料は、物語を編集する際に奥深いものになると予想する(資料10)。

資料10 水槽③(大型4匹・小型4匹)

全体の観察



大型と小型の2集団



ウ 全3時間をかけた協働による編集作業

上記のイの活動を、全3時間をかけて行った。編集作業はタブレット内にインストールされているアプリ「MetaMoji Classroom」を利用した。これを利用することによって、教師は常時、児童一人一人の作品を個別に確認することができ、助言として書き込むこともできた。また、授業前に電子黒板あるいはタブレットの画面に、全児童の作品を一つ一つ紹介できることから、共有もできる。児童らは物語を編集する際は、集団の中でお互いに作品を確認し合いながら、時には、友だちの観察結果を自分の作品に取り込むという、いわゆる協働活動を重ねた(資料11)。

資料11 動物物語の編集

個別の編集作業



協働での編集作業



7ページまで書き上げた児童

魚の朝は、はやい。ゆったりと水が動く感覚がすれば、仲間が起きている証拠だ。だが、スピードはあまり起きたくなかった。正直にいうと疲れていた。(スピード) 二代目が何やらごちゃごちゃと話しかけてくるが、無視してやった。そのとき、「ふわぁん」と、おいしそうな香りがした。ものすごいスピードでその匂いがするものを「かぶっ」と丸飲みした。(やっぱり、おいしい) 大事な食事を次々と食べていく。スピードの群れは、下に落ちたものを食べるしかない。かわいそうだが。(むしゃむしゃ) そう言って食べてみた。(むしゃむしゃ) 二代目が、まんまるな目をさらに丸くしていった。(知らないのか？人が食べるときに使うコウカオンってやつらしい) (らしいってなんだよ) 二代目が、イライラしたような声でいった。群れは、ハラハラしながら見ているが、二代目は「ギョリ」とスピードを見ながらみつけて、「ふんっ」と言って、はじのほうへいってしまっただ。(昨日はうまく話ができなかったんだ、けどな) 食事が終わった後スピードたちは群れていたが、特になんもせずに、ゆったりしていた。特にすることがないからだ。子供の元気な声が聞こえてきた

もうちょっとで完成ということがとても嬉しかった。

8ページまで書き上げた児童

最後は水の宮殿、ブルーハワイとちびかわは恐る恐る中に入りました。すると入ってすぐに『プロスト熱帯魚』がいました。二匹は「やばいな近づく」と動きが遅なる「うん、しかもすごく寒いね」と言いどんどん進んでいきました。そして真ん中に王が出てきて、魔法の杖でノックバックショットを打って来ました。瞬間移動して撃つてきてを何回も繰り返してました。そこでブルーハワイとちびかわタイミングを見計らって、攻撃をしました。よしあたらしいこれを何回も繰り返して倒すことをできました。そしたらいきなり地面が揺れ始めて、出てきたのは『神秘的な古代のヒラリア』でした。それは地面に消えて出てきたら四匹くらいが増えて囲まれてレーザーを撃つてきたりしました。二匹はもうダメだと思いつつも戦いました。それでも、諦めずに戦いました。そしてもうだめだと思った瞬間、この武器を使って倒すのだ。倒してくるのはお前たちじゃないと言った。大な破滅という武器で、最後の力を降り注ぎ、壮ついに倒せました次のページ

5 今後の課題

小学校第5学年の生命区分で扱うメダカの生態について、山梨県立富士湧水の里水族館と神奈川県立生命の星・地球博物館への訪問をきっかけに、三島市で扱う地域教材として普通種であるオイカワを選択し、さらには児童の観察力を高めるために動物文学を採用したことは新しい試みで、成果を上げたと判断するが、今後の課題として、これらの一連の教育活動を持続可能にしていくには、小学校理科専科教員の確実な配置と、それに伴う予算の確保が必須であると考えられる。

研究題目

地域の未来を賭けた「鳥工版STEAM教育」の実践
～どうすれば「STEAM教育」はうまくいくのか～

目 次

- 1 STEAM教育に取り組むに至った背景
- 2 「鳥工版STEAM教育」の定義
- 3 授業実践の紹介
 - (1) オリジナル小説動画の制作
(文学×地理学・生物学など×芸術×ICT)
 - (2) 虹の色から始める異文化理解
(物理×美術史×科学史×国際文化×ICT)
 - (3) ビジネスプランの企画・提案
(経営学×メディア学×環境学×家庭科×ICT)
- 4 どうすれば「STEAM教育」はうまくいくのか
- 5 終わりに

鳥取県立鳥取工業高等学校 主幹教諭 尾崎 昭彦

1 STEAM教育に取り組むに至った背景

「鳥取県」と聞いて連想するものといえば、おそらく多くの人が「砂丘」と答えるだろう。私も大学時代に上京した際、全国から集まった同級生たちに自分が鳥取県から来たことを告げると、必ず相手から「砂丘」という言葉が出てきたものだ。中には、空漠とした砂漠の中にオアシスのように鳥取市があると思いついていた同級生もいた。

鳥取県は、昭和から平成にかけて、電気機械製造、精密加工技術、電子部品・電子基板、バイオテクノロジー分野など、様々な産業により発展してきた。鳥取市内の工業団地に隣接する鳥取県立鳥取工業高等学校は、1939年の創立以来、それらの地域産業を支える人材を数多く育成してきた。

そんな中、世の中の状況は大きく変化してきた。グローバル化の進展とともに諸外国との競争が激化し、デジタル分野を中心とした技術革新も加速度的に進んできた。鳥取県でも、これまでの産業に加え、DXの推進、脱炭素関連・宇宙・航空などの次世代成長分野の進展など、様々な面での対応が求められるようになった。2023年7月には、起伏や砂の細かさが月面に似ているといわれる鳥取砂丘に、月面探査車の実証実験を行う拠点施設「ルナテラス」が完成し、現在、デジタル技術を駆使しながら高い精度で金属加工を行う企業などが宇宙関連産業に名乗りを上げている。

こうした時代の変革期にあって、地域産業を支え、地域の発展を目指す本校が、どのような人材を、どのような方法で育成するのか、地域の未来を賭けた「鳥工版STEAM教育」について、実際の授業実践を紹介しながら以下に述べていきたい。

2 「鳥工版STEAM教育」の定義

STEAM教育とは、科学 (Science)、技術 (Technology)、工学 (Engineering)、リベラル・アーツ (Arts)、数学 (Mathematics) の頭文字を取った略語であり、これらの異なる学問領域を統合的に取り入れて教育を行うアプローチである。課題に対して、異なる領域の知識やスキルを関連させながら対処していくことで、思考力・表現力・洞察力・技術力・協働力など、様々な力を身に付けることができるとして、2006年頃からアメリカで始まり、その後インド・中国・フィンランドなど各国に広まっていった。

日本でも近年、STEAM教育に取り組む学校が増えてきた。しかし、STEAM教育はその性質上、中学生や高校生にとって非常に難度の高い学習であるため、ややもすれば「地域の課題を扱いさえすればSTEAM教育」「ICT機器を使いさえすればSTEAM教育」「ロボット作りをすればSTEAM教育」「スライドを作って発表すればSTEAM教育」などと安易に考えられたり、「生徒の自主性」という言葉のもと、生徒が探究を深めていくためのサポートを教師が十分にせず、生徒に任せきりにしたりすることがある。

ものづくり人材を育成する本校では、「鳥工版STEAM教育」の定義を「ある物事やテーマについて、複数の学問領域を統合しながら《科学者》のように探究し、最終的に《アーティスト》のように見ごたえのある Art (作品) を創り上げる活動」とし(図1)、

2021年度から取り組んでいる。ものづくりを楽しみ、技術の向上を楽しみ、人の役に立つ喜びを感じるために、教師が生徒たちを全面的にサポートしている。

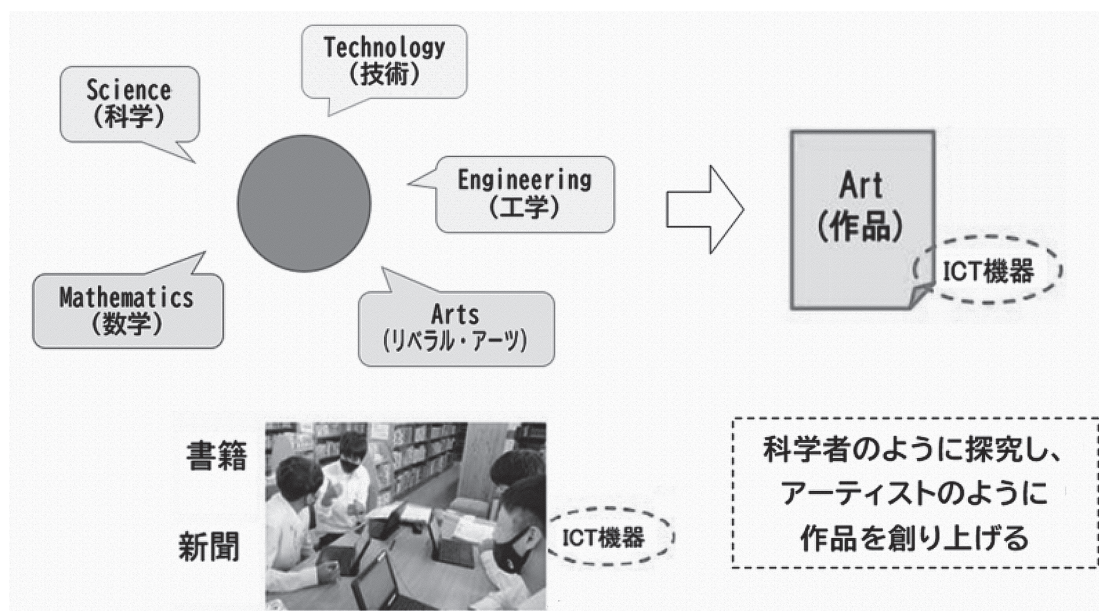


図1 鳥工版STEAM教育

3 授業実践の紹介

私の担当教科は国語であり、2021年度から現任校に勤務し、いずれの年度も3年生の授業を担当している。時代の変革期にあって、地域の発展のために楽しみながら貢献できる人間を育てたい一心でSTEAM教育に取り組んでいるが、ここでは私がこの3年間に実践した授業の中から3例紹介したい。

(1) オリジナル小説動画の制作（文学×地理学・生物学など×芸術×ICT）

第1段階 表現力・想像力を育てる（文学）

芥川龍之介の「羅生門」が国語の教科書に載っている。下人が羅生門の2階に上がり、死体の髪の毛を1本ずつ抜く不気味な老婆を見る場面があるが、その時の下人の様子を表す表現が「六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は息をするのさえ忘れていた。」というものだ。

初めにこの部分を空欄にしたプリントを配付し、どんな表現が入るのか想像させたところ、ほとんどの生徒が「老婆をじっと見ていた」などと入れた。生徒同士で紹介し合った後、実際の小説は先のような表現だと伝えると、生徒たちは「へえ～」となった。他の教材でも同様のプリントを配り、空欄に入る表現を考えさせることを繰り返した。

表現を入れることに慣れてくると、今度は本文を途中までしか載せていないプリントを配り、続きを想像させて書かせた。表現力自体は以前よりも向上しているため、それなりにうまいことは書く。しかし内容は今一つのものが多い。これも後で実際の

小説の続きを紹介すると「へえ～」となった。

2021年9月、私は「そろそろ短い小説なら書けるかもしれない。将来企業や地域のPR動画を制作する生徒もいるだろうから小説の動画化にも挑戦しよう」と考えた。このように、最初からいきなりオリジナル小説動画を制作するのではなく、教科書の教材を中心に表現力や想像力を少しずつ鍛え、その成果として小説執筆や動画制作を行った。

第2段階 小説の執筆(文学×地理学・生物学など)

授業は、小説を執筆しながら調べたいことが出てきた時にすぐに本やパソコンで調べられるよう、ほぼ全ての時間を図書館で行った。話のネタが全く思い浮かばない生徒や、毎日スマートフォンでフリック入力ばかりしているためにキーボードがスムーズに打てない生徒もおり、ある生徒が言っていたが「これは本当に終わらないかもしれない」と思われた。しかし、仲間と意見交換をしながら進めるうちに少しずつ手応えをつかみ始め、授業の50分間があっという間に終わるようになった(図2)。

生徒たちの小説は実に様々であった。中でも東北地方のある漁村の暮らしを描いた小説の「雪国って...なんてあたたかいのだろう」というセリフが強く印象に残っている。今回の活動でよく分かったのだが、小説というのは、地理学や生物学など、話の内容に関連する詳しい情報や知識を入念に調べないと、とても書けるものではない。蝶の一生を描いた生徒は、蝶の生態について書籍やパソコンで熱心に調べていた。東北地方の漁村の暮らしを描いた生徒は、青森県の深浦町という人口約7,000人の小さな漁村を舞台にしていたが、町の歴史(古くから北前船が立ち寄る港であったらしい)、マグロの水揚げ量、日の出日の入りの時刻、希少生物、地理的特徴など、様々なことを調べていた。後で本人から聞いたのだが、役場に直接電話して尋ねたこともあったそうだ。



図2 小説執筆時の意見交換

第3段階 動画の制作(芸術×ICT)

書き上げた小説は、生徒同士で協働しながら動画化した。当然、高校生である生徒たちは自らの生活圏内にしかロケに行けない(ましてや蝶の一生を撮影することなどできない)ため、全場面を映像化するに至らない生徒も多くいた。それでも可能な限り撮影を行い、色彩や音などの演出を工夫しながら、熱心に作品を創っていった。作品と制作過程の一部は、担任、学年主任、保護者などに事前に視聴していただき、コメント動画を収録しておいた(図3)。上映会の最後にそれらのコメント動画がサプライズとして流れると、生徒た



図3 コメント動画

ちはとても驚いていた(図4)。次にオリジナル小説動画の制作の授業を行う時には、大学の芸術系学部と連携したいと考えている。

《科学者》のように探究し、《アーティスト》のように作品を創り上げる。4ヶ月に及ぶ活動となったが、様々な要素を統合しながら作品を創る楽しさを皆が実感した。



図4 作品上映会

(2) 虹の色から始める異文化理解 (物理×美術史×科学史×国際文化×ICT)

グローバル化の進展に伴い、鳥取県内でも外国人の姿を多く見かけるようになった。本校の生徒たちの多くは英語があまり得意でないため、社会に出た時、外国人を相手にしどろもどろになりながら片言の英語で乗り切ろうとする姿が容易に目に浮かぶ。

だが、本校に勤務する外国人指導助手によると、最も大事なことは英語を話せることではなく、グローバルな感性や考え方ができるかどうかだという。そこで、2022年11月、「虹の色」を導入テーマとし、人の認識は時代や国や人によって異なる相対的なものであることを、チームで協働しながら捉えていく授業を行うことにした。

展開1 虹とは何か(物理)

初めに、生徒たちに「虹には色がいくつある?」と尋ねたところ、全員が「7色」と答えた。「何色がある?」と尋ねると、「赤・橙・黄・緑・青・藍・紫」と答えた。

そこで、まずは虹の正体を確認するため、物理担当教師に事前に収録していただいた講義動画(6分間)を皆で視聴した(図5)。動画にした理由は、他のクラスの授業でもすぐに活用できるからだ。動画では、光の三原色、光の分散、色の三属性などについて解説され、これは生徒たちにとって既習内容の復習にもなった。その後、理科室から借りた直視分光器を使い、窓の外の大太陽光を実際に観察した(図6)。理科の授業でも実際に分光器を使ったことはないらしく、生徒たちは楽しそうに分光器を覗いていた。覗いている生徒に「何色に見える?」と尋ねると「7色? いや切れ目がない?」と言っていた。初めは虹は7色だと言っていた生徒たちだが、講義動画や分光器による観察を通して、虹は太陽光が雨粒によって分散し、空中に色づいた弧が現れる現象であること、そして本来的に分け目のない「光の連続スペクトル」であることを少しずつ理解したようであった。また、講義動画を収録した物理担当教師が、「授業後に生徒たちがお礼を言い



図5 物理講義動画



図6 分光器で太陽光観察

に来てくれて、とてもうれしい」と話していたのが、思いがけない副産物となった。

展開2 昔の人も虹の色を現代人と同じ色分けで見ていたのか(美術史)

昔の人々も現代の我々と同じように虹を7色に見ていたのだろうか。その手掛かりを知るため、各チームで国立国会図書館・国立公文書館などの各サイトにアクセスし、江戸期の歌川広重「東都名所芝愛宕山上之図」や歌川国芳「春の虹げい」「東都名所駿河台」などの虹の絵、天体について記述された司馬江漢著『和蘭天説』、大正期の版画家・川瀬巴水「加賀八田秋の虹」などを確認することにした(図7)。



図7 『和蘭天説』の解説

その結果、江戸期の絵では虹が4～5色で描かれ、『和蘭天説』でも虹は5色と説明されているのに対し、大正期の版画では7色で描かれていることが分かった。つまり、わずか80年で虹の色が2色ほど増えたことになる。

展開3 ニュートンの光学は人々の虹の色の見方にどんな影響を与えたか(科学史)

江戸期から大正期にかけて虹の色が増えた理由について、ある生徒が「明治期に西欧文化や学問が日本に入ってきたことと関係があるかも」と話した。そこで、1704年にイギリスで発表されたニュートンの光学研究書『オプティクス』を皆で調べることにした。

その結果、それまでイギリスで3～5色とされていた虹の色を音楽(当時の主要な学問)の7音階と結びつけるために、ニュートンが意図的に7色にしたことが判明した。念のため、明治期の富士越金之助著『小学色図解』を国立国会図書館のサイトで調べると、虹は7色と記されており、増えた2色はまさにニュートンが増やした色と同じであった。さらに、ニュートンの発表から約130年後に書かれたアメリカのメアリー・スウィフト著『理学初歩』においても、同様に7色と記されていることが分かった。

展開4 他の国々の人々は虹の色をどう見ているのか(国際文化)

次に、海外の人々は我々と同じように虹を7色だと思っているのか、チームで調べてみることにした。あるチームは、アメリカ出身の外国語指導助手に、虹の色の数を英語でインタビューした。「How many colors make up a rainbow?」などと尋ねるべきところを、英語の苦手なその生徒は「What」と言ったきり沈黙し、友達から苦笑いされたが、「color」「rainbow」という2つの単語を続けたところで、その指導助手は質問内容を察したらしく、笑顔で「seven」と答えていた。別のチームは、鈴木孝夫著『日本語と外国語』の記載内容を調べ、国や人によって4色や6色などのばらつきがあるが、科学・教育レベルでは7色とする傾向が強いことを突き止めていた。

展開5 日本(語)と外国(語)の間でイメージや範囲の異なる例を調べ、ポスターを作る(ICT)

同じ虹を見ていながら国や時代などにより色の数が異なるということは、例えばどこからどこまでを「青」と呼ぶのか、その範囲が国や時代などによって異なることを意

味する。それは、人間が無意識に、自らの母語とそれにもとづく感覚によって世界を区切り、色を分け、そしてそれが最も自然な分け方だと思っていることにほかならない。生徒たちはこれまでの学習を通じて、そのことを少しずつ理解していた。

虹の色のように、同じような言葉でありながら日本(語)と外国(語)の間で思い浮かべる範囲が異なる例について各自が調べ、タブレットでポスターを制作した(図8)。完成後は、一人ずつ発表して相互評価し、ポスターを図書館内に展示した。最後に、教科書掲載の今井むつみ著「言葉は世界を切り分ける」を読んだ。難しい文章だが、生徒たちはこれまでの学習と重ね合わせながら、実感をもって読むことができた。

虹の色を導入テーマに、物理・美術史・科学史・国際文化と幅広い学問領域を統合しながら「人の認識」について考察し、異文化理解について考え、ICT機器でポスターを制作した。初めは、今回の学習は高校生には難しすぎるのではないかと心配したが、いざやってみると、生徒たちはとても興味をもち、協働しながら熱心に取り組んでいた。探究を深めるためのサポートを十分にすれば、難しい内容であっても生徒たちは主体的に取り組んでいく。「人の認識や感覚は相対的なものである」という視点について、あの手この手で皆で考えることができた。



図8 ポスター制作

(3) ビジネスプランの企画・提案(経営学×メディア学×環境学×家庭科×ICT)

展開1 企業及び課題の決定

2023年5月下旬、10月に開催される鳥取商工会議所主催「ビジネスプランコンテスト」の募集案内が学校に届いた。地元企業が抱える課題について高校生が解決策を考え、提案するというものだ。世の中の役に立つ喜びを実感させるため、参加することにした。

1校につき1～2チームということで、本校からは2チーム参加することになった。学校と企業のマッチングの結果、(株)日本海テレビジョン放送の「どうすれば若者にテレビを見てもらえるのか」、鮮魚仲買業の(株)魚倉の「どうすれば自社のYouTube動画の再生回数が伸びるか」という課題について、それぞれ取り組むことになった。

展開2 「高校生のためのビジネスプラン作成講座」への参加(経営学)

生徒たちはビジネスプランを作成したことがなく、どう進めていこうか思案していたところ、8月に行われる日本政策金融公庫主催「高校生のためのビジネスプラン作成講座」の案内が運良く届いた。生徒たちは、講義や演習を通して、起業家精神、やりたいこと・社会が求めていること・達成のためのできることの3観点

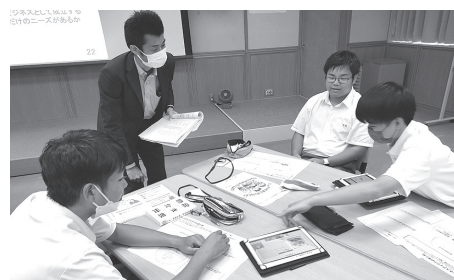


図9 ビジネスプラン作成講座

からの思考、様々な手段による情報収集など、ビジネスプランを作成する上での基本について学んだ。そして、講師に積極的に質問したり、自分たちの考えや思いを伝えたりしていた(図9)。

展開3 ビジネスプラン作成(メディア学×環境学×家庭科×ICT)

(株)日本海テレビジョン放送チーム(4名)

夏休みに日本海テレビ本社を訪問し、地域の情報生番組「おびわんっ」の撮影を見学した。途中、ディレクターの計らいで、急きょ番組にも出演させていただいた(図10)。見学を終えた生徒たちは、「画面を通して見るのと現場を直接見るのでは全く違う。日本海テレビに対する印象が変わった」と話していた。その後の編成部の方々と情報交換で、「テレビ局もいろいろ努力しているが、若者の視聴の中心がYouTubeになっている。どうすればテレビを見てもらえるのか、若者の視点でアイデアがほしい」と言われた。生徒たちは緊張していたが、「難しい課題だが面白そうだ」という反応であった。

まずは若者のテレビ視聴の実態を知るため、本校の生徒100人に対してGoogle formsでアンケートを行った。その結果、「大半の生徒がテレビよりYouTubeを見る時間の方が圧倒的に長い」という予想通りの結果であったが、「民放局でどんな番組があれば見たいか」という質問に対しては、「地元」「知り合い」「母校やいろんな学校」「面白い」といったキーワードを挙げた人数が多かった。また、県立図書館でメディア学に関する本を借り、基礎知識を蓄えていった。

ビジネスプラン作成講座で学んだこと、撮影見学や情報交換で感じたこと、アンケート結果から考えたことなどを統合しながら生徒同士で毎日検討し、編成部の方々とも協議を重ね、企画書が完成した(図11)。生徒たちは「このプランなら必ず若者の視聴率が上がり、また他校の生徒たちと将来どこかの業界で出会ったとき、再び一緒に鳥取を盛り上げることができます」と語っていた。その後、編成部の方々から助言をいただきながら質の高いスライドを作り上げ、プレゼンテーションの練習を何度も繰り返した。教師の私よりも企業関係者の方から実際に良い点



図10 日本海テレビ訪問

- 中高生対象のスタジオ見学・アナウンス部との交流イベントを定期的開催
- 鳥取～島根の中高生が番組を制作・出演
【番組名：学校って、いいじゃん!】
日曜夕方(15分間、2～3コーナー)
(1) 学校から学校へのリレー創作ドラマ
(2) 高校生が立ち寄る学校近くの店をレポート
(3) 鳥取の名産品を使ったアイデア料理対決
(4) eスポーツ最強校決定
(5) 自分の変わった趣味自慢
- 番組に出る学校はSNSや校内放送などで宣伝

図11 日本海テレビ企画書(概要)

や改善すべき点などを指摘される方が説得力があるらしく、生徒たちの思考力や表現力、そして向上心が高まり、日々成長していくのが目に見えて分かった。

(株) 魚倉チーム(3名)

7月、生徒たちは課題の詳細を聞くために企業を訪問し、専務取締役と面会した。「魚の魅力を発信するためにYouTube動画『魚倉ちゃんねる』を配信しているが、再生回数が伸びない。どうすれば再生回数が伸びるか」という話であった。

生徒たちは、「ビジネスプラン作成講座」で学んだことを生かし、まずは誰が何を求めているのかについてまとめた。魚倉は「チャンネル動画の再生回数の増加」、高校生は「人に認めてもらえる場・挑戦する場」、主婦層は「魚を調理した後の生ごみの処理」、社会全体は「SDGs」と考えた。

とはいえ、具体策がなかなか見出せない中、まずは何か挑戦してみようということので、YouTube動画「魚倉ちゃんねる」に出演することにした。1本目の動画は「高校生がハマチを捌く」(魚を捌いたことのない生徒がハマチ捌きに挑戦する)、2本目の動画は「鳥取工業高校の生徒がタバコ〇〇を…」(生徒がタバコニシ貝の料理に挑戦する)であった。それと同時進行で、「魚倉ちゃんねる」を多くの人に見てもらうための方策を毎日検討し、魚とSDGsが結びつくヒントを得るために環境問題の書籍や新聞を読み、その結果、「骨せんべいづくり」を軸とする企画書が完成した(図12)。

- 魚倉と高校生が協働で「魚の骨せんべいづくり」に挑戦するYouTube動画を制作
 - ・油で揚げる時のおいしそうな音
 - ・魚の種類や味付けによる違い
 - ・タグ多様化「魚」「食品ロス」「揚げ音」「骨」
- 魚倉との共同開発による骨せんべいの商品化【商品名】SDGsに貢献する地魚骨せんべい(受験シーズンSuccess is born by bone!)
 - ・スーパーのお酒売場、海産物売場などで販売
 - ・パッケージに魚倉ちゃんねるのQRコード(骨せんべい誕生秘話を含む)

図12 魚倉企画書(概要)

9月8日、生徒、家庭科教師、専務取締役など約10名が調理室に集まり、生徒たちが考えたこの動画を撮影した(図13)。以前のハマチ捌きの経験が生きたのか、鰹や鯖を捌く手つきも慣れていた。「魚倉ちゃんねる」の他の動画の再生回数が約120回なのに対し、高校生が骨せんべいを作るこの動画は1ヵ月間で約250回と倍増した。その後、こちらも専務取締役から助言をいただきながら、質の高いスライドを作成した。



図13 骨せんべいづくり撮影

展開4 「鳥取YEGビジネスプランコンテスト」当日

10月9日、とりぎん文化会館のホールにて「鳥取YEGビジネスプランコンテスト」が開催された。多くの企業関係者が見守る中、両チームとも堂々とプレゼンテーション

を行った。その結果、日本海テレビチームが優勝候補の強豪校を抑え、見事優勝した(図14)。社会の役に立つ喜びを皆が実感することができた。



図14 日本海テレビチーム優勝

4 どうすれば「STEAM教育」はうまくいくのか

3年間の経験をもとに、STEAM教育がうまくいくためのポイントを4つ挙げたい。

(1) 自分の授業のどこがSTEAM教育なのか、明確に説明できるように

漠然と「地域の課題を扱えばSTEAM教育」「スライドを作って発表をすればSTEAM教育」とならないよう、自分の授業のどこがSTEAM教育なのか、理由を明確にする。

(2) なぜその学問領域を扱うのか、必然性を明確に

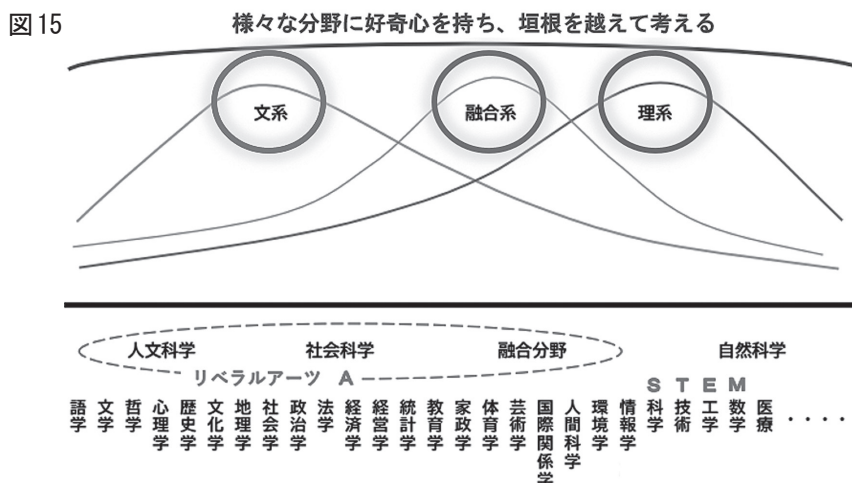
「このゴールに向かって探究する上で、どうしてもこの学問領域が必要だからやる」という必然性を明確にする。そうしないと、本筋とはあまり関係のない些細な事柄まで無理矢理扱うなど、教科を横断することそれ自体が目的化するおそれがある。

(3) 自主的に学ぶとはいかないまでも、主体的に学ぶための準備を

教師が何を言わずとも生徒が自主的に学ぶ、というのが理想だが、内容が難しくなればなるほど、なかなかそううまくはいかない。国会図書館のサイト、他教科教員の講義動画など、探究する上で効果的なものを要所要所に組み込むことにより、文系は得意だが理系は苦手な生徒も、その逆の生徒も、様々な分野に好奇心を持ち、垣根を越えて考えられるようになる(図15)。「自主的に」は難しくても「主体的に」学ぶことができる。

(4) 企業や大学などの声は、生徒に新たな視点を与える

実際に外部の方と意見交換を行うことで、生徒たちは学校では学べない新たな見方に気づく。企業や大学主催のコンクールなどを契機に繋がりを作るのも一つの手である。



5 終わりに

10年ほど前、県内のある高校で進路面談をしていた時のことだ。ある生徒に、どの大学を志望するのか尋ねると、その生徒は「私は歴史学を学びたいので、島根大学を志望します」と答えた。私が「歴史を学ぶのなら京都の大学がいいのでは？」と尋ねると、その生徒はこう言った。「先生、平安時代に都があったのは京都ですよ。平安時代の畿内に日本全体の人口の何%の人が住んでいたと思いますか？ それから、江戸時代の関東に日本全体の人口の何%の人が住んでいたと思いますか？ 実は両方とも当時の日本全体の10%の人しか住んでいないんです。日本史の授業で、ごく限られた地域の、しかも表舞台に出たごく一部の人たちのことだけを習って、これで日本史を学んだと言えますか？ 地方の村にもそれぞれの営みがあったはず。私はそれを学ぶために島根大学に行きたいのです」と言った。私は返す言葉がなかった。その生徒は現在、とある施設で研究員として働いているそうだ。

探究する上で、情報を得るスキルを身に付けることは大事である。だが、それ以上に大事なのは、他の人が目を向けられないものに気づき、目を向ける姿勢だと私は考えている。人は往々にして、自らの感覚や思考が最も自然だと思い込み、1つの情報だけに飛びつき、満足してしまうことがある。その情報が「世の中の主流」と見なされているものであれば尚更である。島根大学を志した生徒は、他の人が目を向けられないような地方の暮らしに目を向け(その意味ではオリジナル小説で青森県の漁村を描いた生徒も同じだが)、歴史に対する学びを深めていった。

1つの情報だけに飛びつき、ものづくりをしたところで、出来上がりは似たり寄ったりのものとなり、また特定の分野にばかり目を向けることに慣れてしまうと、将来的に様々な分野の専門家や企業関係者との交流のチャンスを失うことにもなる。そうになると、地域の発展どころか、その人自身も地域全体も、現状維持にはなるかもしれないがそれ以上になることはできない。

ビジネスプランコンテストを通じて縁のできた鳥取商工会議所と連携し、2023年度中にもう一つ、生徒たちと「鳥工版STEAM教育」に取り組むよう、現在計画中である。とはいえ、生徒たちが高校で取り組んでいる学習活動やその成果が、リアルタイムで社会の役に立つことはほとんどなく、高校生活の中で活動し、考え、感じた経験が種となり、社会に出てから花開くものである。生徒たちは、「鳥工版STEAM教育」の取り組みの中で、様々なもの、様々な分野に目を向け、試行錯誤しながら作品づくりを楽しみ、技術の向上を楽しみ、互いに助け合う喜びを経験している。生徒たちの中に宿った種が、社会に出てさらに養分を吸収し、大輪の花となり、時代の大きな変革期の中を向日葵のような笑顔で地域の発展のために活躍することを信じている。

研究助成にかかわる選考委員

- 阿 部 恵 次 (前(公財)東京海上日動教育振興基金 常務理事)
- 阿 部 聡 一 ((公財)東京海上日動教育振興基金 常務理事)
- 安 藤 駿 英 (全国連合小学校長会顧問)
- 大 江 近 (元全日本中学校長会 会長)
- 小 栗 洋 (元全国高等学校長協会 会長)
- 亀 井 浩 明 (帝京大学名誉教授)
- 嶋 野 道 弘 (元文部科学省初等中等教育局視学官)
- 田 村 学 (國學院大学 人間開発部 教授/元文部科学省初等中等教育局視学官)
- 土 山 和 久 (大阪教育大学 教授)
- 宮 川 八 岐 (元文部科学省初等中等教育局視学官)
- 森 正 樹 (元(公社)日本教育会 専務理事)

五十音順 (11名)

公益財団法人 東京海上日動教育振興基金

〒104-0061 東京都中央区銀座5-3-16

日動火災・熊本県共同ビル

電話 03-5537-6375

FAX 03-3573-0177

(<http://www.tmn-kyoiku-sinko-f.org>)

